

田沼肇全活動





第10回原水爆禁止世界大会で被爆者代表の渡辺千恵子さんをかかえてデモ行進を激励する('64・8)京都。(撮影/森下一徹)

田沼肇 全活動 もくじ

はじめに 6

I 部

田沼肇 全活動 著作・執筆年表	10
田沼肇の執筆活動について…………… 藤新太郎…………	83
〔付記〕民主主義科学者協会（民科）の活動	90
田沼肇について…………… 上田誠吉…………	92
慎獨寮時代…………… 高野源明…………	97
調査統計局のなかま…………… 浅野 径…………	105
田沼肇 略年譜 田沼肇 アルバム	110
田沼さんの優しさと強さ…………… 橋本 進…………	114

II 部

労組, 民主的組織の講師・助言者活動など	120
田沼先生と私…………… 伊藤和子…………	142
千葉県職労女性部と田沼先生…………… 藤しず江…………	144
「現代社会研究所」をつくられた頃…………… 三階泰子…………	146
忘れ得ぬ「二つのこと」…………… 葛岡 章…………	149
田沼先生から教わったこと…………… 前田啓一郎…………	151
原水爆禁止・被爆者援護・第五福竜丸保存の活動	154
「被爆者とともに」の運動…………… 赤松宏一…………	164
被爆者とともにあることの意味…………… 山村茂雄…………	168
「被爆者を友人に」の言葉をかみしめて…………… 安田和也…………	175
人生を決めた出会い…………… 伊藤直子…………	177
長崎の被爆者に聞く	179

日本フィル・日本フィル協会闘争支援 「ハート」を大事にした人	198	186
平和と革新をめざす東京懇話会の活動 この手に革新統一を！	角倉洋子	200
田沼肇の学究生活について	竹下睿麒	210
研究所研究員として	210	
大学教員として	212	
大学紛争の解決めざして	213	
学部長として多摩移転に取り組む	216	
教務関係の仕事も	220	
二つの組合の役員として	221	
兼務校での仕事その他	229	
むすびにかえて	230	
田沼肇先生の研究業績について	嶺 学	232
1 調査統計論	232	
2 階級構成論	234	
3 社会政策・労働問題一般	235	
4 労働運動史	236	
「二世」の息苦しさ	田沼正平	239
肇さんありがとう	田沼祥子	244
あとがき	254	

はじめに

田沼肇，没後 10 年。

この企画「田沼肇全活動」「田沼肇著作集」(DVD版)は，祥子夫人によって発起された。彼女自身長年編集に携わってきた者として培かれた感性が衝き動かしたと思われる。

田沼肇は敗戦直後から 20 世紀の終わりまでの 50 数年，一貫してマルクス主義の立場で理論はもちろんのこと実践では平和と民主主義，人権擁護など幅広い運動の場で，人民とともにたたかってきた。専門は社会政策。

これまで学者・知識人にとっての「著作集」はめずらしいことではないが，本書のように「全活動」の記録というのは稀れなのではなかろうか。したがって(「著作集」DVD版と合わせて)企画の意図は，人間・田沼肇の特長を客観的にみることになる。

「全活動」の構成は大別して二つに分けた。理論分野に相当する「著作・執筆年表」をⅠ部にし，その他の実践活動をⅡ部とした。

Ⅰ部は敗戦後まもない東京の焼野原の中で生活する人々の調査から始まる。その題名は『立ちあがる人々—塚舎生活者・浮浪者の実態調査』で，東京大学学生社会科学研究会の仲間とまとめあげている。それが田沼のスタートだ。弱冠 20 歳，1946 年のことである。

その後，活躍の場をジャーナリズムに移し，戦前の進歩的ゆえに廃刊を余儀無くされた雑誌「学生評論」を復刊し編集人代表になっている。そして 50 年代半ばから 60 年代前半は，気鋭の論客の一人として執筆ばかりでなく座談にも数多く登場している。ある雑誌には当時，揶揄とはいえ「法大マルクス学派 4 人組」とイラスト入りで紹介されたこともあった。田沼の真骨頂の時代であろうか。

ちなみに，原稿や座談会・鼎談・対談など 58 年に 44 本，59 年 42 本，60 年 45 本，61 年 44 本，62 年 39 本と 5 年間は 1 年平均 43 本になる。たいへんなエネルギーだ。

Ⅱ部は田沼の本領ともいえる運動の分野になる。ここでは田沼が運動に加

わった年代順に配置した。戦後まもなく設立された民主主義科学者協会の活動(これは田沼の活動を記録した資料が乏しく [付記]にとどめた)から始まる。

(1)「労組、民主的組織の講師・助言者活動など」は、田沼のもっとも特長的な活動といえる。これは多岐にわたっていて、オルガナイザー的側面を垣間見ることができる。

(2)「被爆者問題」の田沼といわれ、また田沼の代表的な活動の一つ「原水爆禁止・被爆者援護・第五福竜丸保存の活動」である。特に原水爆禁止運動は世界情勢に左右されたり、日本の革新勢力の運動の統一がいかにもむずかしいかを物語っていて、田沼が苦勞したであろうことがうかがわれる。

(3)「日本フィル・日本フィル協会闘争支援」は、おおよそ交響楽団、音楽には無縁と思われる田沼が、日本フィル労組支援をしながら何か“人間らしさ”を求めて楽しんでいるように思われる。人間にとって文化・芸術の大切さを再認識したのだろうか。

(4)最後は「平和と革新をめざす東京懇話会の活動」で、これは田沼が生涯をかけていた統一戦線の運動だ。「人間講座」など独自に地道で基本的なことを大事に進めようとした矢先に難病にとりつかれ、無念の極みであろう。

さらに、職務になる法政大学での学究生活、学校での果たした役割をたどった。

各活動には同時期田沼と共に活動した人、あるいは教えを受けた者の一文を挿入し、より理解度に厚みをもたせた。寄せられた方々に感謝申し上げる次第である。家族(夫人、子息)から寄せられた温かい文章は、人間・田沼肇を如実に語っている。

田沼肇は大丈夫であった。

凡 例

- ◎ I 部, 各年の政治・社会等に関する略年表は『近代日本総合年表』第四版, (岩波書店)によるところが多い。(担当/梅津勝恵)
- ◎ I 部, 「田沼肇 全活動 著作・執筆年表」は, 田沼の還暦を記念して(1986年4月18日現在)作られた「田沼肇執筆目録」(製作者, 五十嵐明子)を増補改訂した。(担当/藤新太郎)
 - 1) 収録範囲 1946年から2000年3月までの刊行図書, 雑誌・新聞に掲載された論文・記事・書評, およびパンフレットなど。
 - 2) 記述
 - ・単行書は, 書名, 出版社, 刊行年月, 叢書名, 注記の順, 共著者は書名の後に共著者名を明記した
 - ・単行書の一部, 雑誌論文, 新聞掲載文は, タイトル, 書名または雑誌名, (単行書のみ出版社)巻号, 注記, 発行月日の順とした
 - ・単行書は「」, 雑誌・新聞の誌紙名は「」で表記した
 - ・パンフレット, リーフレット等は文末に()で表記した
 - ・書評, 対談, 座談会等はタイトルの前に〈 〉で表記した
 - ・対談者, 座談者名は, 注記で——と, あるいは——ほか, とした
 - ・雑誌・新聞の巻号は()で表記したものもあるが, おおよそは文末の発行月日のみとした
 - ・新聞, 雑誌の発行所は割愛した→必要な方は, 「著作集」(DVD)の「収録新聞・雑誌一覧」を参照ください。
- ◎ II 部「労組, 民主的組織の講師・助言者活動など」は, 田沼が残した手帳, 通知文・メモ等をもとに作成した。(担当/藤新太郎)
- ◎「原水爆禁止・被爆者援護・第五福竜丸保存活動」は, 安田和也, 山村茂雄が作成した。
- ◎「日本フィル・日本フィル協会闘争支援」は, 『日本フィル物語』(音楽之友社, 1984年刊), 機関紙「市民と音楽」(いずれも日本フィルハーモニー協会編集)をもとに作成した。(担当/梅津勝恵)
- ◎「平和と革新をめざす東京懇話会の活動」は, 田沼の手帳, 通知文, メモ等によって作成したものを角倉洋子が加筆した。(担当/藤新太郎)
- ◎ 年号は基本的に西暦を用いた。
- ◎ *印は, 注, ならびに注記(I, II部共通)。



第21回原水爆禁止世界大会国際予備会談で開会の辞をのべる(75・8・1)

I 部

田沼肇 全活動 著作・執筆年表

1946(昭和21)年 1・1 天皇, 神格化否定の詔書「人間宣言」. 1・4 GHQ, 軍国主義者等の公職追放, 超国家主義団体の解散命令. 1・12 民主主義科学者協会設立. 2・17 金融緊急措置令(新円発行, 金円封鎖). 3・5 英首相チャーチル「鉄のカーテン」演説(冷戦のはじまり). 4・20 財閥解体の開始. 5・1 第17回メーデー(11年ぶり, 皇居前広場に50万人). 5・3 極東国際軍事裁判開廷. 5・19 飯米獲得人民大会(食糧メーデー). 10・21 第2次農地改革はじまる. 11・3 日本国憲法公布.

- 1) 〈座談会〉生活を求める群一浮浪者調査報告(東京帝大社会科学研究会)「言論」1(3) *氏原正治郎. 井出洋. 高橋洗. 上原信博ほかと 4・
- 2) 壕舎生活者の動向「起ちあがる人々一壕舎生活者・浮浪者の実態調査」東京帝国大学社会科学研究会編 学生書房 11・

1947(昭和22)年 1・18 全官公庁共闘「2・1スト」宣言. 1・28 吉田内閣打倒・危機突破国民大会, 皇居前広場に30万人参加. 1・31 GHQ 最高司令官マッカーサー「2・1スト」中止指令. 5・3 日本国憲法施行. 5・20 吉田内閣総辞職. 6・1 片山哲内閣成立(社会・民主・国民共同の3党で). 8・9 古橋広之進400m 競泳自由形で世界新記録. 8・15 インド独立. 10・10 キーナン検事, 天皇と実業界に戦争責任なしと言明. 12・22 改正民法公布(家制度廃止). 12・31 内務省解体.

- 1) 「学生評論」4(1) 学生書房 *編集人代表 1・10
- 2) 野底山の碑 「学生評論」4(6) *ペンネーム・青山一郎 12・

1948(昭和23)年 1・6 米陸軍長官ロイヤル, サンフランシスコで日本を反共の防壁にすると演説. 2・10 片山内閣総

辞職。3・10 芦田均内閣成立(民主、社会、国民共同の3党連立)。6・23 昭和電工社長、贈賄容疑で留置(昭電疑獄事件)。8・15 大韓民国成立(初代大統領に李承晩)。9・9 朝鮮民主主義人民共和国成立(首相に金日成)。10・7 芦田内閣総辞職。10・19 第2次吉田内閣成立。11・12 極東国際軍事裁判所、戦犯25被告に有罪判決、東条英機ら7人に死刑(12・23執行)。

- 1) 〈ルポルタージュ〉炭鉱地帯をゆく一高萩から湯元まで―「日本評論」23 (3) *執筆名なし 3・
- 2) 新しい大学の建設 「学生評論」4(8) (再刊10) 3・
- 3) 〈ルポルタージュ〉社会科と子供たち 「日本評論」23 (5) *執筆名なし 5・
- 4) 〈座談会〉生き残ったわれら―『東大戦没学生の手記』をめぐって 「日本評論」23(6) 6・
- 5) 〈座談会〉中小商業問題をめぐる座談会 「商工時報」3 (10) *鈴木武之助、生田豊朗と編集 10・
- 6) 『調査課報告:国際貿易機構(ITO)について』商工省調査統計局調査課 *商工事務官として執筆。以下同じ 12・

1949(昭和24)年 4・4 北大西洋条約機構(NATO)成立。4・25 1ドル=360円の単一為替レート実施。7・5 国鉄下山総裁行方不明、翌朝、轢死体で発見(下山事件)。7・15 中央線三鷹駅で無人電車暴走(三鷹事件)。8・17 東北本線金谷川・松川間で列車転覆(松川事件)。9・7 ドイツ連邦共和国(西ドイツ)成立。10・1 毛沢東主席、北京天安門広場で中華人民共和国成立宣言。10・7 ドイツ民主共和国(東ドイツ)成立。10・20『きけわだつみのこえ』刊行。

- 1) メーカー特集「オメデーター」調統新聞 復刻版 元通商産業省調査統計局細胞 5・1
- 2) 「紙風船」をめぐって 『紙風船』をよんで』調統新聞 復刻版 元通商産業省調査統計局細胞 5・16

- 3) 「調査課報告:産業危機の分析」 通商産業大臣官房調査統計部調査課
*金森久雄、生田豊朗と共同執筆。 6・
 - 4) 「調査課報告:有効需要の減退について」 通商産業大臣官房調査統計部調査課 7・31
 - 5) 各課めぐり No.2 通商企業局企業課「通産時報」4(10) 10・
-

1950(昭和25)年 1・6 コミンフォルム、日本共産党指導者野坂参三の平和革命論批判。1・15 平和問題談話会「講和問題についての声明」(「世界」3月号)。1・19 社会党分裂、左派は鈴木茂三郎書記長、右派は片山哲委員長。2・9 米上院議員共和党のマッカーシー、国務省に57人の共産党員がいると演説(マッカーシー旋風の始まり)。3・15 世界平和擁護大会原子兵器の絶対禁止を求める「ストックホルム・アピール」発表。6・6 マッカーサー、共産党中央委員24人の公職追放指令。6・25 朝鮮戦争始まる。7・11 日本労働組合総評議会(総評)結成。7・24 言論機関をはじめ各企業のレッドパージ始まる。8・10 警察予備隊令公布。12・7 池田勇人蔵相「貧乏人は麦を食え」と暴言。

1951(昭和26)年 1・24 日教組「教え子を再び戦場に送るな」の運動方針決定。2・23 共産党、武装闘争方針を提起。3・29 メーデーの皇居前広場使用禁止。4・11 トルーマン米大統領、マ元帥を罷免、後任リッジウェイ中将。5・1 皇居前広場の使用禁止により分散メーデーとなる。9・4 対日講和会議サンフランシスコで開く(52カ国参加)。9・8 対日平和条約・日米安全保障条約調印。10・15 朝鮮休戦会谈板門店で再開(会談中も戦闘つづく)。

- 1) 「日本労働年鑑」 法政大学大原社会問題研究所編 時事通信社→東洋経済新報社 1951.2.~1963.12. *執筆・編集に参加 2・
-

1952(昭和27)年 2・20 東京大学で学内の劇団ポポロ座公演会場に警察官潜入、学生側が警察官を摘発(ポポロ事

件). 4・28対日平和条約・日米安保条約発効. 5・1第23回メーデーでデモ隊6000人使用不許可の皇居前広場に結集, 警察官5000人と乱闘, 2人射殺, 1230人検挙される(メーデー事件). 同日, 日本共産党機関紙「アカハタ」復刊. 6・23日教組9回大会で「教師の倫理綱領」を決定. 7・4破壊活動防止法(破壊法)成立. *『歴史と民族の発見』(石母田正著)刊行.

- 1) 世論調査の魔術—その機能と技術について 「自然」7(1) 1・
- 2) 最近における世界労働運動の展望 「世界週報」33(1) 1・1
- 3) 〈書評〉『マルクス主義と統計』上杉正一郎 「新読書」 2・15
- 4) 'とまどう世論'と世論調査 「パブリックリレーションズ」3(4) 4・
- 5) 失業統計の手法—労働力調査批判 「自然」7(4) 4・
- 6) 世論調査と科学 「思想」(334) 4・
- 7) クーシネンの'衛生学' 「立教大学新聞」 4・30
- 8) 『日本経済50の疑問』 理論社 *第20問. 第21問を執筆 6・
- 9) 「学習の友」創刊号に寄せて 「学習の友」 10・
- 10) 統計的にみた再軍備世論 「中央公論」 11・
- 11) 「人口理論」と統計—日本人は多すぎるか 「自然」7(11) 11・
- 12) 糸姫とヤマトナデシコ(私達の教室) 「全蚤労連」(74) 11・20
- 13) 平凡という名の雑誌(私達の教室) 「全蚤労連」(75) 12・5

1953(昭和28)年 6・7コペンハーゲンでの世界婦人大会に赤松俊子参加(67カ国, 7000人). 7・27朝鮮戦争休戦協定調印. 8・5電気事業および石炭鉱業における争議行為の方法の規制に関する法律(スト規制法)成立. 8・7公布, 即日施行. 9・21『日本資本主義講座』(10巻別巻1, 岩波書店)刊行開始. 10・2吉田茂首相の私設特使池田勇人, 米国務事官補ロバートソンと防衛問題について会談, 日本の自衛力増強で一致(池田・ロバートソン会談). *『アンネの日記』(アンネ・フランク著, 皆藤幸蔵訳)刊行.

- 1) 失業者の生態 「経済新潮」創刊号 1・

- 2) シューベルトの魅力(私達の教室) 「全蚕労連」(78) 1・20
- 3) 左まき・左まえ・左ずま(私達の教室) 「全蚕労連」(79) 2・5
- 4) 誰がための民主主義(私達の教室) 「全蚕労連」(80) 2・20
- 5) (第4章マルクス理論の展開)のブック・リスト作成 『近代経済学史』 杉本榮一著 岩波全書175 3・
- 6) 桃の節句のヒナ人形(私達の教室) 「全蚕労連」(81) 3・5
- 7) スターリンの私生活(私達の教室) 「全蚕労連」(82) 3・20
- 8) ランドバーグ『社会調査』に寄せて 「TUP通信」(11) 4・
- 9) 現段階における搾取と抑圧の機構 「経済評論」2(4) *黒川俊雄と共同執筆 4・
- 10) 平和の歌声よひびけ! (私達の教室) 「全蚕労連」(84) 4・20
- 11) 原子力国際管理に関する年表(I~III) 「自然」8(5) ~9(7) 1953.5.~1954.7. *東山登と共同執筆 5・
- 12) 無産の民よケッキせよ(私達の教室) 「全蚕労連」(85) 5・5
- 13) 首切役の自動繰糸機(私達の教室) 「全蚕労連」(86) 5・20
- 14) 1952~3年における労働者の状態 『日本経済四季報』第1集 日本経済調査会編 大月書店 6・
- 15) 金持ちは平和がこわい(私達の教室) 「全蚕労連」(87) 6・5
- 16) 「洗脳」療法のききめ 「人民文学」 7・
- 17) 悲しみと同時に怒りを一ローゼンベルグ夫妻の死— 「人民文学」 8・
- 18) 窮乏日本の実態を解く 「科学朝日」 *堀江正規・黒川俊雄・牧村譲と共同執筆 8・
- 19) 合理化による搾取 『日本平和経済の理論』 日本労働組合総評議会編 青木書店 8・
- 20) 日経連の賃金政策について 「月刊炭労」(46) 8・
- 21) 〈共同研究〉崩壊に瀕した日本経済とその出路 「改造」34(10) *宇佐美誠次郎・堀江正規ほか4名と 8・
- 22) 「良心的」という意味 「人民文学」 9・
- 23) 労働条件 『労働経済四季報』第1集 労働経済研究会編 労働経済社 10・

- 24) 労働者のみなさんへ 「日本資本主義講座」月報2 岩波書店 *執筆名なし 10・
- 25) 働くものの無権利状態 「全銀連調査時報」(39) 11・
- 26) 〈討論〉合理化攻勢と争議一日産の場合 「改造」34(13) *遠藤湘吉, 北田芳治, 黒川俊雄ほかと 11・
- 27) 労働運動 「日本経済四季報」第3集 日本経済調査会編 大月書店 12・

1954(昭和29)年 2・11 米軍九十九里浜沖で操業中の漁船40隻に実弾威嚇射撃, 3・1 第5福竜丸, ビキニの米水爆実験で被災(乗員23人全員が原爆症と判定), 3・8 米国と相互防衛協定(MSA協定)調印, 6・8 警察の一元化で中央集権化を強める「改正警察法」公布, 6・9 保安隊を改組, 陸・海・空3軍方式に拡大「防衛庁設置法・自衛隊法」公布, 8・8 原水爆禁止署名運動全国協議会結成, 事務局長安井郁(5・9結成の杉並協議会が発端), 12・7 吉田内閣総辞職, 鳩山一郎が新首相。

- 1) 戦後日本資本主義年表 「日本資本主義講座—戦後日本の政治と経済」別巻 岩波書店 *作成に協力 1・
- 2) 戦後労働運動史 「日本資本主義講座—戦後日本の政治と経済」第7巻 岩波書店 *共同執筆 3・
- 3) '労働者階級の状態'について 「『日本資本主義講座』月報」(9) *大友福夫, 坂寄俊雄, 黒川俊雄と共同執筆 6・
- 4) 〈討論〉賃金闘争の新段階 「国民」(3) 6・
- 5) 統計の斗い (パンフ・総評シリーズ10)日本労働組合総評議会 *相原茂ほかと分担執筆 7・
- 6) 日本資本主義研究の問題点—戦後労働運動史について 「理論」(24) 7・
- 7) 戦後労働組合運動のうねり 「図書新聞」7・10, 17
- 8) 戦後日本における国民所得統計 「日本資本主義講座」第9巻 岩波書店 *上杉正一郎, 廣田純と共同執筆 8・
- 9) 総評大会に注がれた労働者の目 「歴史評論」(58) 8・
- 10) ギャラップ・ポリズムの危険 「新聞協会報」8・23

- 11) 政府の労働対策の欺瞞性と労働運動 「同盟時報」(140) 9・1
- 12) モニター報告 第207号(1954.11.30) ~ 第214号(1955.1.31) 朝日新聞記事審査部 11・30
- 13) '自由' 諸国とマルサス主義—日本統計学会の討論から 「理論」(29) *ペンネーム・大山勉 12・
- 14) 働く人の論理—雑誌を通してみた労働運動 「図書新聞」 12・11

1955(昭和30)年 2・19日本ジャーナリスト会議創立, 議長吉野源三郎. 5・14ソ連・東欧8カ国ワルシャワ条約調印. 6・7第1回日本母親大会を東京で開く. 8・6第1回原水爆禁止世界大会広島大会開催, 8・15東京大会, 署名国内3238万, 世界6億7000万. 8・13東京・砂川(立川)基地拡張反対の住民支援労組と警官隊とが衝突, 流血(砂川事件). 10・13左右両社会党統一大会を開く. 委員長鈴木茂三郎, 書記長浅沼稻次郎. 11・15自由, 日本民主両党合同して自由民主党結成. *日本経済輸出ブームで「神武景気」.

- 1) 標準賃金のからくり—「職種別等賃金実態調査」批判(パンフ・総評シリーズ2) 日本労働組合総評議会 *分担執筆 4・
- 2) 科学運動の条件と課題 「国民の科学」(2) 4・
- 3) 経済学を勉強している者から 「地球科学」(22) 5・
- 4) 新聞の'世論'と世論調査の世論 「賃金と社会保障」(171) 5・下旬
- 5) 科学者憲章—科学者の権利と義務 予研学友会シンポジウム14 国立予防衛生研究所学友会 6・17
- 6) 〈討論〉統計学の対象と方法—オスカー・ランゲ『社会主義体制における統計学入門』をめぐる 「経済評論」4(8) *有澤廣巳, 中村隆英, 廣田純ほかと 8・
- 7) 〈共同研究〉職種別等賃金実態調査について 「経済評論」4(8) *賃金統計研究会の共同執筆 8・
- 8) 『日本資本主義講座』の検討:労働問題—貧困化の分析を中心に 「経済研究」6(4) 10・

- 9) 労働者階級の貧困化 『経済学講座 第5巻 日本経済』 井出洋と共同執筆 大月書店 10・
- 10) 山一林組の争議 『製糸労働者の歴史』 揖西光速, 帯刀貞代, 古島敏雄ほか著 岩波書店 (岩波新書218) 10・20
- 11) 〈書評〉『剰余価値と利潤』 井汲卓一編 「新読書」 11・27
- 12) 戦後労働運動史における若干の論点 「労働経済旬報」(282) 12・上旬

1956(昭和31)年 2・9衆議院, 原水爆実験禁止要望決議案可決, 参議院は2月10日に, 2・24ソ連共産党20回大会(秘密会)でフルシチョフ書記長, スターリン批判演説, 5・2毛沢東, 中国共産党と民主諸党派間の長期共存, 相互監督を提唱, 「百家斉放, 百家争鳴」運動はじまる, 8・9長崎で第2回原水爆禁止世界大会, 9・23日本フィルハーモニー交響楽団結成披露演奏会, 10・19日ソ国交回復に関する共同宣言(モスクワ), 12・18日本の国連加盟案を全会一致で可決, *前年から水俣湾魚介類常食者の奇病多発, 工場廃水との関連問題化.

- 1) 小堤先生を偲んで 『つくし』特別号 小堤先生追悼 つくし会
- 2) 生むな殖やすな会議—国際家族計画会議の意味するもの 「厚生」 1・
- 3) “美しい女性”になるには 「全蚤文化」(1) 1・
- 4) 生きるための問答室—好景気のかけ声と俺たちの生活 「学習の友」(28) 2・
- 5) 民科組織方針の討論資料—田沼案 「民主主義科学者協会本部速報」(9) 3・
- 6) 常磐炭鉱地帯における失業者運動 『失業者の存在形態—常磐炭鉱地帯の実態』法政大学大原社会問題研究所編 東洋経済新報社 *執筆名なし 3・
- 7) 炭鉱労働者の歴史を書くために 「月刊炭労」(70) *執筆名なし 3・
- 8) 再び民科の目的と組織について 民主主義科学者協会本部速報(10) 4・
- 9) 〈書評〉『製糸労働者の歴史』 揖西光速, 帯刀貞代, 古島敏雄ほか著 「月刊炭労」(71) *執筆名なし 4・
- 10) 『関東合同争議調査記録(1926年8月—1931年3月)』 法政大学大原社会

問題研究所 4・

- 11) 失業・半失業・潜在失業とは 「学習の友」(31) 5・
- 12) この本を読む人のために(序章) ソヴェト統計学論争の経過と意義(Ⅱ章) 統計学の当面する問題(Ⅴ章) 『統計学の対象と方法—ソヴェト統計学論争の紹介と検討』 有澤廣巳編 日本評論新社 6・
- 13) 生産性向上運動について 「新読書」 7・
- 14) 統計の闘い(パンフ・増訂版)日本労働組合総評議会 *相原茂ほかと分担執筆 8・
- 15) 統計の特質と利用の問題点 「エコノミスト」34(33) 8・18
- 16) 日本における労働者階級の貧困化について 「経済評論」5(9) *賃金統計研究会の共同執筆 9・
- 17) 生産性向上運動と労働組合 「新日本通信」 9・29
- 18) 調査のすすめ方とまとめ方 「労働調査時報」(263) 10・月上旬
- 19) 戦後労働組合運動史の研究における若干の問題 『戦後日本の労働組合』社会政策学会編 有斐閣 (社会政策学会年報第4集) 10・
- 20) 〈書評〉最近の統計書から 「エコノミスト」34(42) 10・20
- 21) 労働組合運動と調査活動 「銀行労働調査時報」(71) 11・
- 22) 調査活動の理論と方法 労働調査学校に参加して 「労働調査時報」(266) 11・月上旬
- 23) 〈講演〉生産性向上運動と従業員PR(レジュメ)日本機関紙協会・機関紙研究会 11・24
- 24) 戦後日本の労働問題—研究業績の展望 「図書新聞」 11・24
- 25) マルサス主義と人口統計 『人口過剰論批判』 上杉正一郎編著 日本評論新社 12・
- 26) 〈書評〉『統計調査総覧』美濃部亮吉・松川七郎編 「エコノミスト」34(50) 12・15

1957(昭和32)年

1・30群馬県相馬ヶ原射撃場で薬莢拾いの農婦、米兵ジラードに射殺される。2・25岸信介内閣成立(石橋湛山内閣前年12・23成立、首相病気で2・23総辞職)。3・31原爆被

爆者の医療法公布。6・21岸首相アイゼンハワー米大統領と日米新時代を強調した共同声明。8・2村島炭鉱労組、企業整備反対無期限スト。炭労大手13社(9・30、10・30)画期的な24時間同情スト(11・6妥結)。10・4ソ連、人工衛星スプートニク1号打上げに成功。*この年、ナベ底不況、国際収支赤字、5億3300万ドル。

- 1) 〈座談会〉製糸にあらわれた生産性向上運動「全蚕文化」(3) 2・
- 2) 調査活動の基本的問題について「自治労調査時報」(54) 2・10
- 3) 戦後労働組合運動史文献目録について「資料室報」(22) *永田利雄と共同執筆 3・
- 4) '世間知らず'の'世間ずれ'—戦後10年の学生像「法政」(58) 3・
- 5) 〈書評〉『戦後労働争議実態調査』労働争議調査会編「日本読書新聞」3・25
- 6) 『日本労働組合評議会資料1~11』1924-1927 法政大学大原社会問題研究所 1957.4.~1967.3. *編集に参加 4・
- 7) 最低賃金制と婦人「平和ふじん新聞」(210) 4・5
- 8) 労働問題【講座・社会科教育】4 飯塚浩二ほか編 明治図書出版 5・
- 9) 春季闘争からなにを学ぶか「東京大学新聞」(293) 5・15
- 10) 労働争議統計について(I~II)「統計学」(5~6) 6・~ 1958・4・
- 11) 日本の現段階における統計学の基本問題—経済統計研究会第1回会員総会における発言要旨(レジюме)経済統計研究会関西事務局 7・
- 12) 都市文化を支える職業「法政」(62) 7・
- 13) '技術革新'と労働問題「経済セミナー」(5) 8・
- 14) 第3回母親大会を傍聴して「朝日新聞」8・6(夕刊)
- 15) 〈書評〉『労働組合運動への提言』大河内一男著「エコノミスト」35(32) *執筆名なし 8・10
- 16) 〈書評〉『総評史』齊藤一郎著「日本読書新聞」10・28
- 17) 近代経済学による現状分析と政策—労働問題【近代経済学批判】IV 東洋経済新報社 *西村豁通と共同執筆 11・
- 18) 労働組合運動【日本資本主義研究入門】Ⅲ 有沢広巳、宇佐美誠次郎。

大島清・渡辺佐平編集 日本評論新社 11・

19) 日本における‘中間層’問題 「中央公論」 12・

20) サラリーマンの歴史—昭和時代 今日サラリーマン—その構成 『日本のサラリーマン』 松成義衛・野田正穂ほかと共著 青木書店 12・

21) 〈資料解説〉1957年の本棚(労働) 「図書新聞」 12・21

1958(昭和33)年

4・18衆議院, 原水爆禁止議案を可決. 参議院も同趣旨の決議案可決(4・21). 6・8大内兵衛, 我妻栄, 宮沢俊義ら憲法問題研究会設立. 6・20原水爆禁止を訴える広島—東京間1000キロ平和行進出発(8・11東京着. 翌日第4回原水爆禁止世界大会開催). 8・15総評, 和歌山で勤評反対, 民主教育を守る国民大会開催(8・16デモ, 警官隊と激突). 11・5警職法の改悪に反対して, 労組, 文化人, 学生婦人組織が統一闘争. 12・1一万円札発行. *『人間の条件』(五味川純平著, 三一書房)刊行.

1) ホワイト・カラー—問題の背景 「エコノミスト」36(1) 1・

2) 〈座談会〉これからのサラリーマン 「ひろば」(156・157合併号) *泉谷甫・野田正穂と 1・

3) 「戦前から昭和24年までの全国的な炭鉱労働運動(座談会記録)第1~4集」日本炭鉱労働組合運動史編纂委員会 *堀江正規ほかと編集に参加 1~7・

4) 「中間階級」論の展開(序章) 『現代の中間階級』 大月書店 *執筆・訳編 2・

5) 化学者の生活調査を読んで 「自然」13(2) 2・

6) 読書カード回答 「全蚕文化」(7) 2・

7) 日教組の『学校白書』運動—最近の労働組合調査活動の一例 「資料室報」(33) 3・

8) 〈鼎談〉国民運動としての勤評反対闘争—その意義と性格について 「日教組教育情報」(404) *持田栄一, 黒沼稔と 3・

9) 〈座談会〉なぜ子どもはみすてられたか 「子どものしあわせ」(23) 3・

10) 書評への反論—荒瀬豊氏の『日本のサラリーマン』批判に答える 「日本

読書新聞」*松成義衛と共同投稿 3・10

- 11) サラリーマン気質 「読売新聞」 3・20
- 12) 『日本経済統計集—明治 大正 昭和』 大内兵衛監修, 日本統計研究所編 日本評論新社 *執筆に参加 4・
- 13) 地方公務員の労働組合運動 「長野県職資料」(127) 4・
- 14) 保健婦・Sさんへの手紙 「保健婦雑誌」14(4) 4・
- 15) 貧困な論争と論争の貧困—総評と日経連の主張をめぐって 「労働経済旬報」(364) 4・中旬
- 16) 労働組合運動と調査活動(1~4) 「調研月報」(1~4) 4~7・
- 17) 〈対談〉婦人運動の新しい飛躍のために 「日教組教育情報」(411) *帯刀貞代と 5・
- 18) 日経連の賃金論に立つ政策 「東京教育大学新聞」 5・10
- 19) サラリーマンの運命(上・中・下) 「東京新聞」 5・15~17(夕刊)
- 20) 〈座談会〉日教組十年の闘いが果たした役割 「日教組教育新聞」(456) *小口賢三ほかと 5・30
- 21) ホワイトカラーと現場労働者 「学習の友」(56) 6・
- 22) 人間関係的管理 「教育評論」(71) *綿貫譲治ほかと共同研究 6・
- 23) 『日教組十年史 1947 - 1957』 日本教職員組合編 *執筆・編集に参加 6・
- 24) 〈書評〉『社会学辞典』 福武直, 日高六郎, 高橋徹編 「日本読書新聞」 6・9
- 25) 〈書評〉『経営学入門』 坂本藤良著 「新読書」 7・
- 26) 戦後日本の労働者意識 「中央公論」 8・
- 27) 〈座談会〉労働者教育の問題点 「労働者教育協会報」(6) *乾孝, 北川隆吉ほかと 8・
- 28) 勤評反対闘争の当面する課題—和歌山・高知・群馬における経験から 「労働経済旬報」(376) 8・中旬
- 29) 〈座談会〉『日教組十年史』をめぐって 「教育評論」(74) *遠山茂樹, 永井道雄, 塩田庄兵衛, 星野安三郎, 小林武ほかと 9・
- 30) 運動史研究の新しい分野 「労働運動史研究」(11) 9・

- 31) 〈書評〉『労働運動論』 矢加部勝美著 「図書新聞」 9・6
 32) 日教組論(1~2) 「月刊労働問題」(5, 6) 10~11・
 33) 歴史的事実としての闘争力 「教育評論」(76) 10・
 34) 〈図書紹介〉『水産と漁業』『鉾山ではたらく人びと』 村上一郎著 「週刊読書人」 10・13
 35) 国民教育発展のために 『国民教育』日教組情宣部編 合同出版社 * 共同執筆 10・20
 36) 新聞社説の論理 「法政大学新聞」 10・25
 37) インテリの自嘲 「法政大学新聞」 11・15
 38) 雑魚はとれても一昭電事件の幕切れ 「法政大学新聞」 11・25
 39) 〈書評〉社会科学の方法と社会調査の方法—福武直著『社会調査』から学ぶ 「思想」(414) 12・
 40) 不況の労働者状態への影響 「銀行労働調査時報」(96) 12・
 41) 労働問題研究と「社史」の利用 「資料室報」(41) 12・
 42) 真実は見た目と違う ヒトゴトでない乗客Mさんの疑問 「進路」(102) 12・
 43) 盛大だった三十代忘年会 「全法政」 12・18
 44) 〈資料解説〉1958年の本棚(労働) 「図書新聞」 12・20

1959(昭和34)年

1・1 カストロ指揮のキューバ革命軍バチスタ政権を打倒。米新政権承認(1・7)。3・9 社会党訪中団浅沼稻次郎団長「米帝国主義は日中両国人民の共同の敵」と挨拶、共同声明発表。3・28 社会党、総評、原水協など日米安保条約改定阻止国民会議結成。3・30 東京地裁伊達秋雄裁判長、米軍駐留は違憲、砂川事件は無罪と判決(伊達判決)。4・10 皇太子結婚。7・21 自民党、安保反対の立場をとる日本原水協を批判、補助金中止。母親大会も同様に。8・29 三井鉦山、労組4580人整理の第2次案提示。(10・13)三鉦連反復スト闘争に突入。(12・11)会社指名解雇通告。三池争議始まる。9・8 岸首相、自民党七役会で安保改定を絶対条件の決意表明。9・30 フルシチョフ中国訪問、中ソの意見対立。10・25 西尾末広派再建同志会をつくり社会党を離党。11・2 水俣病問題で

漁民ら新日本窒素水俣工場に乱入警官隊と衝突。11・19総評第13回大会で安保体制打破、炭労支援を決定。12・14在日朝鮮人975人を乗せ北朝鮮へ帰国第1船出港。

- 1) 〈座談会〉“大衆社会論”を再検討する 「中央大学新聞」*石原忠男ほかと
- 2) 調査論 (その1. その2) 「労働月報」(129~130) 京都府民生労働部 1~2・
- 3) 労働組合運動の課題と方向 「九州産労資料月報」(114) 1・
- 4) プラハ便り(その1)によせて 「ひろば」(180・1) *田沼祥子と共同紹介 1・
- 5) 〈書評〉『日本綿業労働論』 進藤竹次郎著 「月刊労働問題」(9) 2・
- 6) 『自治労総合調査』(全日本自治団体労働組合調査部)のすいせん文 「自治新聞」 2・2
- 7) 曲り角にきたサラリーマン 「産経新聞」 2・18
- 8) 統計の上から見た不況と低姿勢と低賃金 「学習の友」(65) 3・
- 9) 〈書評〉『労働年鑑』 桂労働関係研究所編 「月刊労働問題」(10) 3・
- 10) 〈書評〉『思い出のうた. 未来へのうた』飯島製糸労働組合 「月刊労働問題」(11) 4・
- 11) 〈書評〉『投票行動の研究』 早稲田大学社会科学研究所 「早稲田大学新聞」 4・7
- 12) なにを問題とすべきか 中間層研究—私論— 「法政大学芝田ゼミナール会報」 4・22
- 13) サラリーメン・ユニオンの課題と展望 「銀行労働調査時報」(100, 101) 5・
- 14) 〈討論会〉労働組合史編纂の経験をめぐって 「労働運動史研究」(15) 5・
- 15) 職業技術教育と労働問題—文献および資料について(1~4) 「資料室報」(46~47, 55~56) 1959.5. ~1960.4. 5・
- 16) 〈書評〉『モラル 職場の心理』 兼子宇編 「読売新聞」 5・14(夕刊)
- 17) 組織の形態と組織の機能(上・下) 「思想」(420~421) 6~7・

- 18) 花火工場の爆発 「法政大学新聞」 6・5
- 19) 〈書評〉『労働組合の構造と機能』 大河内一男ほか共編 「東京大学新聞」 6・10
- 20) 文部省「就職状況調査」の意図 「法政大学新聞」 6・15
- 21) 政治的関心ということ 「法政大学新聞」 6・25
- 22) 日経連の光と影 「月刊労働問題」(14) 7・
- 23) 労働組合と政党 「労働経済旬報」(408) 7・
- 24) ドグマの批判と批判のドグマ 「読売新聞」 7・7(夕刊)
- 25) 中小企業労働争議の背景 「婦人民主新聞」 7・12
- 26) 新版プロレタリア算術 「週刊わかもの」 7・26
- 27) 〈書評〉『日炭高松組合10年史』 「週刊読書人」 7・27
- 28) 〈書評〉『人口白書』をよんで一国民の素朴な生活感情に込めよ 「厚生」 14(8) 8・
- 29) 都市中間層の存在条件 「経済評論」(8・臨増) 8・
- 30) 〈書評〉『日本の経営者精神』 土屋喬雄 「読売新聞」 8・6(夕刊)
- 31) 二つのサラリーマン論 「図書新聞」 8・15
- 32) 〈座談会〉『労働白書』をめぐって 「月刊労働問題」(16) *大宮五郎・中村隆英ほかと 9・
- 33) 労働の生産性 「講座科学技術教育(上)科学技術教育の基礎」 岡邦雄編 明治図書出版 9・
- 34) 労働組合専従者の制限問題 「教育」9(11) 10・
- 35) 日本における「中間層」問題 『社会学論集 理論篇』 日高六郎編 (大学セミナー双書) 11・
- 36) 〈書評〉『年報一日本の政治・経済・労働分析』 1959年版 日本労働組合総評議会調査部編 「月刊労働問題」(18) 11・
- 37) 〈書評〉『貧乏物語』 大河内一男著 「日本読書新聞」 11・2
- 38) 科学者の窮状と科学の危機 「毎日新聞」 11・9
- 39) 「石炭危機」の見方について 「婦人民主新聞」 11・29
- 40) 〈書評〉『秘録・大逆事件』 塩田庄兵衛・渡辺順三編 「法政大学新聞」 12・5

- 41) トペーハ氏の来日に想う 「法政大学新聞」 12・5
 42) '新中間層'をいかに考えるか 「中央大学新聞」 12・15

1960(昭和35)年 1・5三井鉱山, 三池鉱ロックアウト, 労組全山無期限スト, 1・19岸信介ら新安保条約調印団ワシントンで調印, 1・20社会党から分れた西尾末広民主社会党結成大会, 5・19衆議院安保特別委員会, 5月20日未明, 新安保条約強行採決, 岸首相記者会見で「声ある声」を批判し「声なき声」に耳を傾けると発言, 以後デモ隊国会を襲う, 6・4安保改定阻止第一次実力行使, 国鉄労組など交通労組早朝スト(560万人参加), 6・10米大統領新聞関係秘書ハガチー来日, 羽田空港で労働者, 全学連(反主流派)阻止行動, 6・15安保改定阻止第2次実力行使, 全国で111単産580万人参加, 安保阻止国民会議, 全学連など国会デモ, 右翼団体が全学連, 新劇人などの隊列になぐり込み60人負傷, 全学連主流派国会突入をはかり警官隊と衝突, 東大生樺美智子死亡, 負傷者1000人を超す, 6・1833万人が国会を包囲「岸を倒せ」とフランスデモ深夜まで続く, (6・16)東大, 早大, 明大, 一橋大, 教育大, 法大, 東京女子大など学生・教職員の抗議集会, 各地の大学から抗議団上京(6月19日午前0時, 新安保条約自然承認), 6・23新安保条約批准書交換, 発効, 10・12浅沼稲次郎社会党委員長3党首立会演説会壇上で右翼少年山口二矢に刺殺される, 二矢自殺(11・2), 12・1世界81カ国共産党・労働者党代表者会議「モスクワ声明」, 12・27池田内閣(岸に代って)所得倍増計画発表(高度成長政策),

- 1) 賃金水準に対する労資の見解 「労働と経済」(24) *丹下洋一ほかと分担執筆 1・
- 2) パトタイ生活礼讃 AAA(2) 1・
- 3) 年賀状の統計 「法政大学新聞」 1・15
- 4) 職業訓練と技能検定制度 「アカハタ」 1・19
- 5) 〈書評〉『労働時間の歴史』 内海義夫著 『賃金と労働時間』 藤本武著 「日本読書新聞」 1・25
- 6) 〈シンポジウム〉'中産階級化'論の問題点を探る 「銀行労働調査時報」

- (110) *北川隆吉・野田正穂ほかと 2・
- 7) 〈討論〉‘労働者の教育欲求’とは何か 「月刊労働問題」(21) *堀江正規・五十嵐顕と 2・
- 8) 針路の決定 『われら日本人』4 その人生 平凡社 2・
- 9) 賃金統計の発達(第4章)『日本統計発達史』 日本統計研究所編 東京大学出版会 3・
- 10) ‘出世をする秘訣’と‘出世をしない秘訣’ 「新読書」 3・
- 11) 合理化と思想攻勢 「進路」(109) 3・
- 12) 〈書評〉『都教組十年史』 東京都教職員組合編 「月刊労働問題」(22) 3・
- 13) 学生運動と大学の自治 「法政」 3・
- 14) 〈座談会〉民主教育擁護をめざす運動 「教育評論」(93) *稲垣倉造・帯刀貞代・堀江正規・山本あやと 3・
- 15) アタマの体操 「週間わかもの」(3.6, 10, 27, 1961.4.3, 17, 5.1) 3・6
- 16) 〈書評〉『地位を求める人々』 ヴァンス・パッカー著 野田一夫・小林薫訳 「図書新聞」 3・19
- 17) 日教組の専従者制限とILO条約「教育」10(4) 4・
- 18) 職場のつながり 『われら日本人3 その社会』 平凡社 4・
- 19) 新しい中間階級とは(1~6) 「婦人民主新聞」(683~689) 1960.4.3~5.15 4・3
- 20) わが国労働市場の特質と職業訓練制度 社会政策学会第21回大会報告レジュメ 4・27
- 21) 〈座談会〉日本における新中間層の意識と行動 「経済評論」9(6) *高橋徹・篠原一と 5・
- 22) ①日経連と統計 ②新聞の「世論」と世論調査の世論—労働統計の見方—使い方(1,2) 「賃金と社会保障」(170~171) 5・11, 5・21
- 23) 青年労働者と合理化問題 「産業労働」15(6) *青年問題研究集会分科会助言者としての発言 6・
- 24) 〈書評〉『国民教育の諸問題』 国民教育研究所編 「法政大学新聞」 6・25

- 25) 学校教育と職業訓練の関連を主題に一 その統一の前提と可能性 「教育評論」(98) 7・
- 26) 〈共同討議〉軍備全廃をめぐる学校教育の課題(上・下) 「教師の友」(81, 82) *伊ヶ先暁生. 城丸章夫と 7~8・
- 27) 企業意識と合理化 「富士重工労報」 8・10
- 28) 第6回原水爆禁止世界大会で学んだこと 「日教組教育新聞」 8・12
- 29) 賃金闘争をどのように進めるか 「日建協ニュース」(71) 8・25
- 30) 安保反対運動と労働者 「思想」 9・
- 31) 総評論(1~4) 「月刊労働問題」(28~30, 32) 9.~1961.1. 9・
- 32) 社会階級の構成分析(1~3) 「賃金と社会保障」(181, 188, 190) 9.1.~12.1. 9・1
- 33) 〈書評〉『追われゆく坑夫たち』 上野英信著 「読売新聞」 9・1(夕刊)
- 34) 平和運動と社会科学の立場 「東京理科大学新聞」 9・20
- 35) 転機に來た日本労働運動 「東京教育大学新聞」 9・25
- 36) 〈座談会〉国連総会の画期的意義と日本の平和運動 「原水協通信」(114) 岡倉古志郎ほか2名と 10・
- 37) 新しい段階を迎えた原水爆禁止運動 「教育」10(10) 10・
- 38) 庶民と政治感覚(上・下) 「読売新聞」 10・17,18(夕刊)
- 39) 〈書評〉『統計 うそ・まこと』 足利末男著 「経済評論」9(13) 11・
- 40) 三池炭鉱争議に関する資料・文献目録 「資料室報」(62) 11・
- 41) 〈映画評〉『手をつないで』 「わかもの」 11・27
- 42) 〈座談会〉現代ホワイト・カラーの職場意識 「ビジネス」4 (12) *大河内一男. 上坂冬子ほかと 12・
- 43) 昭和初期における社会民主主義批判 『社会民主主義研究資料』第1集 法政大学大原社会問題研究所 *編集に参加 12・
- 44) 〈書評〉『造船業における技術革新と労務管理』 東京大学社会科学研究所 「図書新聞」(584) 12・24
- 45) 〈資料解説〉今年注目された本(労働) 「図書新聞」 12・24
-

1961(昭和36)年 1・～新島でミサイル試射場反対闘争激化、支援オ
 ルグ団入島。2・1『風流夢譚』事件で右翼少年、中
 央公論社社長宅を襲い家人2人を殺傷(嶋中事件)。4・19炭労大手13社、
 合理化反対で無期限スト(4・23、2社を除き中止)。5・16韓国で軍事クー
 デタ、反共・親米を宣言。7月3日朴正熙が全権を握る。6・21小児麻痺患
 者1000人突破、厚生省生ワクチン1300万人分緊急輸入決定。7・25共産
 党第8回大会「反米帝、反独占の新しい人民の民主主義革命」の綱領を採択。
 7・31原水爆禁止日本協議会専門委員会『原水爆被害者白書一かくされた真
 実』刊行。8・8仙台高裁、松川事件差戻審で全員無罪判決。

- 1) 労働組合と原水爆禁止運動(上・下) 「原水協通信」(1～2) 1・
- 2) 〈書評〉『平和の展望』 J.Dバナル著 藤枝滯子訳 「日教組教育新聞」
1・13
- 3) 〈書評〉「日本の中産階級」 大河内一男著 「共同通信」 1・14
- 4) 〈討論〉職業教育—資料と問題点 「労働青年研究」(5) 2・
- 5) 失業問題と失業統計(1～2) 「賃金と社会保障」(197、199) 2・中旬～3・上
旬
- 6) 〈書評〉『世界経済の旅』 堀江薫雄著 「読売新聞」 2・9(夕刊)
- 7) ILO問題への照明 「図書新聞」 2・11
- 8) 一人で‘ざんごう’にたてこもるな 「学生新聞」(創刊号) 2・15
- 9) 〈書評〉『日本の社会—講座・現代日本の分析I』 福武直編 「東洋経済」
2・25
- 10) 職業技術教育と青年労働者 「学習の友」(90) 3・
- 11) 労働の正しいとらえかた 『社会科教育大系』第五巻 三一書房 入江敏
夫ほか編 3・
- 12) 81カ国共産党・労働者党代表者会議の意義—戦争と平和の問題に関連し
て 「教育」11(3) 3・
- 13) 軍備全廃運動の第一歩 「平和日本」(365) 3・
- 14) 第2回職業教育研究集会 「日教組教育新聞」 3・10
- 15) 産学協同をめぐって 「法政大学新聞」 3・15

- 16) 婦人運動における労働婦人の役割—公務的・事務的部門の問題点 「思想」(442) *山村ふさと共同執筆 4・
- 17) 社会への目 「教師の友」(87~88) 4~5・
- 18) 賃金統計(1~4) —労働統計の見方・使い方(10~13) 「賃金と社会保障」(202, 204, 209, 211) 4・上旬~7・上旬
- 19) 〈書評〉『労働者の歴史 上』 矢加部勝美著 「週刊読書人」 4・3
- 20) がんばれサラリーマン組合 「ほんぼん」(48) 5・
- 21) 多能工 『工業大事典』 平凡社 5・
- 22) 〈座談会〉青年労働者と職業技術教育 「産業労働」16(4) *佐々木享ほかと 5・
- 23) 職業技術教育の問題点—労働者階級の教育要求をめぐって 「教育内容研究委員会資料」(25) *第17回教育内容研究委員会記録 5・20
- 24) 浅沼稻次郎の背景—民主主義の解放「轟進—人間機関車ヌマさんの記録」日本社会党機関紙局 *浅沼稻次郎追悼出版 6・
- 25) 社会への目 「教師の友」(89) 6・
- 26) 〈書評〉『講座現代のイデオロギー』 第1巻 「教育大学新聞」 6・25
- 27) アカハタの縮刷版 「アカハタ」 6・27
- 28) 〈書評〉『われらサラリーマン』読売新聞社会部編 「月刊労働問題」(38) 7・
- 29) 職業技術教育と労働運動 「岩波講座『現代教育学』月報」(11) 7・
- 30) 1946年8月6日 「原水爆被害白書—かくされた真実」 日本原水協専門委員会編 日本評論新社 *石井金一郎と共同執筆・編集に参加 7・
- 31) 読者返盃 「酒」 9(8) 8・
- 32) 〈紹介〉『原水爆被害白書—かくされた真実』 日本原水協専門委員会編 「日教組教育新聞」 8・25
- 33) 〈論壇展望〉最近の労働評論展望—第5回世界労働組合大会を前にして 「季刊日本経済分析」(10) 9・
- 34) 職業技術教育(1~3) 「賃金と社会保障」(217, 219, 222) 9・1~10・30
- 35) 〈座談会〉一斉学力テストと現場教師・父母—一斉学力テストと合理化・労働運動 「労働法律旬報」 *深山正光, 竹内真一, 君和田和一, 佐山喜作ほ

かと 9・15

- 36) 〈書評〉『三池日記』 向坂逸郎編 「法政大学新聞」 9・25
 - 37) 〈書評〉『合理化』 堀江正規著 「教育評論」 10・
 - 38) 第7回原水爆禁止世界大会 「教育」11(10) 10・
 - 39) 〈書評〉『日本のホワイト・カラー』 石川弘義・宇治川誠三著 「読売新聞」 10・1
 - 40) 〈書評〉労働省の『婦人労働白書』を読んで 「婦人民主新聞」 10・1
 - 41) 労働問題研究と「社史」の利用—事業内職業訓練について(1~2) 「資料室報」*永田利雄と共同執筆 11~12・
 - 42) 〈書評〉『労働者階級と中間階級』(その1) カイエ・デュ・コムニズム編 「読書の友」 12・15
 - 43) 〈書評〉『日本の大企業』 中村孝俊著 「産経新聞」 12・18
 - 44) 〈資料解説〉今年注目された本(労働) 「図書新聞」 12・23
-

1962(昭和37)年

1・17 創価学会政治連盟、公明政治連盟に改称。
2・1 東京都人口1000万人(世界初)。4・28 全労、
総同盟など25組合、同盟会議結成。5・3 常磐線三河島駅衝突事故、死者160人。
5・7 「政暴法」廃案。8・6 第8回原水爆禁止世界大会、社会党・総評の「ソ連
の核実験に抗議する」動議で紛糾。9・27 富士ゼロックス、コピー機国産化
(コピー時代幕開け)。10・22 ソ連ミサイル基地建設に米国が、キューバを
海上閉鎖(キューバ危機)。12・11 陸上自衛隊北海道島松演習場の電話線を
地元農民が切断(恵庭事件)。

- 1) 青年労働者の当面する課題 「労働青年研究」(16) 1・
- 2) 1962年の労働戦線展望 「機関紙通信」 1・1
- 3) 1961年をかえりみて 「ひろば」(250) 1・1
- 4) 〈書評〉『労働者階級と中間階級』(その2) カイエ・デュ・コムニズム編 「法政大学新聞」 1・5
- 5) いわゆる国史会(事件)はナンセンスといえるか 「全法政本校支部ニュース」 1・9

- 6) 都市中産階級における存在条件の変化 「経済評論」11(2) 2・
- 7) 青年・婦人労働者の運動について 「日建協資料」(I) 2・
- 8) 学生は自分を商品という、大人は就職を転向という 「法政」 2・
- 9) 〈書評〉『デリー バンドン 北京』 今村真直著 「アカハタ」 2・18
- 10) 婦人の現状をどうみるか 「教育評論」(123) 3・
- 11) 日本的労働組合主義の新段階 「現代の眼」3(3) 3・
- 12) 労働組合史編纂運動についての感想 「労働運動史研究」(30) 3・
- 13) 〈書評〉『現代の精神的労働』 芝田進午著 「図書新聞」 3・3
- 14) 〈書評〉『現代のホワイト・カラー』 岸本英太郎編 「読書の友」 3・5
- 15) グラフにみる日本と世界の現状 「国鉄文化」(132) 4・5. 合併号 *協力指導 4・
- 16) 調査・研究活動への二、三の提案 『第6回国民文化全国集会資料』 国民文化会議 4・
- 17) 国立国会図書館の利用価値 「法学セミナー」(73) 4・
- 18) あたらしい組合員のための労働組合論 「賃金と社会保障」(239) 4・11
- 19) 舟橋尚道一学界第一線 「エコノミスト」37(15) 4・14
- 20) 中労での学習について 「スクラム」 中央労働学院学生自治会機関紙 4・28
- 21) デモの歴史 「学習の友」 5・
- 22) 労働者階級構造の変遷 「京都大学新聞」(1106) 5・21
- 23) 〈書評〉『サラリーマンの生活と意見』 日本経済青年協議会編 「読書の友」 5・25
- 24) 一目でわかる自民党の悪政—参議院選挙のために 「国鉄文化」(133) *協力指導 6・
- 25) 〈シンポジウム〉日本における労働者階級の構成 「経済」(1~2, 4~5) 1962.6.~63.6. *氏原正治郎, 高木督夫, 戸木田嘉久, 藤本武, 堀江正規ほかと 6・
- 26) 〈対談〉就職と卒業後の生き方 「慶応評論」(2) *高田佳利と 6・
- 27) T君の転居通知と憲法の完全実施 「学生新聞」(42) 6・15
- 28) 大東京の社会構成 「新しい日本」第2巻 東京② 国際情報社 7・

- 29) 職業訓練政策と労働組合—第3回職業技術教育研究集會をめぐる資料紹介「資料室報」(79) 7・
- 30) 国立国会図書館はだれのものか「国民文化」(32) 7・
- 31) 婦人のための職業教育「婦人民主新聞」(810) 9・23
- 32) 全般的軍縮と平和のための世界大会(モスクワ)「日建協ニュース」9・25
- 33) 〈書評〉『現代労働運動の理論』 浜川浩著 「法政大学新聞」 9・27
- 34) モスクワ大会と平和運動 「全法政」(248) 10・4
- 35) 〈書評〉『現代日本の政治的構成』 松下圭一著 「読書の友」 10・15
- 36) ハバロフスクの少年 「アカハタ」日曜版 10・21
- 37) 「消費者は王様」の国と「労働者は王様」の国 「現実と文学」(16) 12・
- 38) 新しい軍国主義と国民生活 「平和運動資料」(199) 12・15
- 39) 〈書評〉『友愛会・総同盟五十年史年表』 日本労働組合総同盟五十周年記念事業資料蒐集委員会 「図書新聞」 12・22
-

1963(昭和38)年 2・28日本原水協第58回常任理事会, 社・共対立で紛糾. 6・11南ベトナム, サイゴンで僧侶ゴジンジェム政府に抗議の焼身自殺. 7・15米英ソ核実験停止会議をモスクワで開き「部分的核実験停止条約」合意(調印8・5). 8・5広島での第9回原水爆禁止世界大会, 社会党・総評系のボイコットで分裂. 9・12最高裁判所, 松川事件再上告審で上告棄却判決, 全員無罪. 11・2ケネディ米大統領, テキサス州ダラスで暗殺される. 11・9三池三川鉱で炭塵爆発, 死者458人, その他, 生存者の一酸化炭素中毒症が問題化. 11・10共産党, 中ソ論争に対する自主独立を宣言.

- 1) 〈鼎談〉働く人たちの生活と意識 「月刊社会教育」7(1) *浪江虔・丸岡寿子と 1・
- 2) 〈論説〉小中学校教員の大量解雇計画とこれに対する闘い—事態の背景と本質を中心に 「労働法律旬報」(480) 2・
- 3) サラリーマンに不況はどう響いたか 別冊「中央公論 経営問題」(春季

号) 3・

- 4) 婦人労働者にたいする労務管理と職業訓練 「月刊総評」臨時号 3・
- 5) 米騒動・社会運動の発展 『岩波講座・日本歴史』19 岩波書店 3・
- 6) 「全般的軍縮と平和の諸問題—モスクワ世界平和大会の記録」 全般的軍縮と平和のための世界大会日本支持委員会編 日本評論社 *編集に協力 3・31
- 7) 『貧乏物語』の今昔 「『世界教養全集』月報」(17) 4・
- 8) 〈書評〉『月給』 青木茂著 「産経新聞」 4・1
- 9) 〈書評〉『労働時間』 藤本武著 「読書の友」 4・25
- 10) 将来のサラリーマン—人口構成の物語るもの 「中部日本新聞」 5・30 (夕刊)
- 11) 賃金のもんだい みんなの話しあいのために—第9回母親大会討議資料 6・
- 12) 第8回働く婦人の中央集会に出席して 「ひろば」(283) 6・1
- 13) サラリーマン物語(1~10) 「中日新聞」 6・21~7・6.
- 14) Changes in Factors Conditioning the Urban Middle Class 「Journal of Social and Political Ideas in Japan」 7・
- 15) 読書への誘い 「ゼミナール報」No9 法政精神的労働ゼミナール 7・
- 16) 松川事件と労働組合 「資料室報」(91) 9・
- 17) 男子学生と女子学生 「婦人文化新聞」 文化服装学院 9・10
- 18) 今後の努力こそが大切である 「若き友よ」 9・16
- 19) ホワイト・カラーと'窮乏化法則' 「エコノミスト」別冊 10・
- 20) 熟練工の座 「中央公論」 10・
- 21) 社会科学をどう学ぶか 『学習講座・社会科学の基礎』I 堀真琴, 宮川実ほか監修 青木書店 10・
- 22) 現代改良主義の日本版「産業民主主義論」批判(上・下) 「アカハタ」 10・6, 7
- 23) 選挙ごらい 「法政大学新聞」 10・10
- 24) 学園都市計画 「法政大学新聞」 10・25
- 25) 労働組合の資料室活動—その現状と課題 「賃金と社会保障」(296) *加

藤康生と共同執筆 11・中旬

- 26) 民社党の政治的役割 「アカハタ」 11・18
 - 27) 本のよみ方(3) 「読書の友」 11・25
 - 28) 会社史からみた戦時中の労働者状態 「資料室報」(94) 12・
 - 29) 民社党「議席増」の政治的内容 「アカハタ」 12・7
-

1964(昭和39)年

4・5 町田市商店街に米軍機墜落, 4人死亡。
4・8 共産党「4・17公労協スト」は挑発的陰謀と
反対, 各地労組で方針をめぐり対立(7・19共産党指導部は「4・17スト」に
反対したのは誤りと自己批判)。5・15衆議院「部分的核実験停止条約」を
承認(共産党は反対, その決定に反した志賀義雄らを除名)。6・3ソウルの
18大学の学生, 朴大統領の退陣を求め官邸を包囲。8・1社, 共両党など137
団体, ベトナム戦争反対集会を開く。8・2米軍, 北ベトナム海軍基地を爆
撃(トンキン湾事件)。9・23横須賀に7万人, 佐世保に1万人が米原潜寄
港反対集会。10・10第10回オリンピック東京大会開催。10・15ソ連共産
党, フルシチョフ党第1書記・首相を解任する。10・16中国, 核実験に成功。
官房長官抗議談話を発表, 社会・民社・公明・総評も抗議声明。共産党, やむ
をえない自衛手段との見解。

- 1) 『炭労十年史』 日本炭鉱労働組合編 労働旬報社 *執筆・編集に参加
1・
- 2) 民社党の「議席増」と現代改良主義 「前衛」 2・
- 3) 科学者平和行進を成功させよう 「アカハタ」 2・20
- 4) 技術革新と婦人労働者 「月刊総評」臨時号 3・
- 5) 消費ブームと中流意識—『生活白書』は何を語っているか 「サンケイ新
聞」 3・27
- 6) 現代「福祉国家」論の役割 「エコノミスト」(別冊)42(15) 4・
- 7) 国会図書館職組の「全通資料室改善に関する勧告」を読んで 「資料室懇談
会会報」創刊号 5・
- 8) 人間疎外の問題—社会主義社会における疎外の克服 『岩波講座・現代』

- 13 岩波書店 5・
- 9) 〈シンポジウム〉近代化論とマルクス主義 「現代の眼」5 (5) *杉田正夫・津田道夫・清水慎三と 5・
- 10) 大学の自治と教職員 「りいぶる」(3) 6・
- 11) 図研集会の性格と今後の組織化の方向 『第2回図書館研究集会記録1963』 国立国会図書館職員組合 6・
- 12) 職業訓練と労働運動 「社会労働研究」11(1) 7・
- 13) 法政大学教職員組合の10年 『全法政10年の歩み』 法政大学教職員組合編 *共同執筆. 各年度の「扉のこぼれ」も執筆 7・
- 14) 山一林組製糸工場のストライキ 「月刊学習」(43) 松川史郎のペンネーム 8・
- 15) 大学の自治と学生生活 「学協運動」(29) 8・
- 16) 日本労働運動の歴史 『中央労働学校学習テキスト』 国鉄労働組合 *年表形式 9・
- 17) 第二次大戦中における労働者の抵抗 「資料室報」(102) 9・
- 18) (戦時における)労働強化と労働災害 『太平洋戦争下の労働者の状態』 法政大学大原社会問題研究所編 東洋経済新報社 *『日本労働年鑑』特集版 10・
- 19) 被爆者に励まされて一第10回原水爆禁止世界大会に参加して 「現実と文学」 10・
- 20) 第10回原水爆禁止世界大会の教訓 「教育」14(10) 10・
- 21) 第10回原水爆禁止世界大会科学者協議会総括(リーフレット) 10・16
- 22) 米. 核戦略体制の新段階 「法政大学新聞」 10・26
- 23) 〈座談会〉法政 その大学としての条件 「法政大学新聞」(533) *松岡盤木・青木宗也・郡山澄雄ほかと 11・10
- 24) 〈書評〉『日本の労働問題』 隅谷三喜男著 「朝日ジャーナル」6 (47) 11・22
- 25) 社会階級構成研究の動向と課題(上) 「経済」(11) 12・
-

1965(昭和40)年 1・8韓国政府、南ベトナム派兵決定。2・1原水爆禁止国民会議(原水禁)結成、いかなる国の核実験にも反対。2・22北炭夕張炭鉱でガス爆発、死者61人(6月1日、福岡県山野鉱でガス爆発、死者237人)。3・7米海兵隊、南ベトナムダナン上陸(米軍の直接介入)。6・9社・共両党ベトナム侵略反対で「一日共闘」実現。6・12家永三郎、教科書検定を違憲として民事訴訟を起こす。6・21韓国非常警戒令(学生デモ阻止のため大学くり上げ夏休み)。6・22首相官邸で日韓基本条約調印。8・14韓国国会、与党単独で日韓条約批准。10・12日韓条約批准阻止で社・共両党共同行動。10万人国会請願デモ。*この年5月28日、山一証券に無制限、無期限の特別融資。11月19日、赤字国債発行。

- 1) Indonesia Raja as We See Her People 「NO MORE HIROSHIMAS !」
12(1) 1965.1.~2.1・
- 2) インドネシア訪問から帰って(パンフ) ジャパンプレス・サービス *国際事情第77回月例研究会 1・30
- 3) 〈書評〉『思想攻撃と労働者のド根性』富岡隆著 労働旬報社 「読書の友」
2・28
- 4) 〈座談会〉婦人労働10年の回顧と展望 「月刊総評」臨時号 *嶋津千利世、
山本まきほかと 3・
- 5) 『被爆者救援運動の手引き—101の問答』日本原水協原水爆被害者対策部編。原水爆禁止日本協議会 *執筆・編集に参加 3・
- 6) 〈座談会〉全学的なビジョン造りを一深まりゆく危機の中で 「法政」(154)
*徳永重良、松岡盤木、下森定ほかと 3・
- 7) '西と東のかけ橋' という思想—インドネシアの旅から 「思想」(489) 3・
- 8) 〈書評〉『社会政策』岸本英太郎著 「週刊読書人」 3・15
- 9) 安価で無思想的な技能者養成を意図—技術革新下の国民教育 「りいぶる」
(5) 4・
- 10) 春闘と生活 「子どものしあわせ」(107) 4・
- 11) 社会政策学の視点 「週刊読書人」 4・5
- 12) 勉強の秘訣 教育シリーズ(16) 国鉄労働組合 4・15

- 13) 新組合員のための労働講座—労働組合の役割り 建設支部情宣部・教文部 5・1
 - 14) 被爆者特別措置法の成立について 「中国新聞」 5・18
 - 15) 〈書評〉『現代の合理化と労働運動』 戸木田嘉久著 「季刊労働法」(56) 6・
 - 16) 職業訓練の問題 「朝日新聞」 6・2
 - 17) ベトナム情勢が生んだ一つの教訓—中国核実験をめぐる— 「法政大学教職員 日中友好をはかる会機関紙」(21) 6・20
 - 18) 民社党の外交政策はだれにつかえるか 「アカハタ」 6・27
 - 19) '経済'の論理と'生活'の論理 「経済セミナー」(109) 7・
 - 20) 第11回原水爆禁止世界大会の意義 「経済」(14) 7・
 - 21) 〈書評〉『(写真集)中国の表情 平和をめざす七億の躍動』今村真直著 「長野高教組新聞」(914) 8・15
 - 22) 『経済学辞典』 大阪市立大学経済研究所編 岩波書店 *執筆に参加 9・
 - 23) 安保共闘再会をかちとり国際的責任をはたそう 「日韓条約阻止・ベトナム侵略反対・生活擁護・全国百万人統一行動闘争速報」 9・6
 - 24) 最近の経済情勢と労働組合の調査活動 【第4回調査実務講座資料】全石油調査部 10・
 - 25) 『現代サラリーマン論』 松成義衛著 法政大学出版会 *泉谷甫、野田正穂とともに編集 10・
 - 26) 太平洋戦争下の労働運動 (『日本労働年鑑』特集版) 第1編第1~3章 10・
 - 27) 〈書評〉『マルクス主義と平和運動』 上田耕一郎著 「前衛」(241) 10・
 - 28) 不況に揺れる「中間階級」 「朝日新聞」 10・14(夕刊)
 - 29) 故松成義衛氏のサラリーマン研究—『現代サラリーマン論』出版記念会における挨拶 「銀行労働調査時報」(184) 11・
 - 30) 下級管理者の受難期 「中央公論」 12・
 - 31) '日韓'後の労働運動の課題 「エコノミスト」43(55) 12・28
-

1966(昭和41)年 1・18早稲田大学授業料値上げ反対スト。2・4全日空機羽田着陸直前に墜落, 133人全員死亡。(3・4カナダ航空機羽田の防潮堤に激突64人死亡。3・5BOAC機, 富士山空中で破壊墜落, 124人全員死亡。11・13全日空機, 松山空港で墜落50人全員死亡 *この年4回の航空機事故)。3・29毛沢東「反米反ソ」に固執して, 共産党宮本委員長との会談決裂。5・16毛沢東「中央文化革命小組」設置。「文化大革命」はじまる。7・11広島市議会, 原爆ドームの永久保存を決議。8・18北京・天安門広場で紅衛兵ら100万人集会(11・26まで8回)。9・18サルトル, ボーヴォワール来日, 「知識人のあり方」(特にベトナム戦争への態度)について講演。10・21総評54単産ベトナム反戦統一ストを決行。

- 1) 原水禁運動と科学者一問題提起(4) 『核兵器完全禁止への道を求めて—原水禁科学者会議中国ブロック会議の記録』 原水協中国ブロック会議編 原水爆禁止日本協議会 1・
- 2) 本格化する核戦略体制 「ひろば」(343)合併号 1・1
- 3) 「生産性運動」論争 「図書新聞」 2・25
- 4) 〈書評〉『労働災害』 藤本武著 「社会労働研究」12(4) 3・
- 5) 労働者階級の運動 『マルクス経済学講座』第4巻 宇佐美誠次郎ほか編集 有斐閣 3・
- 6) 平和運動 『講座 現代日本とマルクス主義』第2巻 青木書店 3・
- 7) 労働統計(第13講) 『統計学』内海庫一郎, 木村太郎, 三瀧信邦編 有斐閣 (改訂版 1976.4) 4・
- 8) 〈書評〉『民族解放の思想と行動』 岡倉古志郎, 寺本光郎著 「祖国と学問のために」(15・16) 4・15
- 9) 強まる「企業防衛」論 「法政大学新聞」 5・10
- 10) 衛藤瀋吉氏の安全保障論 「赤旗」 5・15
- 11) 〈書評〉『労働組合の政治的役割—ドイツにおける経験』 花見忠著 「東京大学新聞」 5・23
- 12) 複雑な労働運動の局面 「法政大学新聞」 5・25
- 13) 日教組の組織形成過程—その基盤と課題の特殊性 「季刊労働法」(60)

6・

- 14) 〈書評〉『現代日本の政党と政治』 増島宏著 「法政」(169) 6・
- 15) 無権利状態に甘んずると… 「団結」 都職労世田谷支部 6・11
- 16) 日本経済の「復興」と反動思想 「現代教育科学」(105) 7・
- 17) 「製糸工女」がたちあがった大ストライキ 『ストライキの歴史』 塩田庄兵衛編 7・
- 18) 資本主義の発展と公務労働者(レジュメ) 全商工中央労働学校 7・15
- 19) 原水禁運動と被爆者救援運動—第12回原水爆禁止世界大会を前にして(上・下) 「赤旗」 7・17, 18
- 20) 被爆者の手記をよんで 「学習の友」 8・
- 21) 被爆者の苦しみを思う 「民主文学」(9) 8・
- 22) 〈座談会〉転換期を迎えた卒論制度 「法政」(171) *吉川経夫・花原二郎ほかと 8・
- 23) 平和運動にとって何が大切か 「ひろば」(358) 8・15
- 24) 学歴偏重は社会に害 「日本経済新聞」 8・22
- 25) 〈書評〉『学歴無用論』 盛田昭夫著 「読書の友」 8・29
- 26) 被爆者救援運動の現段階 「前衛」 9・
- 27) ベトナム侵略反対と日本の労働者 「機関紙連合通信」 9・5
- 28) 『資料戦後20年史・労働』(労働者の状態、組合運動、制度及び政策) 10・
- 29) 社会問題の学習 「図書館雑誌」60(10) 10・
- 30) 「原水禁国民会議」の集会について 「赤旗」 10・13
- 31) 政治ストの歴史から何を学ぶか 「東京大学新聞」 10・17
- 32) 10.21ストと原水爆禁止運動 「原水協通信」(252) 11・15
- 33) ベトナム侵略と日本の科学者 「赤旗」 12・10
- 34) 〈書評〉『座談おぼえ書き』『私の履歴書』『海軍主計大尉 小泉信吉』『わが文芸談』 小泉信三著 「読書の友」 12・26

1967(昭和42)年

1・6米海兵隊、メコンデルタに進攻。ベトナム参戦米兵47万3000人。1・24共産党機関紙「赤旗」“紅衛兵の不当な非難に答える”を発売(3・15「毛沢東一派」を名ざして非難)。

2・4厚生省，原爆被爆者実態調査で生存者29万8500人(65・11・1現在)と発表，3・29札幌地裁，恵庭事件無罪判決，4・15東京都に美濃部亮吉革新知事誕生，6・23家永三郎，新たに国に対して教科書検定不合格取消しの行政訴訟を起こす(第2次訴訟)，7・14三池炭鉱の一酸化炭素中毒患者家族70人，坑道に座り込み，7・23米デトロイト市で史上最大の黒人暴動起こる，各地に波及，8・28ベトナムにおける戦争犯罪調査委員会主催「東京法廷」開く，9・1四日市ぜんそく患者，大気汚染公害訴訟を起こす，9・14法政大学学生処分問題をめぐり警官導入，11・9米軍押収の原爆記録映画22年ぶりに返還，11・11エスペランチスト由比忠之進，首相の北爆支持に抗議し官邸前で焼身自殺。

- 1) 統計からみた生活実態くらべ 「川鉄新聞」(663) 1・10
- 2) サラリーマン労働組合論 「銀行労働調査時報」(200) 2・
- 3) 大学生の‘就職の思想’の系譜 「法政」(177) 2・
- 4) 古典を読もう 「生協のしおり '67」 大学生協連東京支所 2・
- 5) 現代人気質—サラリーマン 「東京新聞」 2・4(夕刊)
- 6) 〈書評〉『国家独占資本主義社会政策論』 服部英太郎著 「週刊読書人」 2・6
- 7) 全婦人労働者の団結を 「月刊総評」臨時号(婦人問題特集) 3・
- 8) 企業内教育と労働組合 【現代労働問題講座】7巻 大河内一男，有泉享，金子美雄，藻利重隆編 有斐閣 4・
- 9) 民社党の仮面と役割 「赤旗」 4・13
- 10) 故笠原先生を偲ぶ 「生協」(教職員版) 4・15
- 11) 諸階級論 「経済」(37) 5・
- 12) 第38回メーデーの意義 「学習の友」 5・
- 13) 党綱領とマルクス・レーニン主義擁護 「赤旗」 5・15
- 14) もっと本をよもう 「ばんごはん」 5・22
- 15) 婦人労働者の現状と当面の課題 「教育評論」(201) 6・
- 16) 「合理化と労働者階級—社会政策学会年報14集」 社会政策学会編集委員会編 御茶ノ水書房 *編集に参加 6・20

- 17) 合理化という言葉の魔術 「けんせつ」 (443) 7・
- 18) 〈書評〉『戦後革新勢力—史的過程の分析』 清水慎三著 「前衛」 7・
- 19) 勉学をどうすすめるか—教師にも援助を求めよう 「学生新聞」 7・12
- 20) 労働組合と平和運動 「労働・農民運動」(17) 8・
- 21) 〈書評〉『技術教育と災害問題』 原正敏・佐々木享著 「読書の友」 8・28
- 22) 国勢調査からみた階級構成の特徴 「経済評論」16(9) 9・
- 23) 平和運動の教訓と平和教育 「生活指導」(106) 9・
- 24) 厚生省 「原子爆弾被爆者実態調査」報告の検討(パンフ) *佐久間澄ほかと 11・
- 25) 被爆者援護立法について 『第2回原水爆禁止科学者会議の記録』 第2回原水爆禁止科学者会議準備委員会事務局編集発行 11・
- 26) 救援運動が当面する問題点 「原水協通信」(18) 合併号 11・1
- 27) 最近の労働運動と労働者の意識 「時事教養」(399) 11・15
- 28) 真の被爆者援護法を一厚生省「被爆者実態調査」について 「赤旗」 11・15
- 29) 〈書評〉『日本の軍隊 自衛隊』 日本共産党中央委員会 「読書の友」 11・27

1968(昭和43)年

1・29 東大医学部学生自治会医師法改正に反対して、無期限スト(東大闘争の発端). 1・30 南ベトナム全土で民族解放戦線軍・北ベトナム軍大攻撃(テト攻勢). 3・16 南ベトナムのソンミ村で米軍による大虐殺事件起こる(ソンミ事件). 4・4 米国黒人運動の指導者キング牧師暗殺される. 各地で黒人の抗議行動起こる(死傷者2000人以上). 4・29 米国で黒人の「貧者の行進」デモ全米各地からワシントンに向け出発. 5・13 ベトナム和平パリ会談、実質討議はじまる. 5・20 原子爆弾被爆者特別措置法公布. 6・2 米軍板付基地のF4Cファントム機、九州大学構内に墜落. 6・27 チェコスロバキア自由派知識人70名、民主化・自由化を求めて「2000語宣言」発表. 7・30 夕張市の北炭平和鉱で坑内火災、死者31人. 8・20 ソ連軍など5カ国軍チェコ侵入(チェコ事件). 9・26 厚生省、水俣病は新日本窒素肥料の廃出物が原因と断定. 10・1 佐藤首相、日本大学の大量団交を重視、大学紛争に政治の立場からの対処を表

明. 10・21 国際反戦デー, 全国600カ所で集会, デモ. 反日共系全学連学生ら新宿駅を占拠, 国電運転不能. 10・25 最高裁, 「八海事件」4 被告に無罪. 11・10 琉球政府首席に革新の屋良朝苗当選. 11・20 国際通貨危機により仏英ほか欧州各地で為替市場閉鎖. 12・10 東京府中市で現金輸送車の3億円, 白バイ警官に変装した男に奪われる(75・12・10 時効成立). *日本ばかりでなく世界的にも学生運動多発. 日本では115大学で発生, 65校では未解決に終わる.

- 1) サラリーマンの労働と労働組合運動(1, 2) 「銀行労働調査時報」(212, 218) 1, 6・
- 2) 資本主義美化論としての民主社会主義—民主社会党の綱領批判 「前衛」(274)臨時増刊 1・
- 3) 正面に出てきた「核」問題 「ひろば」(391) 合併号 1・1
- 4) 生協強化の土台づくり 「生協」教職員版 法政大学生生活協同組合 1・26
- 5) 若い婦人労働者の問題 「月刊総評」臨時号(婦人問題特集) 3・
- 6) 「全商工20年史」 全商工労働組合編 労働旬報社 *編集に協力 3・
- 7) 被爆者問題をどう考えるか 「法政」(190) 3・
- 8) だまっているわけにはいかない—心のかよいをひきさいた北京の風 「ほのお」(1) 3・15
- 9) 時期区分論の課題 『戦後労働運動の展開過程』 お茶の水書房(社会政策学会年報15) 4・
- 10) メーカーの歴史的意義 「通信教室」(2) 4・
- 11) 新しい意欲を生協運動へ 「生協のしおり '68」 大学生協連東京支所 4・6
- 12) 労働者階級の構造はどう変りつつあるか 「労働・農民運動」(26) 5・
- 13) 核心を削除された「原爆映画」 「東京大学新聞」 5・6
- 14) 一歩前進の被爆者対策—特別措置法成立 「中国新聞」 5・18
- 15) 〈書評〉『日本の政党』 中村菊男著 「読書の友」 6・10
- 16) 被爆者救援の運動—第14回原水爆禁止世界大会の成功のために 「赤旗」 7・19

- 17) 労働者と学問 「労働 生活 学習」(1) 8・
- 18) 1970年問題と新学習指導要領案 「文化評論」(83) 8・
- 19) 「安保条約と日本の大衆運動」 汐文社 9・
- 20) 意欲的な統一行動で 「機関紙通信・特信版」(111) 10・5
- 21) 労働組合史刊行の意義 「京浜文化」10(4) 11・
- 22) 私のひとこと一学生諸君へ 「祖国と学問のために」(71) 11・15
- 23) 労働運動と教育 『教育学全集』第14巻 小学館 12・
- 24) ABCC年次報告に発表されたダーリング所長の見解について 「原水協通信」(294) 12・1

1969(昭和44)年

1・18 東大闘争支援の学生・市民ら、お茶の水の明大・中大付近の道路を閉鎖。神田カルチャータンと叫ぶ。機動隊、加藤東大学長代行の要請で安田講堂占拠の学生排除、大混乱。
 2・18 日大機動隊を導入し学校封鎖を解除。3・1 京都府警ら機動隊を京大の要請なしに構内に出勤。4・2 北海道・雄別茂尻炭鉱でガス爆発、死者19人。
 6・29 新宿駅西口地下広場で反戦フォーク集会、7000人参加。7・20 米国宇宙船アポロ11号月面着陸。アームストロングとオルドリンの兩人月面を踏む。10・15 米国全土でベトナム反戦行動起こる。11・15 ワシントンの集会に25万人集合。11・13 沖縄祖国復帰協、佐藤首相の訪米反対集会、10万人参加(11・17 首相、沖縄の施政権返還交渉のため訪米)。

- 1) 「1970年」問題と労働政策 「平和運動」(322) 1・
- 2) 戦後労働組合運動の歴史 「労働・農民運動」(34～44) *塩田庄兵衛、中林賢二郎と共同執筆 1～11・
- 3) 安保闘争物語(1～10) 「赤旗」 1・1～10
- 4) '1970年'と教育—秋田県教組・高教組合同教研記念講演(1969.1.) 「秋教組新聞」 1・15
- 5) 受験生諸君の健闘を期待します 「生協」法政大学生生活協同組合 2・
- 6) 「70年」へののろし 「機関紙連合通信」 2・8
- 7) 『青年のための安保問答』 中央青年学生代表者会議編 日本青年出版社

*監修 2・15

- 8) 〈書評〉『安保闘争—60年の教訓』 日本共産党中央委員会編 「赤旗」 2・17
- 9) 底辺からの民主主義の芽生え—市民運動の役割とその位置(連載)戦後体制の崩壊と70年代の展望 5 「エコノミスト」 2・18
- 10) 〈座談会〉おんなであるとはどういうことか 「月刊総評」(婦人問題特集号)*司会田沼・園田順子ほか3名と 3・
- 11) 村山重忠教授略年譜 主要著作目録 「社会労働研究」15(4) 3・
- 12) 〈書評〉『日本の政治風土』 篠原一著 「読書の友」 3・3
- 13) (昭和)44年度被爆者関係予算について 「六・九行動ニュース」 3・25
- 14) 学生生活に望む 「赤旗」 4・11
- 15) 〈書評〉『協同組合の基礎理論』 三輪昌男著、『協同組合と共同経営』 奥谷松治著、『体系労働者福祉論』 中林貞男編著 「図書新聞」 5・3
- 16) 〈書評〉『70年安保闘争と統一戦線』 畑田重夫著 「東京大学新聞」 5・19
- 17) 60年安保闘争のあゆみ(上) 「ひろば」(426) 6・1
- 18) 60年安保闘争のあゆみ(1~3) 「全法政」 7・1
- 19) 原水禁運動の今日的課題—真の人間性と真実の探究に立って 「学生新聞」 7・23
- 20) 〈書評〉『政治年鑑』 日本共産党編 「読書の友」 7・28
- 21) 共働きと育児 『みんなの話しあいのために』 第15回日本母親大会実行委員会 8・
- 22) '1970年'を目前にして 「月刊全農協労連」6(8) 8・
- 23) 原水禁運動と被爆者問題 「文化評論」(96) 9・
- 24) (雪江堂事件)判決文を読んで 「ほのお」(9) 9・25
- 25) 『安保・沖縄問題用語事典』 労働旬報社 *編集と「あとがき」を執筆 10・
- 26) 沖縄の核つき・自由使用に反対しよう 「機関紙通信・特信版」(136) 10・20
- 27) 被爆者救援運動の前進のために 「原水協通信」11.1, 15合併号 11・1
- 28) 世論に押される世論調査 「読書の友」 11・24

- 29) 「民社新聞」の危険な役割 「赤旗」 12・2
 30) 〈座談会〉各党の政策と体質—民社党(上・下) 「赤旗」 *吉岡吉典ほかと
 12・7, 8

1970(昭和45)年 2・3 政府、核兵器の不拡散条約に調印決定。
 3・2 創価学会・公明党の言論出版妨害問題で社会、
 民社、共産が共同歩調とる。3・14 日本万国博覧会 EXPO70 開催、大阪千里丘陵に77カ国参加。3・30 日本赤軍日航ヨド号をハイジャック。5・4 米国で反戦運動の大学生4人、オハイオ州兵に射殺される。5・9 ワシントンで反戦集会10万人結集。7・1 共産党11回大会、報道陣に初公開、新書記局長に不破哲三を選出。7・17 家永教科書裁判第2次訴訟に対し、東京地裁、国の検定不合格の取消しを判決(杉本判決)。11・25 三島由紀夫ら東京・市ヶ谷自衛隊建物で「憲法改正」のクーデタを訴えたが失敗、剖腹自殺。12・15 北海道上市の三井鉱山砂川鉱でガス爆発事故、死者19人。12・20 沖縄コザ市で米軍MPの交通事故処理に市民憤激、反米行動に拡大、群集5000人が加わる(コザ暴動)。

- 1) 青山暮色 「つくし」 青山師範付属小学校同窓会 *卒業30周年記念号
- 2) 〈座談会〉婦人労働者は過保護か? 「婦人通信」(112) *長谷川章子ほかと 1・
- 3) 1970年の日本と労働組合 「銀行労働調査時報」(238) 1・
- 4) 安保廃棄めざし未来を切りひらく力 「機関紙連合通信」 1・
- 5) 〈討論〉運動史からなにを学ぶか 「労働・農民運動」(47) *塩田庄兵衛、中林賢二郎と 2・
- 6) 「全戸訪問調査」の意義 「静岡の被爆者」静岡県原水爆被害者の会 2・
- 7) 〈座談会〉沖縄返還問題と世論—日米共同声明後の動向 「文化評論」(101) *新原昭治、霜多正次と 2・
- 8) (新入生) 歓迎のあいさつ 『70生協のしおり』 大学生協東京事業連合 2・
- 9) 中小企業労働者・未組織労働者の状態、役割とその組織化 『労働組合連

動の理論』第5巻 大月書店 3・

- 10) 『ヒロシマにて—900人の訪問』 原水爆禁止日本協議会編 平和書房
*「あとがき」を吉田嘉清と共同執筆 3・
- 11) 〈書評〉『名古屋地方労働運動史』明治・大正篇 齊藤勇著 「図書新聞」
3・28
- 12) 皆勤賞—メーデーに想う 「学習の友」 5・
- 13) 近づく六月二三日 「機関紙連合通信」 5・20
- 14) 『戦後労働組合運動の歴史』(6,7,8,10担当) 塩田庄兵衛・中林賢二郎と
共著 新日本出版社(新日本新書) 6・
- 15) 歴史的な時期のはじまり—強固な安保共闘組織を 「ひろば」(452)
6・15
- 16) 〈書評〉『現代労働組合運動論』 塩田庄兵衛著 「労働運動史研究」52
7・
- 17) 被爆者とともに(パンフ) 原水爆禁止日本協議会 7・
- 18) 平和擁護闘争における労働組合の役割 『労働組合運動の理論』第7巻
大月書店 7・
- 19) 原水爆禁止運動と被爆者救援 「赤旗」 7・26
- 20) 最終ランナーの弁 「談話室」 大月書店 *『労働組合運動の理論』⑦の
しおり 7・31
- 21) 婦人労働者のもんだい—働く婦人の生き方 『みんなの話しあいのため
に 第16回日本母親大会討議資料』 同大会実行委員会 8・
- 22) 大阪市における婦人被爆者の運動 「原水協通信」 11・

1971(昭和46)年

4・11 東京都美濃部知事再選。大阪府黒田が一革
新知事初当選。6・17 沖縄返還協定「琉球諸島・大
東諸島に関する日米間の協定」に調印。7・3 東亜国内航空機、函館北方横
津岳で遭難、死者30人。7・9 米大統領補佐官キッシンジャー秘密裏に中国
を訪問。7・17 北海道住友歌志内鉱でガス突出事故、死者30人。7・23 法
務省、第17回原水禁世界大会に参加の北ベトナム代表の入国を7年ぶりに
許可。7・30 岩手県雫石上空で、全日空機の航路に自衛隊機が侵犯、追突、

墜落, 162人全員死亡. 8・15米大統領ニクソン, 金とドルの交換を停止, ドル防衛処置(ドルショック). 9・8中国共産党副主席林彪, 毛沢東暗殺のクーデタに失敗. 10・21沖縄返還協定批准に反対し, 統一実行委員会主催の中央集会など31都道府県で統一行動. 150万人参加(11・19, 第2次行動). 10・25中国国連復帰, 台湾脱退.

- 1) 『原爆被爆者問題』 新日本出版社 1・
- 2) 日教組 『日本の産業別組合—その生成と運動の展開』 執筆代表岡崎三郎 総合労働研究所 2・
- 3) 被爆者援護法の制定を要求する運動について 「原水協通信」(336) 2・
- 4) 71年春闘の情勢と展望 「横浜市従」(373) 2・1
- 5) 民社党の素顔—「立党の精神」 「赤旗」 3・1
- 6) 階級 「経済」(84) 4・
- 7) 選挙と労働者・労働組合 「全農協労連」 4・5
- 8) 『通産行政—その分析と批判』 創刊に寄せて 「全商工新聞」 4・20
- 9) 〈シンポジウム〉婦人運動と婦人問題 「前衛」* 柁井とめをほか6名と 5・
- 10) バッチ着用二審勝利のためにみなさんの支援を 「バッチ権」 5・1
- 11) 諸階級 『マルクス主義経済学講座』(下) 新日本出版社 6・
- 12) 〈シンポジウム〉職業訓練と労働組合運動(1~4) 「労働・農民運動」(63,65,66,69) 6・~ 12・
- 13) みなさんのご健康を念じつつ 「被爆婦人の集い」(3) 大阪市原爆被害者の会婦人部 6・
- 14) 『私の戦争体験記 炎の中を生きて—原爆被爆者の手記』 原水爆禁止日本協議会編 日本青年出版社 *「あとがき」執筆 7・
- 15) 〈座談会〉参院選挙と政治革新 「赤旗」* 田口富久治, 白鳥令ほかと 7・1
- 16) 広島・長崎の記録と被爆者の手記 「赤旗」 7・31
- 17) 被爆者特別措置法の改正をめぐって—衆議院社会労働委員会の審議内容 「原水協通信」(342) 8・

- 18) 被爆者のもんだい 『みんなの話しあいのために』 第17回日本母親大会 8・
- 19) 健康法という私の口実 「赤旗」 8・24
- 20) 組織論の陥りやすい誤り 「労働・農民運動」(67) 10・
- 21) 『被爆者救援運動の手引—101問答』新版 原水爆禁止日本協議会編 *執筆・編集に参加 10・
- 22) 搾取の基礎と搾取の諸形態 欲望不充足の増大と搾取の矛盾 『現代の労働組合運動』第1集 大月書店 11・
- 23) ヒッチハイク 「学生新聞」 11・10
- 24) 証人調書(1971年11月12日) 『桑原訴訟の審議尋問記録』 広島県原水協・被団協編 11・12
- 25) '原爆訴訟' 三つの証言 「中国新聞」 11・19

1972(昭和47)年

2・3 第11回冬季オリンピック札幌大会開催。
2・19 連合赤軍、浅間山山荘に人質を取り籠城。
2・21 米大統領ニクソン中国訪問。米中共同声明「上海コミュニケ」。北ベトナム「ニャンザン」紙「おぼれる強盗に浮き輪を投げた」と痛烈に中国を批判。
3・3 国連海底平和利用委員会で中国代表、尖閣列島の領有権を強調、日本側は主権を主張して反駁。
4・4 警視庁、外務省の公電漏洩容疑で外務省事務官と毎日新聞記者を逮捕。
5・8 ニクソン米大統領北爆強化と北ベトナム全港湾の機雷封鎖を決定。
5・15 沖縄の施政権返還、沖縄県発足。
7・6 第69臨時国会、田中角栄を首相に指名。
9・29 田中首相訪中、日中共同声明調印、日中戦争状態終結、国交正常化。
11・5 上野動物園で中国寄贈のジャイアント・パンダ初公開。
12・10 第33回衆議院総選挙(自民271、社会118、共産38、公明29、民社19、無所属14、社会復調、共産躍進)。

- 1) 被爆者救援運動の今日における課題 「原水協通信」(347) 1・
- 2) 日本における階級分化と階級構成—大橋隆憲著『日本の階級構成』にふれつつ 「前衛」 2・
- 3) 〈座談会〉労働基準法をめぐる 「月刊総評」臨時号(婦人問題特集) *奥

山えみ子ほかと 3・

- 4) 国家独占資本主義と婦人問題(上・下) 「経済」(96, 99) 4・
 - 5) 原爆被爆者 『JAPONICA時事百科』 小学館 4・
 - 6) 「連合赤軍」事件のなぞ 「全国商工新聞」 4・17
 - 7) 第88回拡大常任理事会決定集 原水爆禁止日本協議会 *執筆に参加 5・
 - 8) 若い婦人の生き方 「第17回はたらく婦人の中央集会ニュース」 5・10
 - 9) 右翼日和見主義支配の特質—松下電器産業労働組合 『現代の労働組合運動』第2集 大月書店 6・
 - 10) 〈講演〉父母の願いに根ざす教育と中教審答申 『第3回平和と民主主義の教育と子どもを守る秋田県民大集会の記録』 平和と民主主義の教育と子どもを守る秋田県民会議編集 6・
 - 11) 「赤旗」と私 「赤旗 青山販売所だより」 6・30
 - 12) 援護法をめぐる 「被爆婦人の集い」(4) 大阪市原爆被害者の会婦人部 7・18
 - 13) 被爆者問題の新たな重要性 「赤旗」 7・26
 - 14) 労働時間とは? 「学習の友」 8・
 - 15) 原水爆禁止運動の現局面と労働組合—主要労組の運動方針にふれて 「労働・農民運動」(77) 8・
 - 16) 都市勤労諸階層の位置—その存立条件と統一戦線 「前衛」 9・
 - 17) 〈ゼミナール〉統一戦線論(レジュメ) 中央労働学院 *1972年秋季講義テキスト 9・
 - 18) 〈書評〉『被爆二世』深川宗俊監修 被爆二世刊行委員会編 「文化評論」(135) 10・
 - 19) 田中内閣の労働政策の特徴 「労働・農民運動」(81) 11・
 - 20) 資本主義美化論としての民主社会主義 『民社党—その理論と行動』 日本共産党中央委員会編 *初出「前衛」'68.1 臨増 11・
 - 21) 〈学会報告〉職員層の階層分化(レジュメ) 社会政策学会第45回研究大会 11・1
-

1973(昭和48)年 1・13田中首相、憲政史上初めて共産党首脳(野坂参三)と個別会談。1・27米・南ベトナム・北ベトナム・南ベトナム臨時革命政府「ベトナム和平協定」調印。2・10公労協、スト権奪還要求で初めて半日スト。3・27初代駐日中国大使陳楚着任。4・30米大統領ニクソン、ウォーターゲート(民主党本部盗聴)事件に関与の疑い。7・5共産党、ソ連・中国の核保有、核実験にも反対すると表明。8・8金大中韓国新民党大統領候補、東京のホテル・グランドパレスからKCIAによって拉致される(金大中事件)。9・11チリに軍事クーデタ。アジェンデ大統領の人民連合政権崩壊。10・17ベルシャ湾岸6カ国、石油公示価格21%引き上げ宣言。10・17沖縄人民党、共産党に合流。11・2都市部で、トイレトペーパー買いだめパニック状況。12・14女子高生3人の車内雑談から派生したデマで愛知県豊川信用金庫の取付け騒ぎ。

- 1) 現代日本の社会問題 昭和48年度第1回社会福祉入門講座(レジュメ) 東京都民生局指導部福祉研修課
- 2) 田中新内閣の「新しい労働政策」 「労済だより」(29) 1・
- 3) 当面の情勢と被爆者救援運動の課題 「原水協通信」(357, 358合併号) 1・
- 4) 学問に息吹きを 「東京大学新聞」 1・1
- 5) 技術教育研究の新たな課題 「技術教育研究会会報」(78) 2・
- 6) 統一戦線と労農同盟 「月刊労農のなかま」9(14) 2・
- 7) 〈書評〉『暮しの経済教室』 金子ハルオ編 「経済」(107) 3・
- 8) 本田良介さんを偲ぶ 本田良介合同葬委員会 *弔辞 3・15
- 9) 筑波法案と私立大学 「学生新聞」 3・28
- 10) 被爆者援護法の大綱—日本原水協の提案 4・18
- 11) 市民とともに歩む新しいオーケストラ運動—日本フィルハーモニー協会の設立を 「東京大学新聞」 4・23
- 12) メーカーに思う 「学習の友」 5・
- 13) 労働問題研究の今日における課題 「経済」(109) 5・
- 14) 〈書評〉『現代と労働運動』 向坂逸郎・岩井章監修 「前衛」 5・

- 15) 第19回原水爆禁止世界大会討議資料(パンフ) 原水爆禁止日本協議会
*編集に参加 6・
- 16) 沖縄にて「六・九行動ニュース」6・6
- 17) 〈書評〉『福祉と貧困の経済論』小泉宏著「赤旗」6・23
- 18) 労働時間統計について「金属労働資料」16(8) 8・
- 19) 都議選をかえりみて「住民と自治」(124) 9・
- 20) 科学的社会主義の古典と今日の労働組合運動の理論的把握「労働・農民運動」(92) 10・
- 21) みなさんの支援で最高裁での勝利を「バッチ権」(号外) 10・1
- 22) ぜんそうきょく「市民と音楽」1(2) 11・
- 23) 若い婦人労働者の'生きる道'をめぐって「民主青年新聞」11・21
- 24) 被爆者援護法をめぐる当面の問題点「原水協通信」(367) 12・
- 25) 社会党の被爆者援護法案要綱について「六・九行動ニュース」12・6

1974(昭和49)年 1・26 べ平連解散集会, 1・29 共産党不破哲三, 衆議院予算委員会で米原潜の放射能測定値の捏造を指摘, 2・6 衆議院予算委員会で共産党議員, ゼネラル石油が「石油危機」を「千載一遇のチャンス」でほろ儲けと督励の事実を暴く, 2・13 ソ連, 反体制作家ソルジェニーツィン国外追放, 5・10 公害等調整委員会, 古河鋳業足尾鋳毒事件で被害者ら971人に補償金15億円の調停案提示, 5・11 妥結(百年公害決着), 5・18 インド初の地下核実験(6番目の核保有国), 7・22 美濃部都知事, 韓国人被爆者に初めて被爆者手帳を交付, 7・26 家永教科書裁判第1次訴訟は東京地裁で敗訴, 8・15 韓国朴大統領, 光復節式典で狙撃され, 朴夫人死亡, 12・9 三木武夫内閣成立(椎名裁定), 12・19 北海道三井石炭鋳業砂川鋳でガス爆発, 死者15人, 12・28 共産党と創価学会, 相互不干渉・共存など期限10年の合意協定締結(松本清張伸介), 翌年7月に発表.

- 1) 主な統計とその見方「調査活動の手引き(全金シリーズ5)」(パンフ)
全国金属労働組合中央調査委員会編

- 2) 〈座談会〉戦後の大原社会問題研究所と労働年鑑(1) 「資料室報」(200)
*上杉捨彦ほか 1・
- 3) 「雇用関連統計」について 「金属労働資料」17(1) 1・1
- 4) 論壇時評(上・下) 「赤旗」 1・27, 29
- 5) 論壇時評(上・下) 「赤旗」 2・26, 28
- 6) 『現代労働組合事典』 現代労働組合事典編集委員会編 大月書店 *執筆
に参加 3・
- 7) ストライキ統計について 「金属労働資料」17(3) 3・1
- 8) 援護法をめぐる動き 「六・九行動ニュース」 3・15
- 9) 論壇時評(上・下) 「赤旗」 3・26, 28
- 10) ベトナムにかんするパリ協定実施のための国際会議に参加して ベトナム
にかんするパリ協定実施のための国際会議日本代表団編集 ベトナム人
民支援委員会中央センター 3・29, 30, 31
- 11) 『社会問題入門』改訂増補 村山重忠著 高文堂出版社 *解題を執筆
4・
- 12) 中小企業労働者の要求はどうしたら実現できるか「学習の友」 4・
- 13) 日経連の宣伝政策を斬る 「機関紙と宣伝」(491) 4・
- 14) 原職復帰への不屈のたたかい 「『嵐にむかって立つ』東京電力不当首切
り反対の記録」(パンフ) 山本君を守り勝利する会 4・
- 15) スtockホルム国際会議に参加して 「学生新聞」 4・24
- 16) いまこそ原水爆禁止運動の国民的統一を実現しよう一策20回原水爆禁
止世界大会をむかえるにあたって(リーフ) 4・30
- 17) インフレ経済情勢と宣伝の方向 「月刊紙パ」(83) 5・
- 18) 〈シンポジウム〉民主的改革と労働組合運動 「労働・農民運動」(100)
*政策実現のための組織と戦術を報告 5・
- 19) オーケストラと私 「赤旗」(日曜版) 5・19
- 20) 商業教育と職業訓練 「国民のための商業教育」(10) 6・
- 21) 第20回原水爆禁止世界大会討議資料(パンフ) 原水爆禁止日本協議会
*執筆・編集に参加 6・
- 22) 民社党の体質と民主社会主義 「経済」(122) 6・

- 23) 私にとっての灯台 「村山重忠先生その人—村山重忠先生追悼文集」 6・
- 24) 被爆者援護法の提案と国会審議をめぐって 「広島民報」 6・9
- 25) 「特定政党支持」しめつけを肯定する公明党—特集 参議院選挙と労働者・農民 「労働・農民運動」(102) 7・
- 26) 最近の反共論文が示す破綻と危険性—「文藝春秋」6月号を中心に 「前衛」 7・
- 27) エンゲルス 「基礎ドイツ語」25(4) 8・
- 28) 原水爆・原水禁運動の文献 「赤旗」 8・5
- 29) 〈書評〉『物価指数』 石田望著 「赤旗」 8・12
- 30) 言論の擁護か金権の擁護か—中村勝範氏の「サンケイ」弁護論 「赤旗」 8・18
- 31) 労働組合運動における行政研究活動 「国公労調査時報」(136) 9・
- 32) 〈座談会〉選挙戦の教訓と今後の政局 「前衛」*上田耕一郎、工藤晃、蕨沢忠雄、荒堀広ほかと 9・
- 33) 古典の学習 エンゲルス 「空想から科学へ」(1~6) 「学習の友」 9・~'75・2
- 34) 教育労働者の運動における若干の問題 「労働運動」(106) 10・
- 35) 〈鼎談〉学生時代と読書 「法政」(247) *松岡磐木ほかと 10・
- 36) 〈座談会〉戦後の平和の課題と科学者運動 「日本の科学者」9(11) *三宅泰雄、古在由重、草野信男と 11・

1975(昭和50)年

4・13美濃部都知事三選，黒田大阪府知事再選。
 4・30南ベトナム政権，無条件降伏，解放戦線軍はサイゴンへ無血入城(ベトナム戦争終結)，6・26原水禁統一問題懇談会(社・共両党，総評，日本平和委員会など7団体)初会合，7・30欧州安保・協力首脳会議(35カ国)「人権と自由尊重の新しい欧州共存体制」をうたうヘルシンキ宣言調印，10・11ベトナム・ハノイに日本大使館開設，10・31天皇・皇后，初の公式記者会見で原爆について「気の毒だったがやむを得ない」と発言，11・20スペイン総統フランコ没(82歳)，11・27北炭幌内鉱ガス爆発，死者24人，12・10立花隆「日本共産党の研究」(『文芸春秋』1月号)，

論議よぶ。

- 1) 〈書評〉『労働組合入門』 中林賢二郎著 「労働運動」(109) 1・
 - 2) 春闘20年のあゆみ 「学習の友」(春闘別冊) *解説・監修 1・
 - 3) 教師の階級的性格について 「教育」25(2) 2・
 - 4) 〈書評〉『日本のエネルギー問題』 岩尾裕純編 「赤旗」 2・17
 - 5) 〈シンポジウム〉統計のたたかい—その成果と課題(1~4) 「経済」(131~135) *上杉正一郎、敷田礼二、野田正穂ほかと 3~7・
 - 6) 労農同盟研究の座標をめぐって 「経済」(131) 3・
 - 7) 原爆被爆者の問題 「婦人新報」(894) 3・
 - 8) みんなの労働組合教室—男女差別とはなにか 「労働運動」(112) 4・
 - 9) 『婦人白書』 日本婦人団体連合会 *執筆・協力 4・
 - 10) 現代婦人論の課題 『現代の婦人論』 大月書店 5・
 - 11) 第21回原水爆禁止世界大会討議資料(パンフ) 原水爆禁止日本協議会 *編集に参加 6・
 - 12) 核のない世界を(1~20) 「原水協通信」(384~406) 6・~'77・4・
 - 13) 〈書評〉『社会主義協会向坂派批判』 日本共産党編 「前衛」 6・
 - 14) 音楽文化の基盤ということ 「音楽の世界」14(6) 6・
 - 15) 被爆者援護法をめぐる国会での審議録(1) —6月17日、参議院社会労働委員会 「被爆者ニュース資料」(8) *参考人として発言 7・
 - 16) 労働組合と統一戦線 「きずな」(9) 7・
 - 17) 堀江のおじちゃん 「労働者教育協会会報」(8) 7・
 - 18) 広島・長崎被爆30周年・第21回原水爆禁止世界大会 開会あいさつ 『大会の記録』 原水爆禁止日本協議会 8・
 - 19) 被爆者救援の観点 「赤旗」 8・5
 - 20) 被爆三十年に想う 「文化評論」(171) 9・
 - 21) 核兵器完全禁止めざして 「学習の友」 10・
 - 22) 被爆二世のこと 『友情の人文字MINE』 大阪市原爆被害者の会婦人部 12・
 - 23) 〈書評〉『右旋回した公明党10問10答』 「赤旗」 12・22
-

1976(昭和51)年

1・8中国,周恩来首相没(78歳). 2・6米ロッキード社が,全日空へ航空機売り込みのため政界工作の献金をした件につき,野党が衆議院予算委員会で追及(ロッキード事件). 4・5北京天安門広場で周恩来追悼花輪の撤去に対し群衆が抗議,警官と衝突(天安門事件). 6・10ビキニで「死の灰」を浴びた第五福竜丸展示館,東京夢の島に開館. 6・24ベトナム社会主義共和国成立. 7・27東京地方検察庁,ロッキード事件で前首相田中角栄を逮捕(秘書榎本敏夫も). 7・30共産党大会,「マルクス・レーニン主義」の呼称を廃止,「自由と民主主義の宣言」を採択. 8・1田中前首相の秘書兼運転手ロッキード事件を苦に自殺. 9・9毛沢東中国共産党主席没(82歳). 10・22中国,華国鋒首相の党主席就任と文革派江青ら4人組の逮捕(4人組事件). 10・29政府77年以降の「防衛計画の大綱」を決定(防衛費はGNPの1%以内). 12・7三木首相総選挙敗北の責任を取り退陣決意.

- 1) 公明党の労働組合政策を斬る 「労働運動」(121) 1・
- 2) 教育労働者の運動と統一戦線 「高教組時報」(24) 2・
- 3) ベトナム法律家協会会長へあてた書簡 2・10付け
- 4) わが国における労働力政策の特質 『現代の労働組合運動』第6集 大月書店 3・
- 5) 『ビキニ水爆被災資料集』 三宅泰雄他監修 東京大学出版会 *各章の概要と編集者注の文責を担う. 3・
- 6) 職業教育の社会的位置づけ 「国民のための商業教育」(14) 4・
- 7) 〈報告書〉ヨーク宣言と原水爆禁止運動の新たな局面—「軍拡競争の終結と軍縮のための国際フォーラムの報告」 フォーラム日本準備会 *執筆参加 4・
- 8) 〈座談会〉侵略と反動政治の擁護派—「文春」 立花論文批判 「前衛」(393) *塩田庄兵衛,犬丸義一と 4・
- 9) 国家独占資本主義と労働組合運動 第13回労働行政研究集会のまとめ 「資料全労働」特集号 4・30
- 10) 〈座談会〉「法政大学のビジョン」をめぐる 「法政」3(4) *舟橋尚道.

長谷川克彦ほかと 5・

- 11) 資本主義の'母国'にて—ヨーク国際フォーラムの報告(パンフ) [1976] 5・2
- 12) 〈インタビュー〉ヨーク・フォーラムに出席して 「赤旗」 5・7
- 13) 戦前・戦後の階級構成の特徴と変化 『新マルクス経済学講座』第6巻 有斐閣 6・
- 14) 『ビキニ水爆被災資料集』刊行に際して 「平和新聞」(847) 6・25
- 15) 〈書評〉『これが労働行政だ』 全労働省労働組合編 「労働運動」(127) 7・
- 16) 〈書評〉『戦後改革5 労働改革』 東京大学社会科学研究所編 「社会科学研究」28(1) 7・
- 17) 〈対談〉核兵器全面禁止を全世界の声に—原水爆禁止運動の到達点と第22回世界大会の課題 「月刊全自運」(140) *旗智政幸と 7・
- 18) ヒロシマ・アピールを全世界に 「学習の友」 7・
- 19) 〈座談会〉今日の「能力主義」政策と子ども・青年の発達 「教育」(331) *高野哲郎、茂木俊彦、堀尾輝久と 7・
- 20) 〈書評〉『科学的社会主義か反共的社会主義か—勝間田論文に反論する』 上田耕一郎著 「赤旗」 7・19
- 21) 労働統計 『社会科学としての統計学—日本における成果と展望』 経済統計研究会編 産業統計研究社 *「統計学」創刊20年記念号 8・
- 22) 核兵器をなくすために 『みんなの話しあいのために』(討議資料) 第22回日本母親大会実行委員会 8・
- 23) 第22回原水爆禁止世界大会国際予備会議開会あいさつ 『世界大会の記録1』 原水爆禁止日本協議会 8・
- 24) 『広島・長崎の原爆被害とその後遺—国連事務総長への報告』 核兵器全面禁止国際協定締結・核兵器使用禁止の諸措置の実現を国連に要請する国民代表団派遣中央実行委員会 *報告書作成メンバーに伊東壮ほかと英語版も作成 8・6
- 25) 労働運動と教育 『教育学全集』第14巻 増補版 小学館 9・
- 26) 〈シンポジウム〉社会党に問われているもの—上田・勝間田論争の意義

「前衛」 10・

- 27) 全労働20周年を記念して「全労働」(918) *労働政策研究会代表として
挨拶 10・11
- 28) 「新しい日本を考える会」の新ビジョン批判 「学生新聞」 11・3
- 29) 原水爆禁止運動における基地撤去・沖縄返還・ベトナム人民との連帯
「原水協通信」 11・6
- 30) 〈座談会〉産業再編でひろがる雇用不安 「経済」(152) *司会田沼、佐藤
洋輔ほかと 12・
- 31) 選択一私のひとこと 「住民と自治」(163) 12・
- 32) むり絵 「とおんきごう」第15号 *中・高校生音楽新聞 12・
- 33) 私立大学における今後の組合運動のあり方 『〔第8回〕全法政教研集会
報告』法政大学教職員組合(全法政討議資料その6) 12・17

1977(昭和52)年

2・17茨城県百里基地訴訟で水戸地裁18年7カ月ぶりに判決(自衛隊を合憲とみなす). 3・11ブラジル, 25年間にわたる米国との相互防衛協定破棄. 5・11北海道三井石炭鉱業芦別鉱でガス爆発, 死者25人. 5・26米ロッキード社, 不正支払いの調査報告書公表(日本へは1030万ドル=30億円). 5・27共産党, 齒舞・色丹を北海道の一部とし, ソ連に返還を要求する新見解を表明. 8・3原水爆禁止統一世界大会国際会議広島で開催(原水協, 原水禁の統一大会は14年ぶり)初めて国連代表アメラシゲ総会議長参列. 8・12中国共産党全国代表大会で華国鋒主席, 毛沢東路線の踏襲と文化大革命終結を宣言. 9・27米ファントム偵察機横浜緑区の民家に墜落, 幼児2人死亡, 後に母親も死亡. 9・29日本赤軍ボンベイで日航機乗りダッカ空港に強行着陸. 日本に拘留中の同志ら9人の釈放を要求. 9・一田口富久治と不破哲三, 先進国革命と党組織論, とくに民主集中制について論争. 11・30米軍立川基地全面返還.

- 1) 農協労働者にとっての地域づくりの意味 「月刊労農のなかま」14(2) 1・
- 2) 被爆者の援護・連帯のために被爆者の訴えを世界の人びとに一国連NGO主催「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」の

- 成功にむけて(パンフ) 原水爆禁止日本協議会 *執筆・編集に参加 1・
- 3) 国際シンポジウムの意義と77年原水爆禁止、被爆者援護・連帯運動の展望「平和運動」(99) 1・
 - 4) '第二の人生'の二年目「第五福竜丸平和協会ニュース」 1・1
 - 5) 〈書評〉『革新多数派への時代』 榊利夫著 「赤旗」 1・17
 - 6) 「保護と平等」をめぐる『第8回国公全国婦人集会報告集』 国家公務員労働組合連合会婦人協議会 3・
 - 7) 〈書評〉『民主的教育労働運動論』 小森秀三著 「文化評論」(191) 3・
 - 8) 「政策構想フォーラム」の主張と科学的な階級・階層区分の立場 「赤旗」 3・23
 - 9) 被爆者問題国際シンポジウムの意義と構想「NEWS LETTER」 3・30
 - 10) 「婦人白書1977年版」 日本婦人団体連合会編 草土文化 *執筆・協力 4・
 - 11) 革新と「中道」を問う 「文化評論」(192) 4・
 - 12) 国内行動計画と平和の願い 「母親しんぶん」(239) 4・15
 - 13) 民社党の「一九七七年度政策大綱」批判 「赤旗評論特集版」(5) 4・25
 - 14) 国民春闘で問われたもの 「労働運動」(138) 6・
 - 15) 1日も早い核兵器廃絶のために(パンフ) 原水爆禁止日本協議会 *執筆・編集に参加 6・
 - 16) 江田三郎氏がのこしたもの 「学生新聞」 6・15
 - 17) 『原爆被爆者問題』改訂版 新日本出版社 7・
 - 18) 核兵器のない世界をめざして—初期世界大会の宣言・決議にみる「核兵器廃絶と原水爆禁止運動の国民的統一をめざして」 原水爆禁止日本協議会編 *執筆・編集に参加 7・
 - 19) 原水禁運動の統一と被爆国民の責任 「文化評論」(195) 7・
 - 20) 核兵器・基地・安保条約など「みんなの話しあいのために」 第23回日本母親大会 *執筆・編集に参加 7・
 - 21) 原水爆禁止運動統一にひろがる支持 「労働運動」(139) 7・
 - 22) 原水禁運動の統一と被爆者援護 「議会と自治体」(224) 8・
 - 23) 原水禁統一世界大会の成功をめざして 「赤旗評論特集版」(19) 8・1

- 24) NGOシンポの成果と被爆者問題の今日的課題 「赤旗」 8・27
 25) 日フィル二〇年史の刊行をめざして 「市民と音楽」 10・
 26) 〈座談会〉危機のなかのくらし 「婦人通信」(211) *真篠久子・菊田和子・
 佐々木綾子・安藤玲子と 12・
 27) 国際語‘ヒバクシャ’ 「学習の友」 12・

1978(昭和53)年

1・10総理府、初の『婦人白書』発表。女子労働人口2010万人、労働人口の37.4%、既婚者60%、平均賃金男子の58.3%。3・26三里塚・芝山成田空港反対同盟、滑走路南端の鉄塔再建をめぐり警官隊と攻防。4・12中国漁船108隻、尖閣列島で示威行動、日本巡視船退去を要求。5・23初の「国連軍縮特別総会」開幕(～7・1)。5月26日、日本から原爆被爆者を含む反戦平和の4000人デモが、5月27日米国平和運動グループ主催核兵器廃絶デモ1万5000人がニューヨーク国連本部へ行進。核兵器完全禁止要請の日本国民代表団、核兵器禁止の署名を国連事務総長に手渡す。10・7靖国神社、東条英機らA級戦犯14人を合祀(79・4・19表面化)。12・18中国、鄧小平路線の「改革開放」へ。12・25ベトナム軍とカンボジア救国民族統一戦線、ポル・ポト政府軍と激突。

- 1) 78春闘をどう切り開くか 「労働運動」(145) 1・
- 2) 〈座談会〉戦後世界と平和運動を考える—核兵器廃絶を中心にして 「科学
 と思想」(27) *平野義太郎、辻山昭三、西島有厚ほかと 1・
- 3) 未来を信ずる仲間に大きな励まし 「青年のこの熱情は消せない—解雇・
 刑事弾圧・重病に屈せずたたかう奥田くんに支援を」 奥田喜一君を守る会
 1・
- 4) 中間階級論の歴史的な性格—現在の論争をみるにあたって 「赤旗」 1・15
- 5) 国連軍縮特別総会へむけて 「母親しんぶん」 1・15
- 6) 原水爆禁止運動における国民的大統一の組織を実現するために—特別報
 告2 「1977年日本平和大会報告集」 日本平和大会実行委員会 1・23
- 7) 人間の尊厳へ挑戦した判決 「救援新聞」(604) *「ベトナム・バッチ権事
 件」について最高裁判決を批判する 1・25

- 8) 〈講演〉暮らしを守る地方自治と民主的な国政 『明るく住みよい目黒をつくる区民のつどい』 明るく住みよい目黒をつくる連絡会 3・
- 9) 日本フィル協会の五年 「市民と音楽」 3・
- 10) 〈書評〉『現代賃金闘争の理論』 黒川俊雄著 「赤旗」 3・13
- 11) 大切な思想・信条の自由 「法政」5(3) *学部長として新入生におくることば 4・
- 12) メーカーのルーツ 「赤旗」 4・30
- 13) 商業経済の教育研究運動の課題 『国民のための商業教育』(18) 5・
- 14) 『婦人白書1978年版』 日本婦人団体連合会編 草土文化 *執筆・協力 5・
- 15) 〈講演〉行政民主化と労働組合の役割 「資料全労働」 特集号 5・
- 16) 〈書評〉『統一戦線論争』 上田耕一郎著 「文化評論」(205) 5・
- 17) '労働者' 概念をめぐる松下圭一氏らの議論 「赤旗」 5・25
- 18) 原水爆禁止の課題と国連軍縮特別総会 「赤旗」 5・26
- 19) 政府・独占資本の雇用・失業政策 「季刊学習」(9) 6・
- 20) 中小企業の民主的発展と労働組合運動 『現代の労働組合運動』8 大月書店 6・
- 21) 国連軍縮特別総会とは 「学習の友」 7・
- 22) 民主的婦人運動をめぐる諸問題—「女子教育論」批判 「高教組時報」(34) 8・
- 23) 被爆の実相を伝え知らせる意味—焦眉の課題となった核兵器全面禁止への重要な足がかり 「文化評論」(208) 8・
- 24) 国連要請国民代表団の成果 「婦人新報」(935) 8・
- 25) 〈座談会〉国連軍縮特別総会と日本の原水爆運動 「前衛」 *立木洋・吉田嘉清らと 8・
- 26) 被爆者調査 はじめに 『被爆の実相と被爆者の実情—1977 NGO被爆問題シンポジウム報告書』 日本準備委員会編集 朝日イブニングニュース社 *執筆・編集に参加 9・
- 27) 78核兵器完全禁止・被爆者援護世界大会を終えて 「医療労働者」(544) 9・5

- 28) 〈書評〉『科学について』 三宅泰雄著 「赤旗」 10・30
 29) 有事立法か平和・民主主義か 「学習の友」 11・
 30) 行政の民主化と労働組合運動 「民主的行政改革の理論」 渡辺佐平編
 大月書店 12・

1979(昭和54)年

1・1米・中、国交回復。米、台湾と断交。1・4米
 グラマン社の海外不正支払いについての報告書、
 対日関係も明示(グラマン事件)、(1・8)前同社副社長チータム、早期警戒
 機E2Cの対日売り込みにつき岸信介、福田赳夫、松野頼三、中曽根康弘と
 個別に会談、代理店は日商岩井と発言。1・7カンボジア救国民族統一戦線、
 ベトナム軍の支援を受け首都プノンペンを制圧、新政権樹立。2・1グラマ
 ン疑惑の重要人物、日商岩井島田常務自殺。2・17中国・ベトナム国境で戦
 争勃発。4・24創価学会日蓮正宗と対立。5・15北海道の三菱石炭鉱業南
 大夕張鉱でガス爆発、16人死亡。10・16韓国大統領朴正熙、側近のKCIA
 部長に射殺される。11・19宮本共産党委員長、社会党の社・公中軸路線、
 総評の右寄り再編を批判、新ナショナルセンターも辞さずと表明。12・18
 国連総会、あらゆる形式の女性差別を国際法違反と定めた国際協定を採択。

- 1) 近江谷駒先生のこと 「文化評論」(213) 1・
- 2) 『ビキニ水爆被災資料集』のいっそうの普及を 「福竜丸だより」 1・15
- 3) 社会学部で学ぶ人びとのために 「全国私立大学大鑑」 駿台文庫 3・
- 4) 〈書評〉『平和の思想—その歴史的系譜』 平野義太郎著 「赤旗」 3・19
- 5) 『ノーモア・ヒバクシャ 学習資料—被爆者援護・連帯活動のために』 原
 水爆禁止長崎協議会 4・
- 6) タテ割り式の読書 「BOOK」法政大学生協 1979年新入生歓迎号 4・
- 7) 日本原水協とソ連平和擁護委員会との関係正常化(パンフ)原水爆禁止日
 本協議会 *6月24~30日、モスクワで団長として総括的発言。過去の経緯
 について補足的発言及び「共同コミュニケ」発表にいたる経過の報告 6・24
- 8) はばたけ未来へ 80年代の日本をになう国政革新のリーダー 今井伸央
 氏選挙パンフ 7・

- 9) 私の余暇 「前衛」 7・
- 10) 〈書評〉『婦人白書1979年版』 日本婦人団体連合会編 「婦人通信」(233) 8・
- 11) 〈対談〉被爆者とともに一被爆問題国際シンポジウムから2年 「文化評論」(220) *服部学と 8・
- 12) 〈書評〉『核時代の軍備と軍縮』 スtockホルム国際平和研究所編 「赤旗評論特集版」 9・17
- 13) 「学連」結成55周年に想う 「学生新聞」 9・19
- 14) 国連軍縮週間を迎えるに当たって 「赤旗」 10・23
- 15) 〈座談会〉カラ出張・カラ超勤問題と公務員労働者 「国公労調査時報」(200) *田岡俊次ほか3名と 11・
- 16) 80春闘をめぐる情勢 『80年春闘学習・教宣資料集』 労働者教育協会 *執筆・監修 12・
- 17) 原水爆禁止運動の発展とマスコミ労働者に求められるもの 「出版労連」(696) 12・11

1980(昭和55)年 1・10社会・公明両党、連合政権構想で合意(共産党除外、民社党とはブリッジ形成)。2・26宮本共産党委員長、社会党の右転換批判、自主路線を表明。5・4ユーゴのチトー大統領没(87歳)。5・14都教祖大会、統一労組懇加入を決定。5・18韓国政府、非常戒厳令を全土に拡大。光州で反政府デモ激化、機動隊と衝突。(5・21)学生・市民、武器を奪い全市を占拠。(5・27)戒厳軍光州に入り軍事制圧、死者多数、金大中を国家転覆罪で逮捕(光州事件)。5・31大平首相死去(70歳)。6・9ユネスコ、初の軍縮教育会議「広島・長崎の被爆を世界の教科書に」採択。7・19第22回オリンピック・モスクワ大会開会式。日本、アメリカに同調して不参加。8・31ポーランド政府自主管理労組「連帯」(ワレサ委員長)にスト権保障。12・14中国共産党総書記胡耀邦、文革を全面否定、毛沢東を名指して批判。

- 1) 〈対談〉母を想いはげまされ第4の人生へ 「80年原水爆禁止世界大会と行

- 動の記録」 原水爆禁止日本協議会 *渡辺千恵子と
- 2) 『戦争と平和を考える文集』 都立農業高等学校 *巻頭言執筆
 - 3) 『軍縮教育資料集』 軍縮教育研究会編 *服部学, 田川時彦と共同編集
 - 4) 〈パネルディスカッション〉ナショナルセンターの正しいあり方をめぐって「労働運動」(169) 1・
 - 5) 「原爆被爆者等援護法の大綱」(一部修正)の発表にあたって「原水協通信」(434) 1・
 - 6) 連載 80年代と統一戦線(6回シリーズ)「学習の友」(317~322) 1~6・
 - 7) 〈書評〉『現代社会と労働・社会運動』 相沢与一著「赤旗」2・25
 - 8) 国際自由労連の本質は変わっていない『新しいナショナルセンターの確立を』荒堀広編著 新日本出版社 3・
 - 9) 『原爆被害の全体像に関する実証的研究—昭和53-54年度科学研究費補助金研究成果報告書』文部省 *研究・執筆に参加 3・
 - 10) 〈書評〉『階級と階級構造』 A・ハント編, 大橋隆憲, 小山陽一ほか訳「経済」(192) 4・
 - 11) 80年代春闘の可能性「機関紙と宣伝」(563) 4・
 - 12) 主体性をもって勉学を「法政」(301) *学部長として新入生におくることば 4・
 - 13) 「ボクラのナツヤスミ」を読んで『つくし』*青山師範付属小学校同窓会誌 卒業40周年記念 4・
 - 14) 笹川良一氏ユネスコに平和教育賞提案「子どもを守る」(327) 4・15
 - 15) 被爆者援護法制定と国家責任「赤旗」6・6
 - 16) 〈書評〉『社会党の右転換批判』 日本共産党編「前衛」7・
 - 17) 『ある内務官僚の軌跡』 上田誠吉著 大月書店 *「あとがき」執筆 7・
 - 18) 〈書評〉『婦人白書1979年版』 日本婦人団体連合会編「赤旗」7・2
 - 19) 国民生活と民主的行政改革—行政政策研究会研究報告 *渡辺佐平座長のもと, 12名のメンバーの一人として参加 8・
 - 20) 被爆者援護法実現のために「平和新聞」8・5
 - 21) 団地の「壁」・職場での「壁」『まきのほら』 牧の原団地一街区自治会

8・5

- 22) ユネスコ主催「軍縮教育世界会議」をめぐって 「赤旗」 9・16
 23) 法政大学100年に想う *法政大学附属女子校における挨拶 10・15
 24) 岩井章氏への提言—革新統一戦線の新たな構築のために 「文化評論」
 (235) 11・
 25) 明日の教師たちへ 「学生新聞」 11・12
 26) 原爆被爆者対策基本問題懇談会意見報告書批判(リーフ) 12・

1981(昭和56)年 3・2中国残留孤児47人初の正式来日(26人身元判明), 4・9米原子力潜水艦, 鹿児島県沖で貨物船日昇丸に衝突, 2人死亡, 米潜水艦救助せず逃げる, 4・18原発敦賀発電所で放射能漏れ発見, 会社側の秘匿が問題化, 6・10井上ひさし, 山住正己ら10人, 政府・自民党の教科書非難に抗議する「よびかけ」発表, 6・29中国共産党, 華国鋒党主席解任, 胡耀邦主席昇格, 鄧小平党軍事委員会主席に就任, 10・16北炭夕張新鉱でガス突出事故(救援隊10人を含め93人死亡), (10・23)火災発生で59遺体を坑内に残し注水, 11・13総評・日教組・文化団体など「教科書に真実を, 言論に自由を」集会を開く, 出版労連111組合, 教科書問題で実力行使, 11・15アテネで米軍基地撤去要求デモに20万人参加, マドリード, アムステルダムなどで大規模な反核デモ, 欧州各地で民衆の平和運動広がる.

- 1) 大学の両面の顔 「民主文学」(182) 1・
- 2) 「受忍義務」ということ 「第五福竜丸平和協会ニュース」 1・1
- 3) 〈講演〉今日の労働運動—その特徴と進路 「さけび」(306) 全損保東京地協 1・25
- 4) 〈対談〉革新統一の探求 『この手に革新統一を』 平和と革新をめざす東京懇話会 *松浦絵三と 2・
- 5) 革新統一へのうねり—「政治革新・統一戦線を語る全国交流会」に参加して 「光陽社内報」 2・3.合併号 2・
- 6) 「東京懇話会」と世直し 「東京民報」(736) 2・8

- 7) 「婦人差別撤廃条約」の署名と今後の課題 「経済と労働」(55) 労働特集 II 3・
- 8) 〈書評〉『労働組合運動論』(増補改訂版) 荒堀広著 「赤旗」 3・9
- 9) もっと「頭」を使おう—君たちへのメッセージ 「文化評論」(240) 4・
- 10) 核戦争の危機と平和の課題 「科学と思想」(40) *辻山昭三と共同執筆 4・
- 11) くらしと平和・民主主義をおびやかす動きと私たちの課題 「学協運動」(114) 4・
- 12) 「政治革新・統一戦線を語る全国交流会」に参加して 「東京懇話会ニュース」 4・1
- 13) ライシャワー発言について 「朝日新聞」 5・18(夕刊)
- 14) 統一戦線運動と労働組合運動 「労働戦線統一問題のすべて」(学習の友別冊シリーズI)学習の友社 6・
- 15) いま希望がもてる—「全国革新懇」の結成にさいして 「学生新聞」 6・24
- 16) 『平和・軍縮教育資料集』増補改訂版 軍縮教育研究会編 *服部学・田川時彦と共同編集 7・
- 17) 〈シンポジウム〉民主社会主義イデオロギー批判1~2 「季刊科学と思想」(41~42) 7・~10. *山科三郎ほかと 7・
- 18) K君. 核戦争の準備がここまできているんだ 「学習の友」 8・
- 19) 社研・書房そして学評 「桜井恒次さん追悼文集」 8・
- 20) 「真の平和綱領のために」を読んで 「赤旗」 8・18
- 21) 被爆者援護運動と峠さん 「民医連医療」(110) 9・
- 22) ①わが国における労働力政策の特質 *丸谷肇と共同執筆. ②労働分野における「婦人差別撤廃条約」の意義 『現代の労働政策』江口英一・田沼肇・内山昂編著 大月書店 10・
- 23) 「革新統一愛知懇談会」に招かれて(7.4.) 『懇談会記録集』 10・
- 24) 反核・軍縮をめぐる情勢と課題—第8回秋の学習交流大集会への問題提起(レジュメ) *主催:統一戦線促進労働組合懇談会 10・3
- 25) 〈速記録〉日本における統計学の発展 37 話し手上杉正一郎 聞き手の一人として参加 11 ~ 12・

- 26) 日本フィル第3回シンポジウムのまとめ 「市民と音楽」(48) 11・4
 27) 原爆写真パネルを海外の大学におくろう 「学生新聞」 11・25
 28) 核軍拡の現状と第2回国連軍縮特別総会の課題 「世界政治」(610)
 12・上旬
 29) 平和と人権について 「赤旗」 12・23

1982(昭和57)年

2・9日航機、羽田空港前の海面に墜落、24名死亡。3・21「82年=平和のためのヒロシマ行動」開催、国連軍縮特別総会に向けて行動アピール。「東京行動」空前の40万人「草の根」反核運動に結集。3・22米国上院、核問題討論会で広島に被爆者4人が証人に立つ。6・6国連軍縮特別総会へ向け反核運動、(6・12)ニューヨークで100万人国際デモに発展。7・27共産党大会宮本議長、不破委員長、金子書記局長選出(野坂議長引退)。8・5原水爆禁止世界大会、広島で開催、空前の3万人、海外代表88人結集。11・10ソ連共産党ブレジネフ書記長没、(11・12)アンドロポフ書記長に就任。11・25鈴木首相辞任、中曽根首相就任。12・23韓国、金大中釈放されるも本国に居住を許されず出国、アメリカへ。

- 1) 〈対談〉新春対談 「東京民報」 1.3~4. *永畑道子氏と 1・3
- 2) 戦後日本における労働政策の展開過程 『昭55年度大学助成による研究経過報告集』法政大学 3・
- 3) '核均衡'で人類は生き残れるか 「祖国と学問のために」(653) 3・3
- 4) 〈書評〉E.P.トンプソンほか著(山下史ほか訳)『核攻撃に生き残れるか』 「日中友好新聞」 3・21
- 5) 〈書評〉『現代資本主義と労働者階級』戸木田嘉久著 「経済」(217) 5・
- 6) 平和・軍縮学習に求められているもの 「月刊社会教育」26(5) 5・
- 7) 第2回国連軍縮特別総会を前にして 「学習の友」 5・
- 8) 核軍拡と平和の危機に(上・下) 「まちだ懇話会ニュース」 5・
- 9) 全国革新懇結成一周年記念第2回拡世話人総会における発言 『総会記録』 平和・民主主義・革新統一をすすめる全国懇話会 5・26
- 10) 労働政策の民主的改革と当面する行政機構の改革 『労働政策研究会合

同部会報告】*共同執筆 6・

- 11) “活字離れ”についてのアンケート回答から 「出版レポート」(21) 6・
- 12) 〈座談会〉日本共産党の60年と労働組合運動 「労働運動」(199) *春日正一、吉田明、金子健太と 7・
- 13) 栢野先生追悼 「生協」教職員版 7・5
- 14) 被爆者援護法実現のために一国の三つの責任追求を 「平和新聞」 7・15
- 15) 「国際理論シンポジウム」を傍聴して 「赤旗」日曜版 7・18
- 16) 〈座談会〉時代ゆるがす反核運動の波 「前衛」*金子満広、上田耕一郎と 8・
- 17) 核兵器廃絶の運動と軍縮の道—第2回国連軍縮特別総会をめぐって 「世界政治」(626) 8・
- 18) 反核運動のもりあがりを日本政府へ—シリーズ 「核軍縮・平和」の学習のために5「学習の友」 8・
- 19) 第2回国連軍縮特別総会に思う 「子どもを守る」(355) 8・15
- 20) 労働行政機構の当面の改革方向について 「労働政策研究会中間報告」*共同執筆 9・
- 21) 〈書評〉『原爆の碑』黒川万千代編、『原爆瓦』山口勇子著 「労働運動」(201) 9・
- 22) 第2回国連軍縮総会と原水禁大会をめぐって 「日本とソビエト」(692) 9・1
- 23) 〈書評〉『地球の運命』ジョナサン・シェル著 斎田一路・西俣総平訳 「赤旗」 10・4
- 24) 核シェルターのこと 「月刊学習」 11・
- 25) 創立八周年に想う 「福竜丸だより」 11・28
- 26) 〈討論〉核戦争の危機と反核運動 『日本の革新をどうすすめるか』全国革新懇編 大月書店 *上田耕一郎、小中陽太郎、猿橋勝子、中野好夫、山本和と 12・
- 27) 「非核地域宣言」運動をめぐって—日本原水協全国事務局長・専従者会議における発言 「原水協通信」(466) 12・6
- 28) Condition of Atomic Bomb Survivors 「NO MORE HIROSHIMAS !」

12・25

1983(昭和58)年 1・18中曽根首相, レーガン米大統領と会談し, 「日米は太平洋をはさむ運命共同体」と発言. 19日付「ワシントンポスト」は, ソ連のバックファイヤー爆撃機侵入阻止に関連して「日本列島, 不沈空母」との発言を記載. 3・1日産自動車・同労組, ロボット化に伴う解雇や労働条件の切下げは行わないとの覚書調印. 5・26日本海中部(秋田沖)地震, 大津波により遠足の学童ら104人死亡. 7・20欧州初の広島・長崎原爆展開催(ジュネーブ, ウィーン, パリ). 9・1ニューヨーク発ソウル行の大韓航空機, ソ連領空内に侵入し墜落される(日本人28人を含む269人死亡). 10・9ビルマ, ラングーンのアウンサン廟で爆弾テロ. 訪問中の韓国副首相ら17人死亡. 韓国政府北朝鮮の犯行と発表(北朝鮮否定). 10・12ロッキード事件公判で田中元首相実刑判決(丸紅ルート). 12・7スペイン, マドリード空港で旅客機衝突, 日本人34人を含む93人死亡.

- 1) 「第五福竜丸」と平和の願い『静岡県の昭和史』 毎日新聞社
- 2) 『私たちの生活は今平和といえるでしょうか』 品川区教育委員会講義録
- 3) 防衛庁の広告「子どもの本棚」(161) 1・
- 4) 日本の軍事大国化と反核・平和「民医連医療」(126) 1・
- 5) いま平和が危ない〈パンフ〉 原水爆禁止日本協議会 *執筆・編集に参加
1・
- 6) 『現代の農村社会—農村諸階級の構成』 栢野晴夫編著 田沼肇監修 高文堂出版社 *「あとがき」を執筆 2・
- 7) 国のほおかぶり許せば新たな核戦争の危険が 「原水協通信」(468)兵庫版(20) 2・6
- 8) 栢野晴夫教授のこと 「社会労働研究」29(3・4) 3・
- 9) 〈座談会〉埼玉県・上尾市原水協訪問記 「原水協通信」(469) 3・6
- 10) Hibakusha: Victims of Bomb Experiments 「NO MORE HIROSHIMAS !」 4・1
- 11) 佐賀県・唐津原水協訪問記 「原水協通信」(470) 4・6

- 12) 労働行政研究序論 『社会政策と労働問題』黒川俊雄・佐野稔・西村豁通編 未来社 *大友福夫先生還暦記念論文集第2巻 5・
- 13) 人類は核戦争によって自滅するか 『これからどうなる—日本・世界 21世紀』岩波書店 5・
- 14) 革新懇運動について 『草の根から革新の風を—全国革新懇遊説講演集』平和・民主主義・革新統一をすすめる全国懇話会 5・
- 15) 全国革新懇第3回世話人総会の記録における意見発表 『総会記録』平和・民主主義・革新統一をすすめる全国懇話会 5・
- 16) 俺たち戦争きらいだ!—埼玉高校生平和ゼミナールの運動にみる 「原水協通信」(471) 5・6
- 17) 平和・軍縮の課題と教育 *第2回平和・軍縮教育フォーラム5.21~22横浜にて 5・21
- 18) 世界平和のために—だから私は共産党 「赤旗」 5・31
- 19) '事実'の重さ 「直樹よ甦れ—ヒロシマの母は慟哭する」 大阪市原爆被害者の会 6・
- 20) 日本の軍事大国化と反核・平和運動 「医学評論」(74) 6・
- 21) 核戦争反対—なくそう核兵器。つなげよう平和のくさり(パンフ) 原水爆禁止日本協議会 *執筆・編集に参加 6・25
- 22) Peace & Disarmament Education 「NO MORE HIROSHIMAS !」 7・10
- 23) 『非核自治体宣言シンポジウム(1983.3.5)における報告』 原水爆禁止東京協議会 8・
- 24) ヨーロッパの反核運動「詩人会議」21(8) 8・
- 25) 非核自治体宣言シンポジウムでの問題提起 「核兵器つくらず持たず持ちませず—非核自治体宣言集(3)」 原水爆禁止東京協議会 8・
- 26) 「国際協力をすすめる会議」(日本原水協主催)の趣旨説明 *83年世界大会の前日に開催 8・
- 27) 平和擁護の課題と労働組合運動—1983年度日高教学習討論集会における講演 8・28—30
- 28) 日本の核戦場化の危機 「京都自治労運動」(40) 9・

- 29) 〈書評〉『平和・軍縮のための教育』 森田俊男著 「前衛」 9・
30) 「戦後責任」に想う 「全国革新懇ニュース」(27) 9・5
31) ビキニ水爆被災の全容を 「福竜丸だより」 10・10
32) Why Hibakusha Demand Relief Based on State Compensation 「NO
MORE HIROSHIMAS !」 10・20
33) 〈パネルディスカッション〉日本労働組合運動の民主的再建のために
「労働運動」(215) *岩井章, 清水慎三, 猿橋真ほかと 11・
34) 日本原水協被爆者援護・連帯全国活動者会議への問題提起(レジュメ)
11・19
-

1984(昭和59)年

1・18 三井石炭鉱業三池有明鉱の海底坑道で火災, 死者83人, 1・19 国連食糧農業機関(FAO), 長期旱魃と人口増でアフリカ24カ国1億5000万人が飢餓状態と発表, 2・9 ソ連共産党書記長アンドロポフ没, 後任チェルネンコ政治局員, 3・12 高松地裁, 財田川事件('50年殺人)再審で死刑囚に無罪判決, 7・11 仙台地裁, 松山事件('50年, 殺人)再審で無罪判決(確定), 4・4 共産党「統一戦線と分裂の路線—原水爆禁止運動30年の経験と教訓」で'77年来の原水禁運動を総括, 後退と右傾化を批判(機関紙「赤旗」), 6・24 原水禁・総評など, 明治公園でマホーク寄港反対の集会, 地婦連, 生協連など9団体, 多摩ニュータウンで集会(原水禁大会準備委の提唱した統一大会は不調), 10・20 中国, 経済体制の改革に対する決議, 価格に市場性導入, 10・31 インド, ガンジー首相暗殺される, 12・25 電電公社, 民営化,

- 1) 日本と太平洋が核戦場になる—ビキニ水爆被災30周年(パンフ) 原水爆禁止日本協議会 *執筆・編集に参加 1・
- 2) マルクス没後100年 (1)青年時代 (2)壮年期・晩年 「基礎ドイツ語」(10~11) 1, 2・
- 3) '三つの目標'の意義 「平和と革新をめざす東京懇話会ニュース」 1・5
- 4) 〈書評〉『問われる通産省』全商工労働組合, 通産行政研究会編 大月書店 「国公労調査時報」(252) 2・

- 5) 共通一次試験「非核三原則」の問題に抗議 「原水協通信」(480) 2・6
- 6) 侵略戦争礼賛の歴史—国際的にも最右翼の民社 「赤旗」 2・11
- 7) 日本における社会階級構成の特質 「私学研修」(95) *昭和57年度国内研修報告集 3・
- 8) 「非核自治体宣言」の意義 「平和教育」(18) 4・
- 9) Actions born of sufferings of hibakusha 「NO MORE HIROSHIMAS !」 4・10
- 10) 〈書評〉『ある地区労の歴史』横浜地区労年史編集委員会編 「労働運動」(221) 5・
- 11) 全法政の30年を語る歴代委員長 「全法政30年のあゆみ」 法政大学教職員組合 30周年記念事業委員会編 5・
- 12) 自分たちの運命は自分たちで決める宣言—非核東京都宣言 「東京懇話会ニュース」(38) 5・5
- 13) 〈書評〉『戦争と平和と科学者と』 三宅泰雄著 「赤旗」 5・14
- 14) 核戦争を許さない(パンフ) 原水爆禁止日本協議会 *執筆・編集に参加 5・25
- 15) 非核自治体の展望と今後の課題—神戸港非核シンポジウムのまとめ 7・
- 16) ME化と労働問題 「技術教育研究」(25) 8・
- 17) 津金さんと「長崎アピール」 『津金佑近 仕事と回想』 8・
- 18) わが国における社会階級構成論の到達点 『現代の階級構成と所得分配』 坂寄俊雄, 戸木田嘉久, 野村良樹, 野澤正徳編 有斐閣 9・
- 19) ハンガリーにお伴して 『洲崎義郎回想録—進歩と平和への希求』 洲崎義郎回想録刊行会 9・30
- 20) 〈書評〉『組頭制度の研究』 藤本武著 「経済」(246) 10・
- 21) 『日本の労働組合運動』(全5冊) 同編集委員会編 大月書店(10.~1985.6.) *編集委員 10・
- 22) 被爆者援護・連帯運動についての発言 「核戦争阻止, 核兵器完全禁止非核化, 被爆者援護・連帯のための国際シンポジウムの記録」原水爆禁止日本協議会 *杉山秀夫ほか5名と 10・
- 23) 被爆40周年と被爆者援護・連帯運動 「原水協通信」(488) 10・6

- 24) 〈書評〉『レッドパーズ』 塩田庄兵衛著 「青年運動」(263) 11・
25) 日本原水協被爆者援護・連帯全国活動者会議のまとめ 「原水協通信」
(490) 12・6
26) 故 板谷紀之氏へのお別れのことは 「原水協通信」 12・6
27) 〈インタビュー〉核戦争はホントにおきるかもしれない 「じかたび」
12・17
-

1985(昭和60)年 1・8 カンボジア, ポル・ポト派事実上崩壊.
3・10 ソ連共産党書記長チェルネンコ没. 後任に
ゴルバチョフ政治局員. 4・22 東京地裁, 共産党宮本委員長長宅盗聴事件,
創価学会副会長北条浩の関与を認定. 5・17 三菱石炭鉱業南大夕張鉱でガ
ス爆発, 死者62人. 7・25 国鉄再建監理委員会, 国鉄民営化の最終答申. 7・
27 中曽根首相靖国神社公式参拝を表明. 7・29 国労48回大会, 国鉄分割
民営化闘争方針で, 執行部が結んだ労使協定をめぐり激論. 8・4 全米各地
から約4万人が平和と反核を訴えワシントンに集結. (8・6) 欧米各地で広
島原爆40周年反核平和集会. 8・12 日航機約30分迷走し群馬県御巣鷹山中
に墜落, 520人死亡, 4人救助される. 8・15 南京に南京大虐殺記念館開館.
9・15 ソ連共産党ゴルバチョフ書記長「ペレストロイカ」を志向. 10・25 仏,
ムルロア環礁で地下核実験. 11・一西独大統領ワイツェッカー, 西独連邦議
会で「過去に目を閉ざすものは現在に盲目となる」の名演説.

- 1) 原爆被爆者40年の叫び 「文化評論」(286) 1・
- 2) 核兵器全面禁止をめざして 国内・国際署名提唱 「新医協」(1032) 1・
- 3) 『母と子でみる第五福竜丸』 第五福竜丸平和協会編 草土文化 *編集を
担当. あとがき執筆 1・
- 4) 〈座談会〉内外情勢と平和・友好運動の課題を語る 「日中友好新聞」*山
口正之, 和田一夫と 1・5
- 5) 〈座談会〉核兵器廃絶は青年の力で(上・中・下) 「全商工新聞」*平沢芝行
ほかと 1・5~25
- 6) 運動のひろがりと前進—日本原水協代表理事として新年によせる 「原水

協通信」(491) 1・6

- 7) 被爆40周年—'85年春特別インタビューにこたえて「緑の旗」(414) 1・10
- 8) '非核の政府'をめぐって「東京懇話会ニュース」(47) 2・5
- 9) 藤井日達師をしのぶ「原水協通信」2・6
- 10) ビキニデー・日本原水協集会(2.28)における挨拶「原水協通信」(493) 3・6
- 11) 『全港建35年のあゆみ』刊行によせて『全港建35年のあゆみ』上巻 運輸省全港湾建設労働組合編 学習の友社 4・
- 12) 核兵器は廃絶を「福祉のひろば」(22) 4・
- 13) いまこそ核兵器廃絶の世論を「学習の友」4・
- 14) 『おながく目覚時計』 畑井馨著 損保のなかま *本のおびに推薦文執筆 4・
- 15) 『核兵器廃絶と統一戦線運動—シンポジウム「人類史的課題としての核兵器廃絶」の記録』 平和と革新をめざす東京懇話会 *上田耕一郎と問題提起 4・17
- 16) 内外人民の反核・平和運動—運動の歴史と核兵器廃絶への展望「資料集 核兵器廃絶」 労働者教育協会編 学習の友社 5・
- 17) 『日本フィル物語』 日本フィルハーモニー協会編著 音楽之友社 *編集に参加 6・
- 18) 〈シンポジウム〉85反核・平和問題「日中友好新聞」*鈴木定夫氏と 6・25
- 19) 〈書評〉『核兵器廃絶への道』 宮本顕治著「青年運動」7・
- 20) 〈書評〉『核の冬—核戦争と気象異変』 増田善信著「国公労調査時報」(270) 7・
- 21) 〈シンポジウム〉転機に立つ労働政策の歴史的位置「労働運動」(237) *戦後労働政策の段階的特徴を報告 8・
- 22) 核戦争の危機と日本の進路—「ヒロシマ・ナガサキからのアピール」の意義「月刊保団連」(225) 8・
- 23) 着眼大局着手小局—都議選に想う「教職員の会ニュース」(53) 8・1

- 24) アピール署名に強い期待 「ヒロシマ・ナガサキからのアピール国内連絡会ニュース」(2) 9・26
- 25) 椎名麻紗枝さんのこと 『原爆犯罪』 椎名麻紗枝著 大月書店 10・

1986(昭和61)年

1・28米国のスペースシャトル・チャレンジャー打上げに失敗, 乗員7人死亡. 2・2コスタリカ大統領選, 中道左派の国民解放党アリアス当選(後に中米の紛争解決に尽力したことでノーベル平和賞). 2・28反核のスウェーデン首相ベルメ暗殺される. 4・26ソ連のチェルノブイリ原発事故, 付近住民11万6000人疎開, 31人死亡と発表. 近隣諸国に放射能汚染の恐怖広がる. 7・3「横浜事件」で治安維持法違反で有罪とされた元中央公論社出版部員や遺族9人横浜地裁に再審請求. 10・10国労臨時大会, 国鉄分割民営化に対する執行部提案の「緊急対応方針」を否決, 労使共同宣言を拒否, 国労事実上分裂. 10・23衆議院本会議, 「国鉄分割・民営化」法案を可決. 11・27共産党国際部長宅に電話盗聴器取り付け, 県警現職警官が実行. 12・9中国安徽省合肥で民主化を要求する学生デモ, 上海・北京・南京・天津・武漢に波及. 12・19ソ連, 反体制物理学者サハロフ夫妻の流刑解除, モスクワに戻る.

- 1) 労働組合の現状と革新懇の課題「革新懇運動と労働組合」〈パンフ〉 平和と革新をめざす東京懇話会 [1986] *編集・執筆に参加
- 2) 〈座談会〉誇り高く生きよう 「東京懇話会ニュース」*会沢立示, 近藤薫樹, 佐々木浩氏と 1・5
- 3) 反核1000人委員会のアピールについて 「原水協通信」(503) 1・6
- 4) 〈座談会〉核戦争阻止, 核兵器廃絶, 非核の日本をめざして 「原水協通信」(503) 1・6
- 5) 非核政府を 「統一労組懇」(92) 1・15
- 6) 原水協あいさつ一核兵器廃絶署名運動300万人目標達成をはかるための県連代表者会議の報告 「月刊民医連資料」(157) 3・
- 7) 非核自治体づくり運動全国活動者会議への問題提起 『学習資料・非核自治体づくり運動』 原水爆禁止日本協議会 3・21

- 8) 〈書評〉『私の被爆者運動』 齊藤義雄著 「赤旗」 3・31
- 9) 〈座談会〉革新統一の世論喚起, 探求, 共同の新たな前進に向けて 「東京懇話会ニュース」 4・5
- 10) 核戦争阻止, 核兵器廃絶, 非核日本の実現をめざして 「非核の政府への道」 畑田重夫と共同監修 学習の友社 5・
- 11) 六年目の東京革新懇 「東京民報」 5・18
- 12) 参院選の争点 平和・民主主義 「日高教情報」 5・21
- 13) 人間らしくということ 「わたしの選択, あなたの未来-プロレタリアートへのメッセージ-184」 わたしの選択, あなたの未来編集委員会 労働旬報社 6・
- 14) 「非核の政府」と革新懇運動 「東京懇話会ニュース」 6・5
- 15) いま原水禁運動は 「日中友好新聞」 7・15
- 16) 1986年原水禁世界大会成功のために 「新医協」 8・1
- 17) 反核国際統一戦線の胎動 「世界労働情報」(7)夏季号 8・23
- 18) 報告「原水爆禁止1986年世界大会の記録」 同上大会実行委員会 8・28
- 19) 核兵器廃絶の先頭に立って 「高教組時報」(65) 9・
- 20) 教科書の記述を批判する 「われら高校生」民主青年同盟 10・29
- 21) 〈書評〉『戦後日本の社会運動』 塩田庄兵衛著 「赤旗」 12・15

1987(昭和62)年

1・1 北京市天安門広場で学生数百人デモ, 「人民日報」社説, ブルジョア自由化に反対し広がる民主化運動に警告, (1・16)党総書記胡耀邦混乱の責任をとり辞任, 6・10 韓国の民正党盧泰愚代表を大統領候補に, 同日, ソウル大生拷問死について学生デモ警官隊と衝突, 翌日から市民も参加, 全国に拡大, 盧泰愚代表, 大統領直接選挙制への合意改憲を認める民主化宣言, 金大中赦免・復権, 7・14 台湾政府, 38年にわたる戒厳令を解除, 10・19 ニューヨーク株式市場大暴落(ブラック・マンデー), 11・6 竹下内閣成立, 11・23 大韓航空機ビルマ上空で行方不明(搭乗115人), 11・25 共産党大会, 社会・公明両党を「日米軍事同盟是認の道に転落」したとして批判, 11・28 南アフリカ航空機, モーリシャス付近で火災墜落, 日本水産遠洋漁業の交替船員ら日本人47人死亡,

- 1) 中林賢二郎教授を偲ぶ「社会労働研究」33(1) 中林賢二郎教授追悼号 1・
- 2) 平和と文化—核兵器と人類の未来「全会員に依拠して民商運動の新たな前進を(全商連第3回事務局長学校講義録)」全国商工団体連合会 2・
- 3) 『追憶 中林賢二郎』追悼文集刊行委員会 *「あとがき」執筆、編集代表として参加 2・
- 4) 『「ヒロシマ・ナガサキからのアピール」支持署名 国民過半数達成をめざして』第2集 原水爆禁止日本協議会 *「はじめに」を執筆 3・
- 5) 核兵器廃絶をめざして—最近の情勢と運動の展望「国公労調査時報」(290) 3・
- 6) 〈書評〉『軍縮交渉史』井出洋著 「前衛」(547) 4・
- 7) 第3分科会の報告および被爆者問題特別セッションでの「あいさつ」『原水爆禁止1987年世界大会の記録』原水爆禁止世界大会実行委員会 *ローウェル・ランディンギンとともに 8・6
- 8) 〈書評〉『米極秘訓令電—日米核密約はあった!』日本共産党編 「赤旗」8・10
- 9) 拡がる「非核都市宣言」「署名活動」即時“核兵器廃絶”をめざして「夕餉のあとで」(328) 8・20
- 10) 卒業のころ『つくし』還暦記念号 つくし会 9・
- 11) いっそうの発展を心から期待「国公労調査時報」(300) 12・

1988(昭和63)年 1・15韓国、大韓航空機事件('87年)は、北朝鮮の爆弾テロと断定。1・24宮本共産党議長、大韓航空機事件は北朝鮮の犯行と表明。4・1韓国政府、光州事件('80年)につき謝罪、遺族・負傷者に支援決定。6・21ビルマのランゲーンで民主化を要求し大規模な反政府デモ。ネ・ウイン議長辞任(26年間独裁政権)。7・5リクルートコスモスの未公開株式譲渡問題で中曽根首相、安倍幹事長らの秘書の関与判明。次々と大物政治家の名前が明らかに(リクルート事件)。9・29都議会、天皇の戦争責任にふれた共産党栗原都議を自民・公明両党で問責決議案を可決。11・8米大統領に共和党ブッシュ当選。12・7長崎市長本島等、

市議会で天皇に戦争責任あると発言(右翼激しく攻撃). 12・24参議院本会議, 消費税導入を柱とする税制改革6法案可決.

- 1) SSDⅢと核兵器廃絶の課題 「国公労調査時報」(304) 4・
- 2) 私の名前は教育勅語 「天皇をどうみる111人の直言」 全国革新懇編 4・
- 3) 新入院生に期待する 「全院協ニュース」(136) 4・8
- 4) 〈対談〉核軍拡か核廃絶か 岐路に立つ自覚を一反核平和運動の前進をめざして 「民商」(321) *菱健蔵と 6・
- 5) 教授会の席順 「青木多嘉二教授退職記念—感謝と思い出をこめて」 文集とりまとめ事務局 *事務局に参加 6・6
- 6) 非核多数派の形成—時代を見る眼 「平和教育」(31) 7・
- 7) 「女工哀史」のことなど 「経済」(292) 8・
- 8) 核兵器廃絶の運動を考える 「ゆたかなくらし」(78) 8・
- 9) SSDⅢと核抑止論—時代を見る眼 「平和教育」(32) 10・
- 10) 〈寄稿〉天皇報道に思うこと 「原水協通信」(536) 10・
- 11) 「学徒出陣」に想う 「民主文学」(277) 12・
- 12) 「1989年国民春闘白書—階級的ナショナルセンターの確立をめざして」 統一戦線促進労働組合懇談会(統一労組懇)編 学習の友社 *執筆・編集に参加 12・21

1989(昭和64年=平成1)年

1・7天皇没, 皇太子明仁親王即位(年号・平成). 4・1消費税実施. 4・15中国共産党前書記胡耀邦死去, 各地で追悼集会が民主化要求運動に発展, 中国当局「反革命動乱」と断定. 6・4未明戒厳部隊は天安門に集まる学生を襲う. 死者数百人(第2天安門事件). 6・24中国共産党趙紫陽総書記の「暴乱」責任を糾弾, 江沢民総書記に. 9・6日教組大会, 主流派「連合」に参加決定. 反主流派全日本教職員組合協議会(全協)結成(11・7). 9・19東独, 初の体制批判組織「新フォーラム」発足. (11・10)東ベルリン100万人デモ. 「ベルリンの壁」の取り壊し始まる. 10・28チェコのプラハで民主化要求デモ, (11・22)全土でゼネスト(12・29)市フォーラムの指導者ハベル大統領

に、11・21 総評組織解散、「連合」「全労連」「全労協」にわかれる。12・2米ソ首脳会談(マルタ島)、「東西冷戦の終結と新時代の到来」を確認。12・21 ルーマニア、ブカレストの政府支持官製集会、一転してチャウシェスク大統領糾弾(12・25)非公開で大統領夫妻を処刑。

- 1) ビキニ被災35年のことし—原水爆の被害者は繰り返してはならない 「月刊教宣調査資料集」(191) 1・
- 2) 「事実」の使い分け—時代を見る眼 「平和教育」(33) 1・
- 3) 〈座談会〉〈政経ビル時代の思い出〉 「大原社会問題研究所雑誌」(363～364) 2, 3・
- 4) 人間尊重のための労働組合運動を 「いま新しいうねりを—政治革新と労働組合運動」 東京革新懇編 5・
- 5) 〈書評〉「未来を見つめて」 ジョージ・ブッシュ著 「原水協通信」(543) 5・6

1990(平成2)年 1・18長崎市長本島等、右翼団体正気塾幹部田尻和美に市庁舎前で短銃で打たれ胸部貫通の重傷。2・2南アフリカ大統領デクラーク、黒人解放運動など非合法政治組織の合法化、終身刑活動家マンデラを無条件釈放、他、政治治犯48人釈放。3・9国鉄清算事業団、国労など5組合と団交、辞職しなければ解雇すると通告。(3・19)国労・全動労スト実施(4・1)1057人に解雇通知。5・27ミャンマー(ビルマ)総選挙(30年ぶりに複数政党制)、反政府派の全国民主連盟圧勝(指導者スー・チー女史は軟禁中)。10・3ドイツ、国家統一記念式典で、ワイツゼッカー大統領、「東西欧州の架け橋になる」と演説。

1991(平成3)年 1・17米軍主体の多国籍軍、イラクに「砂漠の嵐作戦」(湾岸戦争開始)。4・24政府自衛隊ペルシャ湾へ掃海艇派遣決定(初の海外派遣)。5・14江青(毛沢東夫人、無期懲役)北京で自殺。5・19雲仙普賢岳で大火砕流発生(死者行方不明43人)。8・25ソ連共産党解散。12・11欧州連合(EU)創設。12・26ソ連邦消滅を

宣言.

- 1) 弔辞及び追想「河田町から世界を見る」『追想 上杉正一郎』 追悼文集
刊行会編 *インタビューにも加わる 11・

1992(平成4)年 3・3日教組大会, 実質的にスト権放棄. 6・15
PKO協力法衆議院本会議で可決. 7・6政府「従
軍慰安婦」問題を公表. 旧日本軍の関与を認め, 韓国, 中国, インドネシア
等の元慰安婦に謝罪. 8・24中国, 韓国と国交樹立. 9・12米スペースシャ
トルに日本人初の飛行士毛利衛さん搭乗. 12・13金泳三, 韓国初の文民大
統領に.

- 1) 原爆被爆者と一般戦災者 「原水協通信」(579) 5・6
2) ワープロをかじって 「原水協通信」(580) 6・6
3) 原爆被爆者と障害者 「原水協通信」(583) 9・6
4) ピース・メッセージ―企業社会と平和運動 「平和運動」(280) 11・
5) 新しい年へのねがい 「原水協通信」(586) 12・6

1993(平成5)年 3・27江沢民, 中国国家主席に就任. 7・18第
40回総選挙で自民過半数割れ, 社会減少(55年体
制崩壊). 8・9細川護熙を首班として非自民8党派連立内閣成立. 8・10
細川首相, 先の戦争は「侵略戦争」と明言(8・23所信表明演説で侵略や植民
地支配への反省とお詫びをする). 12・16田中角栄元首相没(75歳).

- 1) 歴史と伝統―資料室だより① 「原水協通信」(588) 2・6
2) 国際化時代と平和教育 「原水協通信」(589) 3・6
3) お別れのことば 「原水協通信」(590) 4・6
4) 被爆者援護・連帯と社会保障 「原水協通信」(592) 6・6
5) 「社会政策論」最終授業 「社会労働研究」40(1・2) 秋田成就教授・田沼啓
教授退職記念号 7・

- 6) 戦争と少年の心 「原水協通信」(593) 7・6
 - 7) 久保山すずさんを偲んで 「原水協通信」(596) 10・6
 - 8) 久保山さんと福竜丸 「福竜丸だより」(186) 10・15
 - 9) 企業社会と社会的規制—今後の研究方向について 「労働運動と企業社会」 田沼肇編 大月書店 11・
-

1994(平成6)年 4・8細川首相、佐川急便からの1億円借金問題で責任をとり辞意表明。4・28羽田孜内閣成立。(6・30)社会党連立を離脱して党首村山富市を首班とする自・社・さ3党連立内閣成立。6・13北朝鮮、国際原子力機関(IAEA)から脱退表明。6・27オウム真理教による松本サリン事件起こる(死者7人、被害者213人)。10・13大江健三郎、ノーベル文学賞受賞決定。

- 1) 平和は輝いているか 「原水協通信」(599) 1・6
 - 2) 小佐々さんを偲ぶ 「原水協通信」(602) 4・6
 - 3) 現実の正しい認識から行動へ 「原水協通信」(605) 7・6
 - 4) 「被爆者とともに」あるとは… 「原水協通信」(608) 10・6
 - 5) 「労働運動に未来はある」(「労働運動と企業社会」出版記念シンポジウムの記録) 井出洋、木下武男、高橋祐吉編 大月書店 *企画に携わる 11・
-

1995(平成7)年 1・17阪神淡路大震災、M7.2の直下型地震で戦後最大の惨事。3・20オウム真理教による地下鉄サリン事件(死者11人、重軽傷者5,500人)。9・3日教組、「日の丸」「君が代」の棚上げ等路線転換。9・4沖縄で米兵による女子小学生拉致暴行事件発生。(10・21)事件に抗議する県民総決起大会、復帰以来最大規模の8万5000人結集。

- 1) 被爆者と同じ時代を生きる 「原水協通信」(611) 1・6
- 2) 熊倉啓安さんと原水爆禁止運動 「原水協通信」 4・6
- 3) 田沼肇「私のなかの平和と人権」 草の根出版会 5・

4) シンポジウムに期待する 「原水協通信」(617) 7・6

1996(平成8)年

1・5 村山首相辞意表明, 1・11 橋本龍太郎内閣成立, 2・16 薬害エイズ問題で訴訟原告ら200人に厚相謝罪, 8・4 新潟県巻町で原発建設計画の是非を問う住民投票(全国初)反対多数で町有地売却拒否を表明, 9・8 沖縄県民投票(投票率59.53%)米軍基地の整理縮小と日米地位協定見直しに賛成89.09%.

- 1) 小佐々さんを偲ぶ 「故 小佐々八郎追悼」 1・
- 2) 民主主義の足音がきこえる 「原水協通信」(624) 2・6
- 3) 被爆者と一体になって 「原水協通信」(625) 3・6
- 4) 第五福竜丸展示館二〇周年をむかえる 「原水協通信」(627) 5・6
- 5) 被爆者を誘って8月の行事に参加しよう 「原水協通信」(630) 8・6
- 6) 被爆者に励まされて 「原水協通信」(633) 11・6

1997(平成9)年

2・19 中国最高実力者鄧小平没(92歳), 4・1 消費税3%から5%に値上げ, 5・8 アイヌ新法成立, 北海道旧土人保護法廃止, 7・1 香港, 英国から中国に返還, 9・23 日米政府, 有事を想定した新ガイドラインを決定, 12・11 地球温暖化防止京都会議, 温室効果ガス削減を盛り込んだ「京都議定書」採択, 12・18 金大中, 韓国大統領に当選.

- 1) 久保山愛吉さんのバラ 「原水協通信」(636) 2・6
- 2) 一九九七年五月・夢の島 「福竜丸だより」(229) 5・15

1998(平成10)年

1・27 大蔵省, 銀行146行の自己査定不良債権総額76兆円と発表, 2・7 長野冬季オリンピック開幕, 3・17 中国首相に朱鎔基, 5・2 欧州連合(EU), 単一通貨「ユーロ」への統合を決定(11カ国, 2億9000万人参加), 6・11 日中両共産党関係修復, 8・31 北朝鮮, 弾道ミサイル発射, 三陸沖に着弾, 10・7 金大中韓国大統領

領来日。11・25 江沢民中国主席来日(主席として初)。

1999(平成11)年 3・24ユーゴスラビア・コソボ自治州アルバニア系住民の独立紛争にNATO軍空爆(コソボ紛争)。5・24周辺事態法等の「新ガイドライン3法」成立。7・29衆参両院に憲法調査会を置く改正国会法成立。8・9国旗・国歌法成立。9・3茨城県東海村核燃料施設で「臨界事故」,作業員100人被曝,住民31万人避難。12・20中国,ポルトガル領マカオを回収。

2000(平成12)年 4・1介護保険制度スタート。4・2小渕首相脳梗塞で緊急入院。4・5自民党森喜朗内閣成立。5・14森首相,「日本は天皇を中心とする神の国」と時代錯誤の発言。6・13金大中韓国大統領,北朝鮮を訪問「南北共同宣言」,金大統領にノーベル平和賞贈られる(10・13)。7・8三宅島の雄山噴火,全島避難。

1) 熊倉啓安さんと原水爆禁止運動(95年執筆の転載) 【追悼平和委員・熊倉啓安一戦後平和運動50周年を記念して】 追悼文集 3・

*田沼肇, 2000年8月9日, 55回の長崎原爆記念日に永眠。

田沼肇の執筆活動について

藤 新太郎

田沼肇の研究・執筆活動の分野は、労働問題を中心にしながらも、統計から政治、経済、教育、原水爆禁止・被爆者問題など、戦後、日本の労働運動・民主運動が直面してきた多様な問題と分野にわたっている。そこでは、多くの研究者や労働者、仲間と議論して、たくさんのことを学び研究し、それを土台にして膨大な量の文章を執筆している。しかし、ここでは、田沼の研究活動にとって、大きな影響を与えたと思われる人たちを中心にして、田沼の執筆活動を概観する。(なお、本項の執筆にあたっては、記述上、恩師である田沼先生の敬称を略して記したことをお断りしておく。)

1. 出生から敗戦までの経歴

田沼肇は、1926年4月19日、群馬県桐生市に父・雅夫、母・静子の4人兄弟姉妹の長男として生まれ、1927年東京市青山に移住。1933年4月、青山師範付属小学校に入学。1939年4月、武蔵高等学校尋常科に入学し、慎独寮に入寮する。以後、卒業するまで7年間を30人ほどの仲間とともに寮生活を送る。1943年4月、武蔵高等学校文科に入学し、双桂寮に入寮。1944年9月、高校の授業が停止され、翌年3月まで板橋の金属工場で軍事徴用される。1945年4月、東京帝国大学経済学部商業学科に入学、山田盛太郎教授のゼミに入る。1945年5月25日、東京大空襲に遭遇し、自宅を喪失。田沼が率先して家族を青山墓地に避難させ家族から感謝される。1945年7月1日、徴兵年齢の引き下げにより、19歳で徴兵検査を受けるが、徴兵予定日は8月20日のため徴兵を免れる。

2. 東大社研・学生書房時代

田沼は太平洋戦争が8月15日に終わったとき、大学1年生であったが、敗戦直後に起こった民主主義的改革を求める学生運動に、ただちに合流していった。1945年10月27日には、全国に先がけて田沼らは社会科学研究会

を再建し、その年の暮れから翌年の春へかけて戦争の被災者である壕舎生活者および浮浪者の実態調査を行った。社研再建の推進メンバーには、大学新聞(旧帝大新聞)の編集部員たちが多かったが、その学生たちを指導していたのが大学新聞社の常務理事桜井恒次であった。当時、都内の各大学でも社研が、次々と結成されていったが、東大社研は、羽仁五郎、信夫清三郎、風早八十二、武谷三男、守屋典郎、井上晴丸、宮川実、荒正人、古在由重、松村一人など、著名な教授や文化人を各大学社研へつなげる世話役的な活動を担っていた。それが、関東学生社会科学研究会連合会の結成(1946年5月26日)へと結びついていき、田沼はその委員長として活躍した。

田沼が大学新聞の編集部に席を置いていたのは、社研が結成されてから翌年4月までのわずか7カ月間であり、やがて、その中心的な活動は、3月に桜井恒次が理事長となって結成された「学生書房」に移っていった。「学生書房」は、学生自身が管理委員会をつくって運営し、戦前・戦中に禁書扱いされていた社会科学関係の本を入手しやすくしたり、学生のために図書の間滑な配布と良書の普及をめざした。田沼は、「学生書房」の出版活動にはほとんどかかわらず、もう一つの事業である「学生評論」の再刊、編集に、桜井の指導を受けながら主として従事した。「学生評論」は、戦前、京大滝川事件関係の学生によって創刊されたが弾圧のため廃刊になっていたもので、それが関東社研連の結成を契機に1946年10月に、「学生書房」から再刊された。田沼は、その常任編集委員として活動し、再刊1号には、「如何に社会科学を学ぶべきか」大河内一男、「自由のための戦い」羽仁五郎などを掲載し、47年12月には、田沼自ら執筆し「野底山の碑—夏の農村調査から」を発表した。

のちに、田沼は、この青春時代をふり返って「学生の実態調査活動に、理解と好意を寄せた桜井さんの励ましは、大河内先生の指導とも相まって、私たちが工場調査、農村調査に関心を持つようになっていく扉を開いた。私個人にとってもこうした貴重な経験は、その後の勉学、研究のあり方に重要な示唆を与えられたと思う。」(『桜井恒次さん追悼文集』1981年)と、述べている。また、「自分の青春時代を、『学連』の伝統に学び、社会科学研究会の活動を軸にして、せいっぱい生きたことを、いまでもしあわせに思ってい

る。それは、失敗をくりかえしながらも、時代を変えていくための事業への参加の道であった。」（「学生新聞」1979. 9.19）と、のちに述懐している。

3. 商工省調査統計局時代

大学を卒業して田沼は、1948年4月商工省調査統計局調査課に勤務すると、組合活動にも積極的に参加。しかし、翌年8月15日にドッジプランによる人員整理によって10名の指名解雇を受ける。これは戦後のレッドパージの先駆けとなったが、田沼や上司の上杉正一郎はじめ4名が3日間、ハンストで抗議行動に立ち上がるも、復職はできなかった。（マルクス主義統計学を研究していた上杉は、のちに大阪市大、東京経済大教授に就任）

田沼の商工省勤務時代は短かったが、組合で指導的役割を果たしていた上杉から、田沼は多くのことを学んでいる。組合活動では、学習会のやり方や組合講座など、のちに大原社会問題研究所に入って法政の組合活動に、その経験を生かしている。

田沼は、「上杉さんの真価は、理論家であるとともに常に大衆的な運動のなかに身をおき、実践されたところにあります。職場の仲間たちの意見をよく聞き、適切な方針を出しました。上杉さんは、ものごとを批判的にみることの大切さを、手にとるようにして私たちに教えました。また、自分自身はいつも質素な生活をされながら、私たち一人ひとりをこまやかに気づかい、あたたかく見守って下さいました。このような上杉さんの生き方に接して、私たちは人間の生き方の根本を学びました」（『追想 上杉正一郎』1991年）と述べ、生涯にわたり優れた先輩として敬愛してきた。

田沼は、この時代に上杉氏とかかわったことにより、その後、統計学の研究者仲間とともにマルクス主義の立場から統計学の批判的研究に入っていく。労働統計の分野で多くの業績を残した。そして生涯、日本統計学会および経済統計学会に所属して統計に深い関心を示してきた。

4. 法政大学大原社会問題研究所時代

1950年4月、大原社会問題研究所に入った田沼は、『日本労働年鑑』『労働運動史資料』『婦人運動史資料』などの執筆・編纂に従事しながら、労働

運動の昂揚、発展にあわせて、精力的に執筆活動や講師・助言者活動を展開している。

田沼は、まず労働問題研究の第一歩として、日本資本主義の発展を支えた炭鉱と製糸業に着目し、機会をとらえては、労働組合の協力を得ながら全国の炭鉱労働者の状態と抵抗の歴史、戦前の製糸女工の聞き取り調査をしている。その成果は、のちに製糸労働者や炭労の歴史の編纂事業に協力するなどして労働運動史研究として結実していった。また、学生時代から編集作業に従事してきた田沼は、『日本資本主義講座』（1952～55年、全10刊、別巻1・岩波書店）の執筆・編集にもあたっているが、その時、共同研究の組織・運営の中心的な一人である堀江正規から、多くの助言や指導を受けたと思われる。その後、生涯を通じて労働組合運動の理論的な師として仰いできた。

堀江は、1949年東京新聞を退社後、経済研究所を創設して中堅・若手の経済学者の育成につとめていたが、他方、当時総評事務局長であった高野実とも懇意にして、1952年に総評の企画会議を主宰し、多くの労働組合運動の助言にあたっている。53年には炭労の顧問となり、「合理化」反対などの助言をしているが、田沼は、堀江と共同で、戦前から昭和24年までの全国的な炭鉱労働運動の座談会記録（1～4集）を編集している。また堀江が勤評闘争に助言、協力する中で、田沼も勤評オルグ団の一員として日教組の勤評闘争に参加して、のちに日教組の10年史の編集に執筆・協力するなど、教育労働運動に言及している。

調査論には、とくに労働組合の調査活動について貴重な文章を残している。1950年代に労働組合運動が発展する上で課題となっていた賃金要求額の決定や組合員の要求のまとめ方など、組合が調査活動をどう進めるかを、組合講座や組合機関誌で詳しく解説している。それがのちに単産の「調査活動の手引き」等に結実し、今日の労働組合の調査活動にも生かされている。

ところで執筆活動の中で、「階級構成論」がひとつの分野として独立しているが、これは田沼が当時話題になっていたホワイトカラーやサラリーマン問題について、銀行労働研究会に参加し、銀行労働者の仲間とともに議論して新聞や雑誌等に発表しているからである。さらに銀行労働運動やサラリーマン労働組合運動の課題と展望を明らかにするためにも多数執筆している。

そして、そこにとどまらず、労働者階級の中で、どういう位置を占めているか、労働者階級全体の構成を常に追求してきたからである。

加えて田沼は、労働問題の中で職業訓練と職業技術教育の重要性を早くから指摘し、資本主義的合理化に反対する運動において、最低賃金制の確立、労働時間の短縮とともに、職業訓練に関する要求を、労働者の権利として正しく取り上げていくことを提起してきた。そして総評の職業技術研究会や日教組の教育研究会などで、討論に参加し指導・助言を与えている。

5. 法政大学社会学部時代

田沼は1963年助教授、64年教授になっているが、教授になっても、教職員組合の委員長、生協理事長、2度にわたる学部長と大学運営などに従事し、法政の発展のために多忙を極めている。そうした中でも、70年代以降、雇用・失業政策が大きく転換してくる時期、全労働省労働組合の労働政策研究会などに参加して政府の労働政策の展開や特徴を明らかにしてきた。これらの研究会には、若手の研究者の参加を積極的にすすめ、のちに、自宅に現代社会研究所を置いて研究会をひらき、若手研究者の育成に努力してきた。その成果はまとめられ出版されている。

田沼は、研究以外にさまざまな労働組合や団体組織に依頼されて、講演や助言者活動を旺盛に行っている。それは、労働運動や労働者階級の前進のために、啓蒙活動を特別に重視してきたからである。自宅に残された資料だけでも、1952年から88年までに377回も全国各地の講演等に出かけており、その大部分は法政時代である。特に婦人の問題では、はたらく婦人の中央集会や日本母親大会などに助言者として参加し、婦人労働の差別問題や家庭婦人の役割、婦人解放などについて語り、多くの婦人問題に関する文章を残している。1987年の秋頃から体の自由が利かなくなるが、それでも助けを借りながら限界まで執筆活動を続けてきたのは、平和で安心できる社会の実現を最後まで強く希求していたからであろう。

6. 研究活動以外の幅広い活動

田沼は、研究活動以外でも幅広い多様な運動にかかわってきたが、1962

年(36歳)の残された手帳からは、一年間のうちで休日はわずか4日と年末年始の6日間のみで、授業や校務以外は、すべて講演や活動に費やされていることがわかる。この生活スタイルは病気が発病するまでほとんど変わらなかった。

以下、残された資料から、田沼が行ってきた活動のおもなものを記す。

① 民主主義科学者協会の活動と原水爆禁止運動

民主主義科学者協会(民科)は1946年1月に結成され、田沼はそれに早くから入っていたと思われるが、入った時期も含めて民科の資料をほとんど残していない。残された資料からは、田沼が東京支部幹事長・経済部会員として、世界科学者連盟の科学者憲章を紹介し、科学者の責任と役割について追求したり、民科立て直しの組織方針などを提起している。(付記参照)また、科学者の立場から原水爆禁止に関心を寄せ、民科第9回全国大会(1954年5月)で出された原水爆禁止に関する声明とビキニ水爆実験に抗議する声明の作成にもかかわっていると思われ、以後の原水爆禁止・被爆者援護運動への積極的な参加につながっている。原水爆禁止・被爆者援護運動については、その運動にかかわる田沼の姿勢は、次の文章によく現れている。

「第9回(原水爆禁止)世界大会の渦中で、つくづく考えた。私は、結局一生かかっても大衆運動から学び、大衆運動から励まされ、たとえたまたま指導部にいても、大衆運動を絶対に軽視してはならない、ということである。」(「若き友よ」1963.9.10 民青法大学生第一総班)

② 労働者教育の活動

田沼は、労働者教育にも熱心で、中央労働学院(法政大学社会学部の前身である中央労働学園から切り離されて1951年に学歴を問わない別科として設立された)に、1960年から78年まで夜間のゼミを担当、61年には常務理事、その後も長く理事を務めるなどした。

労働運動の階級的発展をめざして、1952年10月に労働者教育協会が設立され、田沼は設立にどのようにかかわったか、詳細は不明だが、「『学習の友』創刊号に寄せて」の文を執筆、その後、講師活動や雑誌の執筆・編集活動を行っている。また役員として、1961年理事に選出(～1968年)、1968年勤労者通信大学講師、1973年再び理事に選出(～1994年)、1996年名誉会員に選

出（～2000年）、最後までかわり続けてきた。

③ 東京革新懇と日本フィル闘争

第二次世界大戦で生き残った者として、田沼は一つは平和、もう一つは政治革新をめざす統一戦線運動の前進を強く願ってきた。しかし、1979年から80年にかけて「社公合意」路線が進む中で、従来の社・共の統一による政治革新が困難な情勢が生まれてきた。そこで、政治革新と革新の統一をめざして、田沼も呼びかけ人の一人となって、1981年2月「平和と革新をめざす東京懇話会」（略称：東京懇話会、のちに東京革新懇と改称）が結成された。

田沼は、この革新懇運動を草の根運動として歴史的な意義をもつ仕事だと考え、精力的に全国各地をまわって、地域革新懇の結成・発展のために講演活動を行っている。

その際、田沼は、この運動の目的に賛同する団体、個人が自発性をもって参加すること、また、無党派層の果たす役割とイニシアティブの発揮が保障されることをしばしば強調している。

革新懇運動の10年前に、日本の三大オーケストラと称されていた日本フィルハーモニー交響楽団に徹首反対の労働争議がおこる。フジテレビ・文化放送という企業の中でも特別に偏狭な放送局を相手に闘いながら、演奏活動を続けてゆくきびしい状況だ。音楽に疎縁と思える田沼が頼まれて手助けのため運動に参加し大きな役割を果たした。田沼は常に労働者の側にいたのだ。

7. おわりに

田沼は、時代的な制約やマルクス主義理論の不十分さの中でも、執筆活動で労働者・国民の実態を明らかにして、その中で、何が問題かを指摘し、それを整理して運動や理論の方向性を指し示すという役割を常に果たしてきた。また、青年時代から生涯を閉じるまで多くの運動に自ら飛び込み、かわり、そしてその前進のために献身的な努力をしてきた。それは、戦争に生き残った者として平和を守らなくてはという強い責任感と、科学的社会主義の社会変革をめざす使命感に衝き動かされたともいえる。

それにしても、このつたない文章の非を詫びつつ、恩師である田沼肇の全活動に対しては、畏敬の念と同時に心から尊敬の念を抱かざるをえない。

最後に、田沼肇がいかなる人生を望んでいたのか、病気になる直前に手帳に書き残されたメモを紹介する。

酒を愛し、平和を愛し……生きた、愛した、闘ったという人生を送りたい。

(ふじ・しんたろう／田沼ゼミ卒業生)

〔付記〕 民主主義科学者協会(民科)の活動

1946・1・12 民科設立大会。創立発起人は各分野から104人。創立大会で57人の幹事、内22人は常任幹事。(＊民科設立の準備は前年の10月半から始まっている。渡部義通、堀真琴、柘植秀臣、風早八十二などで相談会をもつ。その他のグループが連携する)会員180人。会長＝小倉金之助、副会長＝細川嘉六、大内兵衛。

会の目的は、A科学の水準を高め、科学を普及して、科学的精神を確立する。B科学を通じて日本を民主主義的に再建する。C科学活動の完全な自由のためにつとめる。D科学者と技術者の地位をたかめる。E教育制度、学界および研究施設を民主化する。F進歩的な新しい科学者を養成する。G自然科学、社会科学、技術の交流をはかる。H信仰や政治上の意見に関係なくあらゆる民主主義的な科学者の広い協力を実現する。I世界の民主主義的な科学者の団体と手を結ぶ。と宣言する。

＊田沼肇は大学時代から何らかのかたちで民科の運動にかかわっている。所属する東大社研の顧問教授大河内一男が設立大会で「世界の民主主義諸国科学者団体へのメッセージ」の提案説明者として壇上に立ち主催者側で活躍しているから。

1946・2・19 民科の主催で「野呂栄太郎追悼記念演説会」が初の行事。

＊この年は機関誌「民主科学」創刊(6号から「社会科学」と改題)。各地の支部準備会や結成が続く。各部会の機関誌の創刊はじまる。

1947・4・20 参院選挙民科会員5人当選。

1948・1・24, 25 第3回大会, 19支部200人参加, 会員2300人になる。渡

部義通幹事長辞任，柘植秀臣新幹事長に(11・2)，日本学術会議第一期会員に民科会員，推せん合わせて26人当選(12・22)。

1949・4・23, 24 第4回大会，73支部，会員6800人。

1950・4・22, 23 第5回大会，支部114，専門会員1772人，普通会員8243人，新会長に末川博，第2回参議院選挙，民科会員4人当選(6・4)，東京支部ストックホルムアピールの署名運動に積極的に協力(6・13)

*この年，朝鮮戦争がはじまり(6・～)，レッド・パージ(6・6)指令があり，民科もいろいろな影響を受け，会員数が減りはじめる。

田沼の民科での活動

1954・7 民科機関誌「理論」(7月号)に「日本資本主義の問題点 第1回，戦後労働運動史について」を執筆，同12月号に「ポール・M・スウィージーの「法廷侮辱」事件について」の題名で，民科東京支部幹事会声明を執筆，「～アメリカのファシズムに抵抗し，科学者としての良心を守っているスウィージーにたいし，全会員が心からの同情と激励を送るよう要請する。」と。

1955・4 民科編集「国民の科学」(4月号)に「科学運動の条件と課題」を掲載，役職は東京支部幹事長として民科建て直しの試案を「1. 民主主義的なすべての科学者の協力 2. 戦後における科学運動の客観的諸条件 3. 科学の存在そのものの危機 4. 科学者の生活と研究を守る科学運動」の項目でまとめている。12・24，民科東京支部，経済学教科書講座運営委員会で同教科書14章「国民所得の解説」原稿の検討，担当者。「理論」(12月号)に「自由」諸国とマルサス主義—日本統計学会の討論から」を大山勉のペンネームで執筆。

*国立予防衛生研究所学友会シンポジュームのレジメ「科学者憲章—科学者の権利と義務」執筆(6・17)。

1956・3 本部「速報No.9」に「再び民科の目的と組織について」を提案。6・22～24 第11回大会で組織改編，本部の事務解消，部会中心体制，事実上民主主義科学者協会は解消される。

*田沼は当時の副会長(幹事長)柘植秀臣から組織の再建策を託された(柘植秀臣「民科と私」勁草書房)という，まさに困難の時に前面に出たことになる。

(梅津勝恵記)

田沼肇について

上田 誠吉

戦争に「終わり」はあるか

戦争は1945年8月に終わった。私は9月に千葉県佐原の陸軍高射機関砲の陣地から解放されて復員し、10月に大学に戻った。11月であったが、東大法学部の緑会は25番教室で復員学生歓迎会を開いた。戦没した学生、教職員への黙祷を捧げた後で、南原繁学部長は「長かった戦争は終わりました」と語りかけた。私はこの話を聞きながら、物心がついたころには、すでにそれは始まっており、そしてその後はただ拡大するだけであった戦争の日々を思いながら、ああ、本当に戦争は終わったのだ、という新鮮な感慨にとらわれていた。

田沼は書いている。「満州事変のころに小学校に入って、太平洋戦争が終わるころに大学に入った私にとっては、空襲の悲惨さなどを通じて、戦争とはいったい何なのだということをようやく考えるようになった19歳になるまで、戦争が終わるものだとことを知りませんでした」。そう、私たちは戦争には終わりがあるものだ、という自明のことを知らない世代であった。

田沼と私はともに1926年の生まれである。それは大正の最後、昭和の最初の年で、徴兵年齢の繰り下げで1945年に日本帝国陸軍最後の徴兵検査を受けた世代である。

戦時下の学校で

当時の東京市板橋区豊玉上町に武蔵高校のキャンパスがあり、この学校は私立の7年制高校で、尋常科(中学)と高等科(高校)に分かれ、それぞれ学寮が用意されていたが、田沼と私は1939年に尋常科に入学し、慎独寮に入った。そこで友人となった。それから高校、大学をともにし、社会に出てからも公私を通じて深い交友を続けてきた。

太平洋戦争の開戦と東京初空襲などは、私たちが慎独寮にいた時分のこと

である。1942年4月18日は学校の開校記念日にあたり、文化祭がおこなわれて、教室には各種の展示物が並べられていた。昼すぎに寮に帰る途中で、校舎の東側に翼をかすめて、見えない大きな爆撃機が低空で飛び去るのを目撃した。あれは何だ、敵機じゃないか、などと語りあっているうちに空襲警報のサイレンが鳴り響いた。1943年10月2日、学生の徴兵猶予が取り消されて「学徒出陣」が発表された時は、私たちは高等科の双桂寮で寝食をともにしていた。そのことを知らせるラジオ放送をきいたあと、静まりかえった寮の談話室の電蓄はひとしきりベーターベンの「運命」を鳴らしていた。



大島・三原山上で上田(前)と('42・3・9)

軍事教練は厳しくなった。私たちは富士山麓の演習場の兵舎で泊り込みの教練を受けたことがあるが、田沼はこの時は中隊長であった。不心得者が水筒に酒をつめてもちこみ、深夜に腰に指揮刀をさげた田沼中隊長も加わって、ささやかな宴をはったりした。

寮では熱心に哲学、歴史、小説、語学などの本を読んでいた。みんなやがて兵隊になる日を数えながら、静かに勉強していた。それは、短かったけれども、充実した日々であった。1944年9月、高校の授業は停止になって、私たちは翌年3月まで、板橋の金属工場で激しい労働に服した。私たちの米穀通帳には職業として圧延伸長工と記載され、労務加配米が配給されていた。生産現場での労働の経験は、私たちに貴重なものを残してくれた。

戦後の出発

田沼は書いている。「終戦と同時に、私は、かつて自分が働いていた工場を訪ねて労働者の動きを知った。本郷から板橋の志村まで飛ぶようにして歩

いていったのを、いまでもありありとおぼえている」。ここに田沼の戦後の出発があったと思う。

大学では、田沼は社会科学研究会、ゼミ、大学新聞社などで活動していた。とくに戦後早い時期に壕舎生活者の実態調査に参加して、その成果を「起ちあがる人々——壕舎生活者・浮浪者の実態」にまとめた。その刊行は1946年11月であった。「事実を明らかにして、議論を組み立てていく学問の方法を学んだ」。ここにもう一つの出発がある。

田沼と私とは、学生運動の面でも行動をともした。そのなかで、私は田沼の判断の正しさとその強靱な意思に触れる機会が多かった。私は田沼は「強い男」だと思った。この印象はいまも変わらない。

発 言

田沼は還暦の機会に、五十嵐明子(当時・大原社研)との共同作業で、「田沼肇 執筆目録 1986年4月18日現在」を刊行した。これによると田沼はこの時までに全部で754篇の文章を発表している。これらは次の10の主題別に分けられている。Ⅰ調査統計論 Ⅱ階級構成論 Ⅲ社会政策 Ⅳ労働運動 Ⅴ労働運動史 Ⅵ原爆被爆者問題 Ⅶ平和・原水爆禁止運動 Ⅷ大学・研究者・学生論 Ⅷ時評など X身辺断章。五十嵐明子によれば、「現物確認ができないために今回落としてしまった文献も多々あります。1986年4月19日以降の執筆文献もかなりの数になっている」ということなので、その全体はとらえきれないほどの執筆量である。それに研究、発言の分野の多様さと広さは驚異的である。本書『私のなかの平和と人権』はこれらの膨大な文献のなかから、そのほんの一部を選んで編集したものだから、「田沼肇研究」のためには少しく不足の感をいなめない。それでも本書に収められたかぎりの発言の跡をたどってみても、その間に、いささか僭越な言い方だが、田沼についての「発見」と、そのものの見方の深まりと広がりを感じることができるといえるような気がする。

やさしい感性

私は田沼は「強い男」と書いたが、同時にこの「強い男」の内面に潜むや

さしい感性をみてとらなくてはなるまい。「青山暮色」は、小学校の同窓会誌に寄せた一文だが、青山の街への思いが空襲体験などの激動の昭和史と重なって淡く描かれており、とくに母への思慕にみるやさしい感性は、読む者の心を震わせる。このことは被爆者への思いのなかにも十分に感得される。田沼は大江健三郎の「われわれには“被爆者の同志”であるよりほかに、正気の間人としての生き様がない」という言葉への共感を表明しているが、「同志」であろうとする努力に先んじて、彼の心性が被爆者の苦しみに届いており、そのやさしい感性がそのことを可能にしている。このやさしさが時として田沼をひどく苦しめたことがあったにちがいないような気がする。映画「手をつないで」について、「この映画が、主題の背景にすえている松川事件は、私個人の生活にとって、重大な転機になった」といい、「あれから10年、弱い私をとにもかくにも支えてきた精神的な心棒が、あの画面に描きだされているような、厳しい現実であった」ともいう。このことを書いたのは1960年のこと、10年前といえれば1950年、田沼が商工省調査統計局を追われ、これに抗議のハンストをおこない、やがて大原社会問題研究所に入所する時期であった。この時期に彼は「転機」を見ており、そして「弱い私」を自覚している。

深まりと広がり

たとえば1960年に「三井三池争議の教訓」を書き、1968年に「労働者と学問」を論じている。これらのどちらかといえれば硬質な文章での分析や説明はそれとして正しいだろう。彼が勤労学生にマルクス主義の古典を読むことを薦める口調は厳しい。彼はその調子を訂正しないだろう。しかし、彼が同じ主題を語るとすれば、だいぶ変わった口調になるのではないだろうか。1986年には「前向きの能動性と、内省的な精神のはたらきとは、人間だけがもっている能力だ」として、この人間の特性と職場での企業支配との矛盾を指摘し、「労働運動の原点」に「人間らしくあつかえという要求」をすえて、「人間らしく働く」ことを提唱している。1992年の大学での終講の言葉では、「人権を擁護する運動は、すべての運動の基礎になる」としている。そして1994年に刊行した『労働運動と企業社会』の「まえがき」では、ひろく「労

働者の全生涯にわたる生産労働，消費生活，文化を豊かにするための理論」の研究が呼びかけられている。労働者・生産者・生活者として全体的にとらえる観点を提唱している。そこに深まりと広がりがあるのではないか。「私のなかの平和と人権」はひとつのものである。田沼は原水爆禁止，被爆者援護の運動の渦中であって，基本的人権としての平和的生存権の要求の緊切さを学び、「平和そのものを人権としてとらえる」思想を自分のものとし，そのことを労働運動の分野にもおしひろげて，その知見を磨きあげていった。この本はその軌跡の記録にもなりえている。

新しい窓

田沼が被爆者・渡辺千恵子との交友を語る部分は感動を誘う。かねがね彼は被爆者との交友を通じて、「自分が励まされた」という実感をもってきたが，パーキンソン病の発病直後に渡辺に会った時，渡辺は「自分をあまやかさずに，病気でたたかうこと，がんばってください」と述べたという。このことから，田沼は渡辺の生前の言動を回顧して，「渡辺千恵子が見ていたものはなにであったか」に思いをめぐらす。そのことが「車椅子から見た自然から，いままでとちがうものを感じるように，障害者としての位置から，社会のありようを見ることによって，私は新しく発見できたものがあるようにおもう」という，田沼自身の新しい境涯での体験と重なりあう。そして1992年，長崎の被爆者・松谷英子が原爆症認定申請却下処分を争って，行政不服，行政訴訟を提起し，渡辺がその証人として「最後の証言」をおこなって，やがて亡くなり，そして松谷は1審勝訴の判決を手にした。そのみちゆきにこめられた被爆者たちの願いを継いで，田沼もまた重度心身障害者非該当の処分の取り消しを求めて行政不服を申し立てた。その詳細は，【賃金と社会保障】1994年8月上旬号，拙稿「東京都重度心身障害者非該当に異議申立」および「関連資料」に既述されている。

「私のなかの平和と人権」は確実に新しい「窓」を開きつつあるように思われる。

*田沼肇著【私のなかの平和と人権】(草の根出版会，1995)から再録

(うえだ・せいきち／弁護士)

慎獨寮時代

高野 源明

慎獨寮の概要

- 慎獨寮は武蔵高校尋常科（中学）の寄宿舎である。同校創立（大正 10 年「1921」）とほぼ同時に建物が完成した（大正 11 年 9 月 16 日）。その一部は当初、高校の仮校舎として使用された。当時、中学校の寄宿舎は珍しかったが、高校創立時の方針として「なるべく生徒は獨り東京のみから募集せず、地方の殊に素朴な子弟を取る」事としていたことにある。
- 寮名「慎獨」の由来。「大学」（儒教の経書）の「君子ハ必ズ其ノ獨リヲ慎シム也」から引用して山本良吉校長が命名した。寮の玄関に、顔真卿の字から選んだ「慎獨」の額が掲げられていた。
- 寮は校庭内（練馬区）にあり、主な 2 棟（旧寮、新寮）は木造 2 階建てで、ほかに南寮、食堂、自彊場（体操場）などの付属棟があった。主要棟は、1 階が板の間の学習室、2 階が和室の寝室となっていた。
寮生は大体 50～60 名、1 学年 10～15 名、1 室に大体 4～5 名（定員は 8 名）入っていた。新寮と旧寮では設備に多少の差があったこともあり、学期ごとに部屋替えと同室者の組合せ替えがあった。また、各室の最上級生（4 年生ないし 3 年生）が室長となった。
- 寮は昭和 20 年 4 月 13～14 日の空襲による焼夷弾攻撃で全焼した。その後臨時の建物（荒牧家、豊玉荘、集会場など）を使って存続していたが、昭和 24 年 3 月に閉鎖され 44 年におよぶ歴史の幕を閉じた。
- 私の在寮期間は、尋常科 4 年のうち、父の東京勤務期間を除く 3 年 3 カ月であった。

昭和 14 年 4 月～昭和 15 年 3 月（1 年）在寮
（その後 9 カ月間 自宅通学）

昭和 16 年 1 月～昭和 18 年 3 月（2 年 3 カ月）在寮

日常生活

- 寮には4人の教師が舎監として交替で宿直していたが、寮の日常の運営は、かなり寮生に任されていた。
- 図書、運動、衛生、農園、食堂などの委員を2名ずつ寮生が互選し、それぞれが所管事項の運営にあたった。私は樋田らと共に食堂委員をつとめた。
- 日課の時間も起床から消灯まで細かく定められていた。

起床を始めとする日課の時報は、2年生以上の当番が小使い室脇の鐘を打ち鳴らして行った。起床直後の洗面時には冷水摩擦が義務づけされていた。朝食までに、「自強場」での神前礼拝、体操、部屋の掃除、庭の草むしりなどをおこなう。体操は、両手で首を曲げたりする小野寺教師が考案した独特のものであった。

庭はかなり広く、昭和7年の寮開設10周年を記念して舎監、寮生の手で築山と池が作られた。その際、一本喜徳郎初代校長(枢密顧問官)から頂いた揮毫「積翠成淵」の句からとって庭の名称を積翠園と称することとなった由。

- 朝食は一汁一菜に漬物程度であったが、起きてから約1時間体を動かしたあとなので実に旨かった。食事は賄の増田為三郎夫妻が一手に引受けていたが、1週間分の献立表には寮生の希望も盛り込まれてあった。その仲介には食堂委員が当たった。昼食、夕食とも質、量に問題はなかったが、戦時色が濃くなるにつれて、うどん、そば、パンなどの代用食が増えていった。地方出身の寮生の親からは、ときどきお菓子や果物などが送られてきて、同室の者と一緒に食べるのが楽しかった。ただし自習室や寝室での飲食は禁じられており、南寮の2階の大きな畳敷きの部屋で駄弁りながら食べた。

あとで知ったところでは、増田氏の子息慎一郎氏は、武蔵の高中事務員として勤務、平成7年3月に定年退職された由。

- 食堂の入口に、「一日不作一日不食」(一日作サザレバ一日食ラハズ)と山本校長の書の衝立てが置いてあったが、これは白隠禅師の言葉である。
- 朝7時10分から8時までは学習時間で、夜の学習時間と異なり英語など

の音読が許された。登校は8時10分となっていたが、校舎まで歩いて1分もかからず、この点は恵まれていた。

- 昼食は寮の食堂でとった。楽しみだったのは、放課後、寮に帰ると、食堂にせんべいや餅菓子などのオヤツが並べられていたことである。ただ、寮生のなかに2人分を食う者がいて、ときどき食べ損なうこともあった。
 - 夕食時までは自由時間で、校庭で鉄棒などの運動をする者、読書する者、ハーモニカを吹く者などさまざまで、買物や入浴もこの時間にすませた。笹間弘という上級生は2つのハーモニカを吹きこなし実にうまかったが、早世された。
 - 6時30分から9時までは学習時間。この時間は、途中、10分間の休憩時間を除き雑談は許されず、舎監の見回りもあるのでシーンとしていた。支那そば屋のチャルメラの音も聞こえ、1年生がホームシックになる時間でもあった。
 - 就寝は9時。消灯は9時半。学期末試験の際などには、舎監に申請して、希望者に学習時間の延長（延灯と称した）が許された。日曜などの休日は、起床が6時20分（平日は、5時半、冬は6時）になり、学習時間も短縮された。
 - なお、洗濯は下着類の大半は、毎日やって来るクリーニング屋に出し、あとは学期末の休暇時にまとめて鞆に入れて家に持ち帰り洗濯して貰った。部屋の掃除は毎日おこない、週に1度各室交替で各棟の便所掃除もした。窓の棧を手でこすり、汚れていると注意する舎監もいた。
 - 冬の暖房は石炭ストーブで、週に1度煙突を掃除したので、冬の寮生の顔はうす汚れていることが多く、常に身綺麗な通学生とは対照的であった。ストーブは朝と夕方に炊いたが、たきつけには一寸した要領が必要で、石炭運び、煙突掃除など今の石油ストーブなどと違い、なかなか手数のかかる代物であった。
- また、夏は、就寝前、起床後に蚊帳をつったり、畳む作業もあった。
- 規則的な寮生活は、家庭から小学校に通っていた者にとって、心身ともに良い影響を与えた筈である。私は入寮するまでは、ネギ、トマト、ソースなどは嫌いであったが、1学期後には好き嫌いはほとんどなくなり、体重

も増え、帰省したとき、父母が喜んでいた。

- 同年次の寮生は、4年修了時には13名おり、「至誠会」という会をつくった。4年のとき、その仲間で慎獨寮20年史を編集した。とはいっても、各自が分担して原稿用紙に書いたものを1冊にまとめただけであるが、寮が戦災で全焼した際、この1冊だけが持ち出されたため、現在では寮に関する極めて貴重な資料のひとつとして、学校の資料室に保管されている。
- 当時の同年次寮生13名のうち、小川、荒木、山本成夫、槌田、阿多の5名(平成11年8月現在)がすでに物故者となったのが惜しまれる。(生存者は、上田、星、田沼、中島、山本俊夫、長崎、金子、高野)
- 毎学期、部屋替えをおこなったので、同室となった者は多いが、若くして亡くなられた小早川氏(海兵に入り、戦死)のほか、60歳前後で亡くなられた板垣、茂在敏司、北川晴雄、石川昌家の各氏は特に懐かしい先輩である。

寮費その他

- 寮費は昭和14年当時、1カ月4円、食費は21円(うち2円はオヤツ代)、ほかに寮会費(図書、新聞、娯楽費など)が年間5円であった。また寮の概要によると、「寮生の金はすべて舎監において保管し、必要に応じて支出し自身には1円以上所持させぬようにしている」とあり、事実、親元から送られてくる小遣いもすべて舎監が管理し、必要のさいは、小遣い帳に、「本の購入」「文房具の購入」など用途を記入のうえ、舎監から金を受け取った。もっとも、用途は適当に記入しても、断られることはまずなかったが、拘束感は大きかった。
- 慎獨寮に在籍した寮生の名簿としては、昭和29年1月31日現在で作成されたものがあるが(慎獨会—OBの会—で配布されたもの)、これによると、昭和4年卒業の第1回生から昭和27年卒業生まで合計318名となっている。

補 足

- 寮の食事についての、槌田氏の記事「しかしここにも時代の波は押し寄せ、毎月1日の興亜奉公日(*)には朝のおかずは梅干だけであった。すでに昭

和 16 年の 1 月下旬からは、1 日 1 回代用食として米のかわりに、うどん・そばが供されるようになり、2 月には米の配給がさらに減って米食が 1 日 1 回となり、あとは、うどん・そばに雑炊と相成った。」

*「国民精神総動員運動」の一環として、昭和 14 年 9 月 1 日から、毎月 1 日をそう呼ぶことにきまった。具体的には、その日は、神社参拝、食事は一汁一菜、禁酒・禁煙などが奨励された。昭和 17 年 1 月 8 日からは、毎月 8 日の「大詔奉戴日」に切りかえられた。

補足 2

- 日曜には仲間とつれだつて、まだ武蔵野の面影を十分に残している周辺をよく散歩した。学校の前には千川上水が流れていたが、その源流を求めて終日歩き続けたこともある。その堤防に植えられていた桜並木の花時は見事であった。武蔵の校庭を流れる濯川(すすぎがわ)は、その上水の分流であった。
しかし千川上水も今は暗渠となり、桜も衰えて殆んどが切り倒されてしまった。寮のそばにはテニスコートもあり、放課後や休日にはよくテニスに興じた。
- 夏休や学期末の休みなどに、地方の自宅に帰省する楽しさはまた格別であった。
武蔵受験時ならびに入学までの休みには、大阪の自宅に帰り、家庭教師に英語の初歩を学ばされたりした。父に腕時計を買って貰ったのもこのころである。
尋常科 1 年(昭和 14)の夏休は、大阪に帰ったが、東京、大阪間は特急(つばめ号)でも 8 時間あまりかかった。
当時、父は府の警察部長をしていた。官舎は大阪城の近くにあり、自転車で大阪城周辺をよく乗り回した。
- 父が出張で上京したときは、神田の学士会館に泊まるが多かったようで、日曜などに寮にいる私と忠明を呼び出して食事をともにしたこともある。
- 尋常科 3 年(昭和 16)の夏休には甲府の自宅へ帰った。寮にいる間に父は

山梨県知事となり、家も甲府に引っ越されていた。甲府は盆地のなかにあり、夏は結構暑かった。市街を見下ろす愛宕山の頂きに大砲が据えられてあり、正午には号砲が鳴った。

- 太平洋戦争の始まる4カ月前で、米などは配給制になるなど、世情は緊迫していたが、その夏1カ月間、父は山中湖に別荘を借りた。旭カ丘の近くにあり、二間程度の小さな家である。叔父(風間)の一家(叔母、姪)も泊まりがけで何日か滞在した。午前中は英語、数学、物理などの宿題をやり、午後は湖上でボートに興じた。
朝の赤富士の美しさや、ボートが沖へ流される湖上の突風の怖さを知ったのもこの頃である。

補足3

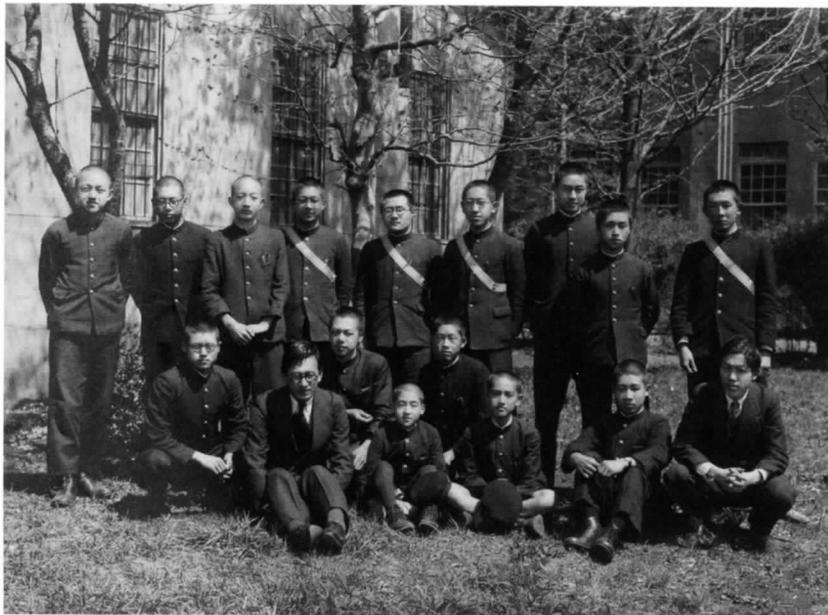
- 尋常科4年となった昭和17年は、前年末にはじまった太平洋戦争が、緒戦の勝利から次第に厳しさを増して来た時期である。寮の舎監も若い教師は応召し、残っていたのは、塚本、相原、紙田、佐藤の各教師で、紙田教師は陸軍の予備役少尉、佐藤教師は同じく准尉であったが、そのころ、舎監と最上級生であった私達4年生(13名)との間で寮の運営に関して真向から意見が対立する事件が発生した。
即ち、厳しい時局に鑑み、寮の日常生活に軍隊方式(起床後の点呼など)を取り入れようとした舎監と、それに反発して自治を守ろうという4年生との対立で、一時はかなり険悪な状態となった。しかし、結局4年生全員の連名の抗議文を舎監の前で読みあげた結果、塚本主任舎監の「分かった」の一声で舎監側が折れて決着がついた。

行 事

- 舎監とのコミュニケーションを図るために無邪志会(むさしかい)、向上会などがあつた。向上会は、毎週土曜の昼食後、南寮の大広間に寮生と舎監が集まり、寮生活の反省向上を図る会となっていたが、修身の教科書となっていた山本校長の「国民の教養」を講読するのが常であつたように思う。そのほか、次のような行事があつたが、それぞれ選ばれた委員によって企

画，実施された。

- 発表会。月に1度自由なテーマを選んで交替で発表する。ほかに、「雉の峙」と称した雑誌を数カ月に1回出した。これは各自が自由に書いた感想，隨筆，翻訳，研究などを原稿用紙のまま綴じたもの。また，各室に日誌が備えられており，毎日室員が交替でその日の出来事，感想，希望事項などを書き，週に1度舎監に提出した。これらは何れも戦災で焼失した。
- 討論会。年に1，2度テーマ(たとえば「精読か多読か」)をきめ，議長を選んでおこなった。
- 誕生祝会。大げさなものではなく，月に1回程度にまとめておこなわれた。夕食に赤飯が出され，舎監の挨拶のあと本人が簡単に挨拶をおこなった。
- 寒稽古。酷寒の1月に10日間，弓術と剣道の寒稽古が朝食前におこなわれた。「戦前の武蔵では毎年寒中の1月，10日間の早朝の剣道寒稽古を行ってきた。それは尋常科の寮である慎獨寮と剣道部との合同の行事で，朝5時30分から6時までが慎獨寮主催で，寮生全員が参加，続いて30分が剣道部の寒稽古で6時40分に終わる。
「……寒稽古の終わった土曜日の午後には納会があった。慎獨寮の寒稽古の納会で特筆すべきことは，参加者に日本刀での試し斬りをやらせたことであろう。湿った藁束が用意され，2束ずつ台に縛り付けられる。藁の1束は人の胴体に匹敵すると言われた。各人が順番に刀を渡され，これに向かって切り付ける。初心の者は跳ね返ったり，斜めに刀が「く」の字に曲がったりする。日本刀は柔らかいもので，曲がる代わりにすぐ直せることに驚いたものであった。」(武蔵「会報」第33号，武安義光氏)
- 断郊競走。4月頃におこなわれたが，あらかじめ知らされていない東京郊外の地点から寮まで，人に道を聞きながら走る競争。かなりきつかったが，印象に残る。
- アヤメ会。5月の節句に，剣道の紅白試合や試し斬りなどをおこなう。
- 試胆会。10月頃の夜，付近の墓地など数カ所に記帳所を置き1人ずつ回る。威しは自由。
- 宿泊旅行。修了生の送別をかねておこなったが，戦時色が濃くなった時期には中止された。



武蔵高校開校記念日、購買部委員と(43・4・17) 前列左から3人目、田沼

- また、地方からときどき上京し寮に立ち寄った父親に、夕食事に短い講話をして貰うこともあった。たとえば上田誠一氏(誠吉の父君)は、人生における「運・鈍・根」の重要性を話された。
- 行事の際には、寮歌「秩父の峰」を歌うのが常であった。その一節、
 秩父の峰に春来れば すすぎの小川水ぬるみ
 櫂の若芽芽え出でて いつしか青葉茂りては
 時鳥鳴く武蔵野に 健児四十のよりつどふ
 我が学舎はそびえたり

(たかの・もとあき／武蔵高校時代の同寮生、元・三菱信託銀行 部長)

*本稿は筆者が個人の記録として書かれたもので、いずれ武蔵高校の仲間の文集に載せる予定のもの。筆者の好意で初出。

調査統計局のなかま

浅野 径

私が、田沼肇さんと同じ商工省調査統計局(調統)に就職したのは、戦後の動乱が続いている1948年4月です。田沼さんと同時期であったことはずっと後になって知りました。

そのころの調統は、虎ノ門の焼け残った会計検査院にありました。天井の低い暗い庁舎でした。

山崎昌子さんの話によると、田沼さんは入省する前から何回か調統に顔を見せておられ、「あの人は誰？」と話題にのぼっていたそうです。

やがて、新宿区河田町に新しく建った庁舎に移りました。それまであちこちに離れていたらしい動態統計各課と調査課・基本統計課が一緒に引越した、河田町の四階建庁舎に調統が全部まとまりました。働く人は700人ということでした。新しい庁舎は明るく、のびのびした空気が流れておりました。働く人たちは、早くも地下ホールでダンスを踊る人、屋上に語らう人あり、そんな解放的な光景を見たことがない私には、それは驚きでした。

それから大分経ってからのことでしょうか、山崎昌子さん、上田栄蔵さんたちが屋上の部屋で、麻雀卓を囲んでいるところに、田沼さんが来てのぞきこみながら「やあ、亡国の遊戯をやっとるね」と聖人君子ぶってのたまったとか。

当時の公務員労働者を取りまく情勢は2・1スト中止以来きびしさを増しており、7月にはマッカーサー書簡の「公務員法を改正すること」をうけて「政令201号」が発せられ、スト権・団体交渉権が奪われました。

そんな情勢の中、全商工労働組会が結成されました。下部組織である調査統計局分会(以下調統という)も、新しい庁舎で活動を開始。「教養講座」が再開し、「社研」が始まりました。「教養講座」は基本統計課のHさんが「教養を高めるために勉強したい」と提案され、上杉正一郎さんの講師で週一回続けてきたもので、お話のおもしろさ、わかりやすさで人気が高く、知る人ぞ知る「調統名物」といわれていました。

田沼肇さんが講師の「社研」も週一回「民主主義革命」をテキストにすべり出し、むずかしいことをわかりやすく、熱をこめて話されます。あの時の、樋口一葉の「おほつごもり」を題材にとった日本の封建性、家族制度、女性の生き方の講義が心に残っています。

何と言っても「社研」で学んだ一番大きな財産は「社会は変えることができる」という生れて初めて耳にした理論です。厭世観に囚われていた私はここから変わった、忘れてはならない重要なことです。

私たちの年代は戦争中学徒動員されて、学校の授業が受けられませんでした。上杉さんも田沼さんも、このような私たちに、自分の考えをもって生きる道をひらく力を養うことを教えてくださいました。

職場の文集で

調統では、四つの課が自分たちの文集を発行していました。「紙風船」機械統計課、「筐舟」化学統計課、「ほたる灯」基本統計課、「かまど」化学統計課窯業第一係、以上の4誌です。

この「紙風船」に掲載された作品「大塩平八郎」をめぐる、田沼肇さんが、「作品『大塩平八郎』に対する感想」を『調統新聞』（元、通商産業省調査統計局細胞発行、1949年3月～1950年10月）に投稿して問題提起しました。これに対して作者の中原昭番さんが「『批評をよんで』をよんで」を同紙に投稿して、紙上討論が行われました。当然このことは各職場の話題となりましたが、時期が、首切り関係書類を当局が焼却するという緊迫した事態の直後であったためか、討論の展開を見ることなく終息しました。

しかし、こんなことはどの職場でもできることでしょうか。明るい民主的な職場をめざして活動していた調統分会だからこその思いを強くもちます。

田沼さんの問題提起の感想

〈……最後にこの号の最大の力作とおもわれる、創作「大塩平八郎」対して感想をのべておこう。私は史実をよく知らないから、批評などできないのであるが、とにかく器用にまとめてあるといえる。だが、一つ重要な点について私は作者と意見がちがうようだ。それは、平八郎が「おれは武士である

前に人間でなければならない」と考えて革命的な情熱をもつに至った所に重点をおいて書きはじめられたのであるが、後半分で作者自身の「革命家である前に人間でなければならない」というまちがった主観の方向に向けられたため、作品全体としての迫力が失われたことである。支配階級としての武士である前に人間であるということは、人民の立場に立つことを意味する。平八郎が「理性では解決したつもりでも、感情はそう簡単に理屈通りに動くものではない」というような状態だったとしたら、彼はまだ支配階級のシッポを長くひいていたのであって、そのためにこそくるしんだのだ。

だからリエの名も「わすれようとつとめ」「うごめく暴状を無理におしころして」彼女をさげよとした平八郎のくるしみが、単に革命家としての平八郎の人間的な弱みだというように描いたのではまちがいだ。平八郎の人間的な、というより世間的なくるしみが、革命家としての彼の成長にとってどのような妨げになり、またそれをいかにのりこえたかを描いてもらいたかったと私は思う。）

首切り関係書類を焼却させたこと

5月23日、首切り名簿を破棄するのだとつめかけた職員で、定刻の2時には広い局長室も埋めつくされ、入り切れなくてあふれた人々の注目の中に交渉が開かれた。(略)

当局側からは、今までつくられたのは首切りのある場合にそなえた調査資料で、名簿でないことが繰り返しのべられて、公開要求と鋭く対立し交渉は行きなやみ、集まった全員に重苦しい気分を与える。(略)

こうした空気の中で組合側は「公開は要求しないから一切破棄してもらいたい」という本来の要求に変わった。

田沼さん、川井さんあたりが力をこめて説明する。「組合としては、そういう書類が新任者にうけつがれては悪用されるおそれがあって困るのだ。新部長に、前任者がつくった資料だからとけられても責任の追及ができない」(略)

全員がかたずをのんで見守るうちに、しばらく考えた局長は、はっきりと回答した。

「私のやったことが組合側の不利になるというなら止めます」

瞬間、人々の緊張はほぐれ、明るい表情がどっとふきあふれる。

「事務引継ぎには、首切り準備の調査はやられていないこと、今後実際に人員を整理する時は組合と協議すべきこと、を入れましょう」と局長は確約する。

書類一切は拍手の中に組合執行部の面々につきそわれて、小雨の降る中庭にもち出されて火がつけられる。細い雨脚の中を白い煙が立ち昇る。窓という窓から顔を出した職員の明るい顔・顔・顔。だれにも微笑があふれる。時に4時10分であった。(『調統新聞』から)

10名に、定員法で首切り通告

8月15日、調査統計部長から組合に対し首切りの通告が行われた。内容は左のようである。「調統の現員741名に対し、整理後の定員671名であり、差引70名が整理人員である」

調査=田沼肇 土方鉄之進 山崎泉 小宮山淳貴

基本=上杉正一郎 川井利長 小平慶次郎

化学=上田栄蔵

機械=三上良悌 本間光子

上記の10名に対して各課長から退職届を、16日正午までに出すよう勧告された。

10名は全員退職勧告を拒否した。

上杉、田沼、上田、本間の4名は、16日午前から、ハンスト坐りこみに突入した。(『調統新聞』号外)

「調査統計局の入口の土間に坐りこんでハンストですから、全職員が毎日2回はハンストしている4名の前を通るので、局全体に大きな論議をよびおこしました。その中でも上杉さんは、4名だけの闘争にならないように、とくに職場への宣伝や、交渉などに配慮している姿が印象的でした」(上田栄蔵さん=『追悼上杉正一郎』)

ハンストには、上杉さんのご母堂、医師の昌子夫人が注射器を携えて、上杉さん宅の近所の方々が何人もかけつけてこられ、成りゆきを案じて見守り

つづけました。

のちに田沼さんが語るように「庁舎の前にぎっしり数百人のすわりこみがあった。『上杉さんが死んじゃう』というので、私なんかメジヤなかった」ということでハンストは3日後終わりました。

このようにして、頼りにする上杉さんや田沼さんたち10名が去りました。その後も調統分会は全商工労組の先頭に立って危機突破資金5000円獲得をねばり強く闘いました。この闘いの最中の6月25日に朝鮮戦争が勃発し、28日から新聞、放送を皮切りにレッド・パージがはじまりました。11月4日、通産大臣は全商工に対して一方的にレッド・パージを行う旨を通告、これは「赤の追放であって組合とは無関係だ」と団交を拒否し、組合の弾圧を進めてきたのです。

以来60年のときが経ちました。

調統のなかまが共に働き共に闘った年月は、わずか2年4カ月ですが、職場の要求、賃金闘争、朝鮮戦争反対、民主主義擁護の運動に、一人ひとり全力をそそいで活動しました。おのおのの人生途上に、あれほど燃えて打ちこんだときはなかったと思います。

田沼肇さんはいつも闘いの中の私たちと一緒にいて、むずかしい局面には方向を見出すリーダーでした。加えて、調統分会誕生の時期に田沼さんが積極的に流しこんだ民主主義の新しい気風が、職場の働く人を元気づけた功績の大きさに思いをいたします。

私たちが、はげしくきびしい闘いの中で、お互いに頼りあい助けあって紡いだきずなの強さは今も弱まらず、これを上杉さんは生前「30年も経ったから、いろいろ変わったけれど、何となくみんな話が通じるみたいだね。いろんな、活動をやめた人も、仲よくやっているし……」（『追悼上杉正一郎』）と語っておられます。

これからも大切にしたいと心から願っています。

（あさの・こみち／調査統計局時代の同僚、2010年8月15日）

田沼 肇 アルバム



生後100日(7・27)

おばあちゃんが訪ねてこられた時、桐生の家で(1926・7・10)

田沼肇 略年譜

1926(大正15)年4月19日 群馬県桐生市生れ
1933～39(昭和8～14)年 青山師範附属小学校
1939～43(昭和14～18)年 武蔵高等学校尋常科
1943～45(昭和18～20)年 武蔵高等学校文科
1945～48(昭和20～23)年 東京(帝

国)大学経済学部

1948(昭和23)年4月 商工省調査統計局に勤務
1950(昭和25)年4月 法政大学大原社会問題研究所入所
1955(昭和30)年 原水爆禁止運動に参加
1963(昭和38)年4月 法政大学社会学部助教授
1964(昭和39)年4月 同、教授
1970～71(昭和45年度)年 同、学部



青山師範学校附属小学校進級記念(35・4・4)

長、同大評議員

1972(昭和47)年 日本フィルハーモニー交響楽団争議支援運動に参加

1978～81(昭和53～55年度)年 法政大学社会学部長、同大学評議員

1981(昭和56)年2月 平和と革新をめざす東京懇話会世話人

1983(昭和58)年 原水爆禁止日本協議会代表理事

1987(昭和62)年秋 パーキンソン症状を伴う進行性核上性麻痺を発症

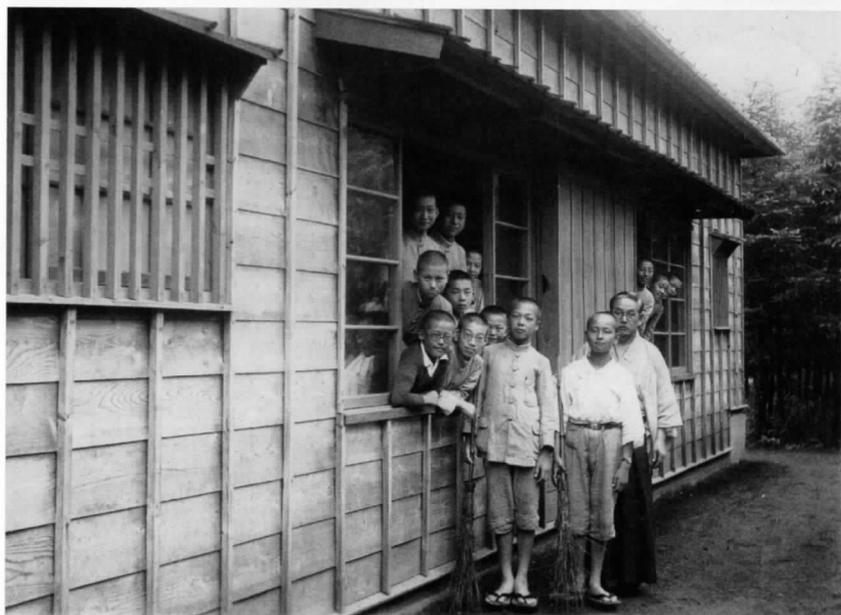
1993(平成5)年3月 法政大学退職

1994(平成6)年3月18日 東京都重度心身障害者手当受給資格の非該当決定に異議申立

1996(平成8)年10月8日 東京地方裁判所に処分取消しの行政訴訟を提起

2000(平成12)年3月17日 最高裁判所で上告棄却の判決

2000年8月9日 55回目の長崎原爆記念日に永眠



〔上〕千葉県銚子，犬吠岬で妹，弟と('35・4・4)

〔下〕青山師範学校付属小学校・青山寮での生活。前列中央が田沼('39・7)



武藏高校，慎獨寮積翠園で第7室員と，後列右端が田沼('42・5・30)

田沼さんの優しさと強さ

橋本 進

端正な風貌，毅然とした姿勢，おだやかでやわらかな語り口——，田沼肇氏はいまも私のなかに生きている。

私が田沼さんと親しく接するようになったのは，雑誌『中央公論』の編集者としてであった(1948年，同社入社)。だが私は，早大生であったころから，田沼さんの存在を知っていた。敗戦直後の時期，恩師・松尾隆教授が各大学の学生たちの動向を語り，すぐれた学生を例示したが，そのなかに田沼さんの名があった。「東大に田沼あり」と強く印象づけられた。

私の編集者としてのかかわりは，天達忠雄「銀行員——変貌するサラリーマン」(『中央公論』1955年6月号)からである。この調査報告は天達氏の名で発表されたが，その調査研究過程に，社会階層としての「中間層」研究者として，田沼さんほか数名に参加していただいたのであった。

現実を事実に即して解明

1956年のスターリン批判ののち，論壇に「大衆社会論」が登場した。戦後日本社会をどうとらえるかという視座をめぐる鋭い問題提起であったが，そのなかには，もはやマルクス主義は役に立たないという論調も現れた。マルクス主義者の側からの反批判が行われ，大衆社会論争となった。私は田沼さんに「日本における『中間層』問題」(『中央公論』1957年12月号)，つづけて「戦後日本の労働者意識」(同1958年8月号)を執筆していただいた(当時，氏は法政大学大原社会問題研究所員)。マルクス主義の立場からの反批判であるが，田沼さんは後者の論文でつぎのように書いている。

自分は最近，「中間層」問題を積極的に研究しているが，それは大衆社会論との論争を直接の目的としたわけではない。「『中間層』問題の研究が，わが国の労働者階級のおかれている複雑な客観的条件ならびに主体的条件を，事実にもとづいて明らかにしてゆく仕事の一環として，重要な意味をもつと考えたからにはほかならない」(傍点・引用者)

この言葉に、田沼さんの生涯に一貫した学風、学問姿勢が表現されているように思えてならない。二つの論文は、ともに論争にかかわっていたが、それは「反論のための反論」ではなかった。大衆社会論の提起した問題を正面から受けとめつつ、独自に日本社会における階級・階層の動向を具体的に分析・考察した論文であった。批判に対して機械的に反発せず、自ら解くべき課題として受けとめる誠実さ、日本の現実を事実在即して解明していく論述に、私は感銘を受けた。

学生時代、田沼さんは大河内一男教授指導のもとで、敗戦直後の壕舎生活者の実態調査に参加、「事実を明らかにして、議論を組み立てていく方法を学んだ」（『私のなかの平和と人権』草の根出版会、1995年。以下、引用は同書から）と語っているが、この学風は生涯変わることはなかった。

人権と自由、理性と知性の日本へ

田沼さんがかくも事実の追及を重んじた理由は、その絶えざる現実への関心にもとづいている。「がららい学問は、現実を変革していくためにこそ、誕生し、成長してきた」。だから、「学問は、現実の変革を志向しなくなったとき、死んでも同然である」。では、なんのために現実の変革を志すのか。それは人間が人間らしく生きることができる社会をひらくためである。「社会の進歩と歴史の発展に、いいかえれば労働者と人民の解放のために」変革を志向するのである。

田沼さんより一歳年少の私には、この考えの道すじはわがことのように理解できる。戦争と軍国主義が最高潮に達した時期に、私たちは青春を迎えた。野蛮、残酷、人権や理性を無視どころか敵視さえした日本軍国主義の体験から、敗戦を機に、私たちは人権と自由が花を咲かせ、理性と知性が輝く日本をめざしたのであった。社会科学を志した田沼さんが、専攻として労働運動・社会政策を選んだのには、こうした思いがあったのであろう。

だから田沼さんは、学園に閉じこもることはしなかった。労働の現場に足を運び、組合活動家と語り合い、労働者教育に精力を傾けた。労働と労働運動の現場から学ぶことを怠らなかつた。そのような田沼さんの下に、「労働運動の内側」で研究・実践する、「従来の意味でのアカデミーに属してはい

ないが、新しいタイプの研究者」集団が形成された。1993年、田沼さんの編で、上記集団の労作『労働運動と企業社会』（大月書店、以下引用は同書から）が刊行された。87年ごろ発病した難病は進行し、すでに身体が大きく奪われていた時期である。田沼さんは本文中で、「われわれのすんでいる市民社会をリアルに」とらえるための理論作業は、「企業社会論へと凝縮」してきたが、「それに大衆社会論や帝国主義社会状況」の分析が加えられ、豊富化されてきたとの旨を述べ、はしがきで「本書を手始めとして、労働者の全生涯にわたる生産労働、消費生活、文化を豊かにするための理論に、ささやかでも寄与してゆきたい」と記している。田沼さんの生涯を貫いた願いである。

被爆者とともに

ビキニ水爆被災を契機に発足した原水爆禁止運動（1954年）に、田沼さんは当初から参加、社会学者として運動に貢献した。広島・長崎の被爆者実態調査、『原爆白書——隠された真実』（1961年）の共同研究・執筆、自身の著書『原爆被爆者問題』（新日本出版社、1971年）、『ビキニ水爆被災資料集』（1976年）の編集・執筆、「国際法違反の原爆投下の賠償請求権の放棄責任」「原爆投下をもたらした開戦責任」「被爆者放置責任」を解明し政府に被爆者への国家補償を求める「被爆者救護法大綱」の作成（1973年）、「核兵器完全禁止の国際協定締結をめざす長崎アピール」の起草（1973年）、NGO 被爆問題国際シンポジウムの開催（1977年）等々。

「原水爆禁止の活動家は、被爆者を友人にもつこと」「被爆者とともに」は、田沼さんの口ぐせであったが、長崎の被爆者・渡辺千恵子さんは親友であった。私も田沼さんや梅津勝恵さん（門下生、草の根出版会社社長）を通じて千恵子さんと友人になった。1982年4月末～5月初、私は梅津さんとともに、千恵子さんの北海道^{かんぞう}平和行脚に同行した。1945年の被爆以来、下半身不随の重度障害者となった千恵子さんは、毎年^{かんぞう}の原水爆禁止世界大会（第2回の1956年以降）に参加する日以外は、母の看病、介護を受けながら、自宅の一室で寝たきりで過ごしてきた。1977年、建築学者・日比野正己氏らのグループの支援で、千恵子さんの自立した行動を可能にする住居改造、車椅子調



長崎の渡辺千恵子さん宅で歓談('77・8・10)撮影・森下一徹

練が開始された。車椅子での外出行動がはじめて可能になったその年(1978年)、千恵子さんはジュネーブのNGO軍縮会議に参加、1980年に日比野さんたちと沖縄訪問、そして1982年の北海道旅行となったのであった。だからこの旅は、「平和・反核」を訴える旅であったが、千恵子さんにとって「生きるよろこびをかみしめる」旅でもあった。旅中、田沼さんが話題になることがあった。その口調から私は、千恵子さんの田沼さんへの限りない信頼と敬愛の気持ちを知らされた。

身についた女性解放論

田沼さんの編著のひとつに『現代の婦人論』(大月書店、1975年)がある。科学的社会主義者・田沼肇が女性解放論者であったことはいわば当然だが、私には、田沼さんの女性問題への関心は理論上の帰結であったというだけでなく、生活者・田沼のごく自然な結論だったように思われる。田沼さんにはファンとっていいほどの女性支持層があったが、それは氏が付け焼き刃的

フェミニストではなく、生活者として男女共生・共同の道を歩む人だったからであろう。

語り口さながらに、田沼さんはやさしい人柄であった。だが、そのやさしさは強さにもなった。東京都重度心身障害者手当受給を申請(1993年)、まったく非合理・非人間的判断で「非該当」との認定、異議申立て、却下(1994年)。そこでこの却下に対し、手当支給を求める行政訴訟に踏みきる(1996年)。すでに難病は進行し、^{はなめ}傍目には出廷など無理とみえる時期にである。おまけにこの種の行政訴訟は、提起する市民の側の勝算はきわめて乏しいという日本の裁判所の状況下にある(私は、1986年以来、「横浜事件」再審請求にかかわってきた。太平洋戦争下のこの言論弾圧事件が、当局によるフレームアップだったことは、現代史家の100パーセントの定説であり、世間常識でもある。したがって再審申立て、即再審、即有罪の原判決取消しとなって当然なのだが、日本の裁判所の実態ではそうはいかない。第1次、第2次いずれも、地裁、高裁、最高裁で却下。現在、第3次進行中、第4次を2002年3月15日に申し立て)。

いつも「被爆者の身になって」行動してきたやさしさは、自らも障害者となり、行政によって障害者としての権利が傷つけられたとき、自らの権利とともに、すべての「障害者の身になって」その権利と社会保障・福祉行政は正のために闘うという強さになったのである。

現代医学をもってしてもいまだに病因不明、効果的治療法も未解明という難病に冒されながらも、田沼さんは医師の常識を超えて、13年もの充実した人生を送ることができた。それは祥子夫人をはじめとする多数の人々の熱い支援ぬきには考えられないことであるが、以上にみたような田沼さんの人生観、人生姿勢がそれを可能にしたように思えてならない。闘病とは医師の指示に忠実に従い、苦痛に耐えるということだけではあるまい。現実を見すえ、変革の意志を失わず、したがって生きる意欲を失わずにいることが、最良の闘病方法だったともいえるのではあるまいか。

*田沼祥子・文/田邊順一・写真「いのち抱きしめて—在宅介護13年」(日本評論社、2002刊)から再録

(はしもと・すすむ/元・日本ジャーナリスト会議代表委員)